【IS】一夏を男の娘にし、かつ中学まで蘭と同じ学校に通わせるとこうなった。

うりー先輩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【ＩＳ】一夏を男の娘にし、かつ中学まで蘭と同じ学校に通わせるとこうなった。

【Ｎコード】
Ｎ１９８２Ｗ

【作者名】
うりー先輩

【あらすじ】
『・・・セシリア「変態奴隷、足をなめなさ～い」
一夏「・・・はい、、ご主人様・・・はむ、、ちゅ、ん、、ちゅぴ」
セシリア「つくづく変態ですわね、あなたは。女の子の足をなめて興奮していらっしゃるの？」
一夏「ち、ちが」
セシリア「誰が止めていいと言いましたの！！」
一夏「す、、すみません、、ん、ちゅ、、はむ、、ちゅ、」・・・』

セシリア「１１／０６今こんなかんじですわ」
一夏「、、お恥ずかしながら、、こんなかんじです、、」
蘭「ち・が・い・ま・す・よっ！！！一夏さん否定してください！！」
セシリア「真相はクリックしてご確認することですわ」
一夏「ご、ご主人様ぁ」
セシリア「まだダ～メ、、ちゃんと我慢出来たらご褒美をあげますからね」
一夏「うぅ～、、もう、がまんできないよぉ、、」
蘭「クリックしたらアダルトサイトに飛ばされそうなあらすじだ・・・」
一夏「や、、もう、、だめぇ、くる、、きちゃう！！」
セシリア「ふふふ、もう少しだけ我慢してくださいなっ」
蘭「ちなみにこれは一夏さんの演技なので、実際はなにもしてないです」
一夏「続きは番外編で」
セシリア「むしろ番外編の続きがこれのような気もしますが」

繊斑一夏君によるジャグリング道具紹介ｗｉｔｈ蘭さん（前書き）

本編８話くらいまでを読んでからこれを読むことをお勧めします

織斑一夏君によるジャグリング道具紹介ｗｉｔｈ蘭さん

一夏「織斑一夏によるジャグリング道具紹介～、いえ～い」

蘭「い、いえ～い？」

一夏「じゃ、さっそく始めてくね、このボールなんだけど」

蘭「って！ちょっと待ってください！何なんですか？！この謎コーナー！？」

一夏「謎コーナーって・・・っあ！そっかまずはジャグリングとは何かっていう所から説明しなきゃね！」

蘭「そうですよ、大体ジャグリングって何なんですか、、、ってストップ！ストーーップ！そういうことじゃなくてですねっ！このコーナーの存在意義を私は問うているんですっ！？」

一夏「存在意義は『物語を１，１倍楽しむための』だよ。上に書いてあるじゃないもうっ。」

蘭「１，１倍ですか・・・そもそもなんでジャグリング？」

一夏「え？知らなかったの？僕ジャグラーだよ、本編の第６話でも『趣味はジャグリングだぜ』っ言ってたでしょ。」

蘭「そ、それはそうですけど、、、突然過ぎて頭がついていけないというか、、、なんか腑に落ちないというか・・・」

一夏「よぉし！蘭ちゃんの了承を経たからさっそく紹介していくよー！」

蘭「ええっ！？無視！？私の意見はっ！？」

一夏「まず、なんでこんなコーナーが存在するかというと」

蘭「これ、はじめのくだり必要だったのかな・・・」

一夏「本作の一夏君はジャグラーです。となると必然的に僕がジャグってる時の他のキャラクターとからむ時が出てきます。」

蘭「なるほど、なるほど。」

一夏「そんな時、いきなり『ハイトスからエクスカリバーまでおよそ僕が１ディアで出来る全ての技を終え、デヴィルスティックへと道具を変えた。』とかいう文章が出てきたら意味わからないよね。」

蘭「たしかにっ！それは意味がわからない！エクスカリバーってなんですか！？」

一夏「でしょ。だからこのコーナーは必要なわけです。まあ単純に読者の人にジャグリングに興味を持ってほしいっていう心もあるけどね。」

蘭「へー、一夏さんにしては真面目な心構え。」

一夏「失敬な。僕はいつだって真剣だよ。」

蘭「あはは、すみません。ところで一夏さんがさっきさりげなく言った『ジャグってる』っていうのは、『ジャグリングをしている』という意味でオッケーですか？」

一夏「そう『ジャグる』は『ジャグリングをする』の略語だね、というかこんなもん日常会話でも使うから誰でも知ってるでしょ。」

蘭「・・・（使わねーよ。」

一夏「はーい、というわけで場所を移動しましたー。」

蘭「何の変哲もない公園ですね。（今まではどこで話してたんだろう・・・」

一夏「そう公園です、どんなジャグリングをするにしても広いに越したことはないんだぜ。」

蘭「なるほどー、一夏さんもいつも公園で練習してましたもんね、初めて見たときは何モンだあいつって思いました。」

一夏「僕と蘭ちゃんの出会いが公園から始まるってネタバレしちゃったね。」

蘭「・・・シマッタ、、、さぁ始めていきましょう！最初の道具はなんですかーーー！？オラわくわくするぞーーー！」

一夏「テンションで押し流したな。
まあいいや、最初の道具はこれです。ジャジャーン」

@箒「なお、作者の文章力では、道具の形状、使い方、魅力、等すべてを説明しきれませんので、お手数をおかけしますが、出てきた単語を随時、ググる、ヤフる、などして脳内補完をお願いいたします。動画サイトを利用しますとさらに理解が深まると思われます。

作者
代理篠ノ之箒より」

蘭「おお！手のひらサイズに収まる低反発なボールですね！なんと落としても転がりません！」

一夏「説明ありがとう、蘭ちゃん。そう、言わずと知れたジャグリングの王道『ボール』です。『ボール』と言ってもそのジャグスタイルはいろいろありまして、もっとも一般的な複数のボールを空中になげる『トスジャグリング』、体の上を転がしたりして不思議な動きを演出する『コンタクトジャグリング』などなど。」

蘭「へぇ～・・・っあ！もしかしてコンタクトジャグリングってあれですかっ！最近テレビでよくやってる水晶玉みたいな物が浮いてるように見えるやつですかっ？」

一夏「その通りです。それがコンタクトジャグリングの代表的なものです。
ちなみに、トスジャグリングにしてもコンタクトジャグリングにしても何もボールだけとは限りません。クラブ（ボーリングのピンみたいなやつ）を投げる人もいるし、リングでコンタクトする人もいます、やかんを投げる人もいます。」

蘭「なるほど、では『ボール』の『トスジャグリング』ではなく『トスジャグリング』の『ボール』と言った方が適切ですね。」

一夏「覚えが早くてよろしい。ちなみに僕が練習してるのはトスジャグリングの方ね。普通にボール投げるよ。」

蘭「やって～、ボール５個で回して～。」

一夏「はい、でましたー。ジャグ練習中に友達に出会った時の典型的な友達の反応ーその１～。
ボール５個でやって～とか言っちゃうー。」

蘭「ええっ！？いけなかったですか？」

一夏「・・・いいや全然悪くないんだ。悪くないんだ・・・けどこれだけは覚えておいてほしい。トスジャグリングはボールの数が全てではないということを。ああ、もちろん数が多いというのはすごい。迫力があるし、難しいし、、、でも数が少ないのがショボいという訳ではないんだ。３つでもコンタクト要素を絡めたり、体の後ろ側を使ったりといろんなことが出来る。
それと、、、ジャグラーがみんなボール５個を回せるとは思わない

でくれ、、、、後輩。」

蘭「す、すみません先輩、、、（何か悪いこと言っちゃったな・・・」

一夏「ああ、次の道具へ移ろう。次紹介するのはこれです！ジャジャーン」

蘭「ああ！それ知ってます。中国ゴマですよね、大道芸人がやってたの見たことあります。」

一夏「そう、これも有名だね。中国ゴマです、一般的に『ディアボロ』といいます。
二本のハンドスティックにつながれた紐で、ディアボロの中央狭くなった部分に摩擦を与え回転させます。技の種類が豊富で迫力もあるから、多くのジャグラーに好かれているよ。きっと、誰もが一度は見たことのある道具ではないかと思います。」

蘭「投げて～、めっちゃ高く投げて～。」

一夏「はい、でましたー。ジャグ練習中に友達に出会った時の典型的な友達の反応ーその2～。
ディアボロを全力で投げてとか言っちゃう～。」

蘭「ええっ！？またダメでしたか！？」

一夏「いや、今回はそれで正解。蘭ちゃんがやってと言った、ディ

アボロを投げ上げてキャッチする技、それをハイトスって言うのだけど、この技はめちゃくちゃ簡単です。センスがいいとディアボロをはじめて1週間くらいで習得できます。よほど、ディアボロの練習を始めたばかりではない限りの誰もが出来る技です。」

蘭「そうなんですか、難しい技だと思ってました。」

一夏「そう、だからディアボロを練習している友達を見つけたら『投げて～めっちゃ高く投げて～』と言いましょう。大概の場合は投げてくれると思う。そして成功した時には『すげ～マジすげ～』などと大げさにリアクションをすること。そうしてくれると、ジャグラーとしてはすごくすごく嬉しいら。」

蘭「了解です。今度からそうします。」

一夏「そしてディアボロは何も1つでするとは限りません。2つ、3つ、すごい人は4つで回したりもします。一般に1つでするディアボロを『1ディア』、2つは『2ディア』、3つでは『3ディア』と言うよ。」

蘭「ということは、1つのディアボロで出来る技の中に『エクスカリバー』というものがあるのですね。」

一夏「そゆこと。じゃ、実際にエクスカリバーを実演してみるよー。ちょっと離れててね。」

蘭「はーい。」

一夏「まずは、ウィップで加速して」

蘭「早速、わからない言葉出てきちゃったけど面倒なので飛ばしまーす。」

一夏「そしてチャイニーズアクセラレーションの変形から・・・」

蘭「おお！なんかすごいことになっていまいます！！ディアボロの回転の向きがおかしいです！！」

一夏「エクス・・・カリバーーーーーーーーーーーーーー！！！！（サン↓ターン↓ジェノサイド）」

蘭「す、すごい、、、一瞬、片方のハンドスティックが一夏さんの手からが離れました。一夏さんの半径2メートル以内に重力は働いていないのか・・・。」

一夏「と、まあこんな感じです。実はエクスカリバーっていうのは技名じゃなくて、ディアボロの回転軸を傾け、縦回転で行うスタイルことを指します。ホライゾンやバーティカルとも言います。」

蘭「いや～、すごかったですよ。エクスカリバーという名前が付くのも納得です。
ところで、一夏さんが出来るということは、私たちの中の人も出来ると考えていいんでしょうか？」

一夏「どうなのかな@箒さん？」

@箒「真相は作者のブログからどーぞ。下のアドレスから・・・」

ｈｔｔｐ：／／ｊａｇｕｒｉｎｇｕｓｙｏｕｋｏｕｇｕｎｎ．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／

蘭「いい感じに宣伝をしつつ、逃げましたね～。」

一夏「ブログまだ作ったばっかりだけどねー。」

一夏「はい、次の道具はコチラ！じゃじゃーん！」

蘭「タネも仕掛けもなさそうな棒が３本ありますー！１本は７０センチくらいで、太さは五百円玉の直径くらい、中心に行くにつれ段々細くなっていますね。もう２本はセンチと前者より短めの４５センチほど、太さも平坦でドクターグリップのシャーペンほどしかありません。３本とも表面がゴムっぽくて摩擦が強くなっていますねー。」

一夏「説明ありがとー。これを『デヴィルスティック』といいます。」

蘭「また、大それた名前ですねー。」

一夏「みんなそう言いいます。言葉で説明するのは難しいので実演しまーす。」

蘭「いえーい！」

一夏「まず短い方のスティック２本を左右の手で一本ずつ持ちます。短い方のスティックを『ハンドスティック』といいます。」

蘭「ほうほう。」

一夏「そして、長い方の棒、これを『センタースティック』というのですが、地面に立てたセンタースティックを左右からハンドスティックでコンコンと交互に叩きます。すると・・・・・・」

蘭「すると・・・・・・？」

一夏「ハンドスティックにコンコンと叩かれたまま、センタースティックが空中に浮きます。」

蘭「おおーー！！すごいです浮いてます！まるでメトロノームの針のようです！！」

一夏「この状態をアイドリングと言いまーす。アイドリングを基本に様々な技が存在するよ。」

蘭「へぇー、不思議な動きですねー。このスティックたちの名前に『デヴィル』が付くのもわかります。」

一夏「でしょでしょ。」

蘭「でも、アイドリング状態なら私だって出来ま」

一夏「はい！出ましたーー！ジャグ練習中に友達と出会った時の典型的な友達の反応ーその3～！
デヴィルスティックのアイドリング状態出来るとか言っちゃう～！」

蘭「まだ言い切ってなかったのにっ！？しかも今回は妙に気合が入

っている！」

一夏「いいですよ～、出来るって言うならやってもいいですよ～。」

蘭「むむー！その挑戦受けて立ちましょう、やってみせますよ！」

一夏「どうぞ、どうぞ～。」

コン、コン、コン、ポテッ↑センタースティックが落ちた音

コン、ココン、ポテッ

コン、コン、ココン、ポテッ

コン、コン、コン、コン、ポテッ

蘭「なん・・・・・・だと。」

一夏「っと、まあ簡単そうに見えて難しいんですよ。デヴィルスティックは。」

蘭「くそぅ、、、ちきしょう、、、腰が痛いぜ。。。」

一夏「みなさんもデヴィルスティックを練習している友達がいたら、挑戦させてもらいましょう。多分、蘭ちゃんと同じようにできません。長時間すると腰が痛くなるのでご注意を。」

蘭「むうー。くーやーしーいー。」

一夏「ちなみに、センタースティックにあたる棒は『デヴィルスティック』でなくても可能です。センターにデッキブラシを立ててコンコンとしても持ち上がりますし、モップやコーンでも持ち上がります。およそ細長いものであればなんでもセンタースティックになると言っても過言ではありません。」

コン、コン、ポテッ↑まだやってる

3分くらいして

一夏「よーし！これで最後の道具だよー！ジャジャーン！」

蘭「腰が、、、腰が、、、、痛い、、、、。」

一夏「はいはい、シャキッとして。もう一回やるよ。」

蘭「は、はいぃ。」

一夏「これで最後の道具だよー！ジャジャーン！」

蘭「おお！なんですかこれ、見たことありません！そして形も説明しづらいです！今回ばかりはググってもらうしか・・・」

一夏「じゃあ、ググってるという前提で話をします。」

蘭「こころ優しい読者のみなさん、やほーでもゴーグルでもいいので検索してください。お願いします・・・」

@箒「作者のブログに来てもらえば画像が・・・下のＵＲＬから・・・」

ｈｔｔｐ：／／ｊａｇｕｒｉｎｇｕｓｙｏｕｋｏｕｇｕｎｎ．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｂｌｏｇ－ｅｎｔｒｙ－４．ｈｔｍｌ＃ｍｏｒｅ

蘭「また、いい感じに宣伝をいれてくれますね～。」

一夏「もう最初っからブログの宣伝をしてればいいのに・・・」

一夏「気を取り直して、これが僕の本職『ポイ』です。ローマ字表記にすることもあります。」

蘭「ぽいですか？どうみてもこれでは金魚はすくえない気がするんですけど・・・」

一夏「そっちのポイではなくてですね、、、」

蘭「あははーすみません。」

一夏「もうっ、実演するよ。この紐の先端についたハンドルに指を通してですね、、、」

蘭「通して・・・」

一夏「このように、振り回します。」

蘭「おおっ！すごい！テール部分が綺麗な軌道を描いています！文章ではそれくらいしか伝えることが出来ない！動画サイトで確認してとしか言えない！！」

一夏「だよねー。僕が知っている中で紹介するとニコ〇コ動画の方に一人、すっごーーく上手い方がいるよ。作者ではないです。興味があったら探してみてください。その際、動画が荒れる原因となるようなコメントはしないこと。」

蘭「『～から来た』っていうやつですよね。」

一夏「その通り。ではポイの話に戻ります、ポイにもいろいろな種類がありまして、テールのついた『インフィニットポイ』、『ウルトラポイ』、テールのない『ベーシックポイ』、『ソックスポイ』、『フラッフィーポイ』、そして『ライトアップポイ』に『ファイアーポイ』などなど。」

蘭「へえー、大体名前から想像がつきますね。一夏さんがさっき実演したのは？」

一夏「インフィニットポイだね。個人的にはストラトスポイとも呼んでるけど。ちなみに、さっき紹介した人は、ウルトラポイ、ライトアップポイを中心に動画を投稿している人だね。」

蘭「ほほう、ファイアーポイっていうのは文字通り・・・？」

一夏「そう、文字通り火をつけて振り回すポイのことだね。某動画サイトにもその映像がたくさんアップされているよ。」

蘭「ふぇー。いろいろあるもんですねー。」

@箒「練習する際に注意することおおおおおおおおおおおお！！！そのいちいいいいいいいいいいいいい！！」

一夏「うわっ！いきなり変なテンションで出てこないでよっ！」

蘭「び、びっくりです、、、」

@箒「メガネは外すことおおおおおおおおおおおおおおおお！！さもなくばぁぁぁぁぁぁぁぁっぁ！！貴様のメガネのサイズが一回り大きくなっちまうぞおおおおおおおおおおおおおおお

一夏「そうそう、ファウンテンしながらターンすると危ないことがある。」

@箒「そのさんーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！男は・・・・・覚悟しておけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

蘭「これは当たる部位が・・・」

一夏「だれでも一回はやったことあります。」

@箒「これにて失礼させていただきます。作者のブログを訪問されるともっとポイに関するお話が聞けるかも・・・下のをコピーして貼り付けてもらうと・・・」

ｈｔｔｐ：／／ｊａｇｕｒｉｎｇｕｓｙｏｕｋｏｕｇｕｎｎ．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／

一夏「まだ宣伝するか。この野郎」

蘭「あははー、なんで箒さんが作者代理役なんでしょうねー？」

一夏「本編でもキャラ崩壊しすぎて使いやすいからでしょ、まったく。」

蘭「妙に真理をついている。」

一夏「はい！これにて第一回織斑一夏によるジャグリング道具紹介はおしまい！」

蘭「おつかれさまでしたー。」

一夏「まだまだ紹介してないジャグリング道具もあるけど、これは一夏君が嗜んでいるジャグリング道具っていう設定だから、問題なし。」

蘭「それにしても、いろいろありましたねー。興味が湧いた人は『ナランハ』で検索～。」

一夏「ポイの練習は@箒さんが言ったことを充分に注意すること！」

蘭「本編の方もよろしくお願いしますねー。」

一夏「僕とセシリアが姉さんに決闘を申し込んだってところだね！」

蘭・一夏「「では、さよーならーー」」

織斑一夏君によるジャグリング道具紹介ｗｉｔｈ蘭さん（後書き）

割り込み投稿は時間が反映されません

だからこんな位置に非本編があります

すみません

1話だぜ

目を開けるとそこには、見慣れた天井があった。規則正しく並べられた木製の板。

――――――――いつもながらすごくリアルだ

首を傾けると、そこには愛用の目覚まし時計があって、

――――――――まるで現実みたい

さらにその先にある窓からは隣の家の屋根瓦が見える

――――――――いや、まぁこれは僕がよく見る夢なんだけどね

朝の音が聞こえる。小鳥のさえずり、僕よりはるかにはやく起きるチビッコたちの楽しげな笑い声

――――――――なんで夢ってわかるかっていうと、さっき死んだからかな、

あともう慣れたから

体を動かそうとするけど、思うようには動かない

――――――――あぁ、はーやーくーおーきーたーいー
動けーー僕のカラダーーー
ようやく起き上がる、視界が追いついてこない、頭がクラクラする
――――――――って、今日蘭ちゃんと出かけるんじゃなかったけ？
ヤバイ早く起きないとっ！

そう考えた瞬間、世界の空気が変わった。不穏な空気に世界が満たされる。コワイ

背中を一本の鉄パイプがつらぬく、そんな感覚が。コワイコワイ，タスケテ，シヌ，コロサレル

どこから出てくるのか、何が出てくるのか、どうすれば逃げられるのか。コワイコワイコワイ，コロサレル，タスケテ

耳鳴り、頭が割れそうになるくらいの、おさまらない。コワイコワイコワイコワイ，コロサレル，シヌ，コロサレル，シヌ，コロサレル

腹痛、鋭いもので横腹よこばらをエグられるような。コワイコワイコワイコワイ，コロサレルコロサレルコロサレルタスケテタ

スケテタスケテタスケテ

コワイコワイコワイコワイコワイ，コロサレルコロサレルコロサレルタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテコワイコワイコワイコワイコワイコワイ，コロサレルコロサレルタスケテタスケテタスケテタスケテ
イヤダ　シニタクナイ　タスケテイヤダ　シニタクナイ　タスケテイヤダ　シニタクナイ　タスケテワイコワイコワイコワイコワイ，コロサレルコロサレルタスケテタスケテタスケテタスケテシヌシヌシヌシヌコロサレルコロサレルシヌシヌコロサレルシヌシヌシヌシヌコロサレル殺サレルシヌシヌ死ヌイヤダイヤダ嫌ダコロサレルシヌタスケテタスケテ

コワイコワイコワイコワイコワイ，コロサレルコロサレルタスケテタスケテタスケテタスケテコワイコワイコワイコワイコワイ，コロサレルコロサレルタスケテタスケテタスケテ
イヤダ　シニタクナイ　タスケテイヤダ　シニタクナイ　タスケテイヤダ　シニタクナイ　タスケテワイコワイコワイコワイコロサレルコロサレルタスケテタスケテタスケテタスケテシヌシヌシヌシヌコロサレルコロサレルシヌシヌコロサレルシヌシヌシヌシヌコロサレル殺サレルシヌシヌ死ヌイヤダイヤダ嫌ダコロサレルシヌタスケテタスケテ

声が聴こえる

小鳥のさえずりの中に、チビッコの笑い声の中に、ナニカこえがきこえる

その声はなんといっているのか

聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない

聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない

理解してはいけない理解してはいけない理解してはいけない理解してはいけない

その声は俺になんといっているのか

理解してはいけない理解してはいけない理解してはいけない理解してはいけない理解してはいけない理解してはいけない

きいてはいけないきいてはイけないキイテはいけないきいてはイケないキイテハイケナイ

リカイしてハいけないりかいしてはイケないりかいしてはいけないリカイシてはイケない

そのこえはおレにナンといっていルノカ

きいてハイケないキイテハいけなイキイテハいけないコロサレルきいてはイけないキイテハイケナイ

キいテハいけナイきいてはイケないコロサレルきいてはいけないキイテハイケナイキイてはイケナイ

リかいシてはイケないりかいしてはイケナイリカイシテハイケナイりかいシてハいけない

ソノコエハオリムライチカニナントイッテイルノカ
理解なんてしていない理解なんてしていないリカイなんてしていない
いりかいナンテしていない
リカイナンテシテイナイリカイナンテシテイナイりかいナンテシテイ
イないりかいなんてしていない
りかいなんてしていないリカイなんてシテいないりかいなんてしてい
いないりかいなんてしていない
コロサレル殺される殺されるコロサレル殺されるコロサレル殺されるコロサレル殺される
るころされるころされるコロサレルころされる
リカイナンテシテイナイリカイナンテシテイナイりかいナンテシテイ
イないりかいなんてしていない
りかいなんてしていないリカイなんてシテいないりかいなんてしてい
いないりかいなんてしていない

その声は僕に『死ね』と言っていた
次の瞬間には僕は死んでいた。

――

「・・・・・・・・・・・・・やっと起きれた」

目を覚ますとそこには見慣れた天井があった。うん、今度は夢じゃないね

目覚まし時計に目をやる。チビッコたちの笑い声なんて聞こえない。

「まだ6時50分じゃない。」

心臓の早鐘はまだ止まらない。汗はダラダラ。

今日はなかなかすごい死に方をした、『声』のパターンはなかなか冷静を保ちにくいからね、今度から気をつけよう。

「・・・ハァぁ、シャワー浴びよ」

こうして織斑一夏はその日の朝を迎えた。

1話だぜ（後書き）

今回は夢回です。
自分が死んでしまう夢ｏｒ殺されてしまう夢というのは、「今の自分ではダメだ、変わりたい」という願望があるから見てしまうらしいです。
一夏君はそんな夢を毎日のようにみているのですから、よほど今の自分に不満らしいですね。
次回からふつうにいきます。

2話ッス

「今日は人集まらんな～。」

そう呟いた少年こそ、織斑一夏である。

土曜日の真冬の夕暮れ、その駅前の象徴である現在は枯れた噴水を背にして、彼はギターを片付け始める。

彼の路上演奏はもうお終いらしい。惜しむ者もいなければ、喜ぶ者もまたいない。

吐く息は白く、六本の弦を弾く五本の指は冷たい。押さえるほうの五本の指に至ってはもう釘が打てそうなほどカチカチだ。

織斑一夏は中学三年である。本来なら、高校受験という人生の第一試練とでもいうべきイベントに忙くあるべき年齢だが、彼にはそのイベントに参加する必要がなかった。何故なら、彼の通う中学は、

小、中、高、大学一貫の超エリート学校だからだ。彼の人生の第一試練は中学受験という名のもとに既に行われてしまったらしい。

彼がギターとアンプをつなぐコードを束ね始めた時、不意に白い女の手が伸びてきた。

「っえ？」

「どうぞ。」

見ると女の手には、長方形の白い紙切れが二枚ある。どうやらそれはお金ではないらしい。

「明日、この近くで開催されるＩＳ博覧会のチケットよ。ほんとは彼と行くつもりだったんだけど、ついさっき電話で逃げられちゃってね。だからもういいの、あなたにあげるわ。」

チケットを受けとる。

「いいんですか？」

彼は女の存在を知っていた。彼が演奏をはじめるよりも前からその噴水の前にいて、何かソワソワして辺りをキョロキョロしている、誰がみても彼氏を待っているようにしか見えない女。その様子に変化が訪れたのは彼が演奏を始めて二十分ぐらいの時、携帯電話から耳を離した彼女はただ茫然としていた。

「あなたの演奏はそれに値するものよ。彼氏とでもデードがてら行ってきなさい。」

フフっと笑って、女は織斑一夏に背を向け歩き出した。

「・・・いや、僕男だし。」

機材一式を詰め込んだエナメルバッグと勿論ギターの入ったギターケースを重たそうに背負った彼は自宅に帰るべく女と同じ駅方向へと歩みを進め・・・・・ようとしてやめた。

「・・・（　あの女の人と一緒の電車になったら気まずいからちょっと時間ずらそう・・・。」

2話ッス（後書き）

一夏君のやっているギターはソロギターです、とだけ言っておく。

3話でゲス

「ＩＳの博覧会ですか。」

と携帯電話の向こうからお誘いをかけてくれるのは一夏さん、、、
もとい私と同じ中学の先輩で、その、、私のす、好きな人。

『そうそう、いや～何か変な女の人にいきなりチケットもらっちゃってね～、彼氏と行って来いって。』

「へぇ～、、、って!?いきなり変な女の人からチケットもらうってどんな状況なんですかっ!?それに彼氏じゃなくて、彼女ですよね!?」

っは!　言ってから気付いたけど、『彼氏じゃなくて、彼女ですよね』って、私が一夏さんの彼女だって言ってるようなものなんじゃ、気付かれたらどうしよう・・・

『おぉ～さすが五反田家伝統のツッコミ芸は違うなぁー。』

・・・まぁ、あの一夏さんだもんね、こんな簡単に私の気持ち悟ら

れてたらもう今頃、、、今頃、、ゴニョゴニョ

「・・・はぁ、伝統じゃありません。」

キレのないツッコミ。

『えぇっ!?じゃあ、蘭ちゃんのツッコミ芸って蘭ちゃん自身が開拓したものだったの!?』

「違いますっ!開拓なんてしてませんっ!大体、私がツッコムのなんて一夏さんしかいませんっ!」

っっは!また言ってから気付いてしまった、『私がツッコムのは一夏さんしかいない』って私が一夏さんに対して特別な感情を抱いているようにしか聞こえないセリフっ!今度こそ気付かれるっ、、、、

『へぇー、ということは蘭ちゃんって普段はボケなんだ。８９へぇ～。』

・・・いや、まあ、わかっちゃいたんだけどね。この程度で一夏さんが乙女心に気付くハズなんてないって、もう一夏さんと付き合って、この場合の『付き合って』は知り合っての意味の方ね、、２年は経つんだからこのくらい分かってて当然だっての。それにしても８９へぇ～か意外とたか

『っあ、今気づいたけど『私がツッコムのは一夏さんしかいません』って何か卑猥にきこえる。』

「っなっっっ！！！！？？？？？」

ひ、卑猥っていったの！？い、一夏さんが！？『ツッコム』が！？『ツッコム』って一体私は何を一夏さんにツッコムのだろういや、むしろ私が一夏さんにツッコまれる側なのでは？ああぁ！何を考えているのっ！？私はっ！？

いや、私が一夏さんにツッコムのもありか・・・
違う違う違う違う！！何を想像している私っ！！

『お～い、蘭ちゃ～ん、どしたのー？』

「い、一夏さんの変態ーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

『え、えぇーーーーーーーーーー？！』

ツー、ツー、ツー。

こうして私は一夏さんとデート？することになった。

4話だから

「え～、この度は先日の電話において、青少年に不適切と思われる表現の発言があったこと深くお詫び申し上げます。」

初手謝罪安定。

日曜日の朝１０時ごろ、デート（仮）の待ち合わせ場所、、、もとい五反田家の家の前で開口一番に謝罪の言葉を口にした。

もちろん、五反田蘭にむかって。

「もう、そのことはいいです。フンッ」

・・・うぅ、なんか怒ってらっしゃる。

このまえ、弾君（蘭ちゃんの兄貴）　の部屋にあったえっちな漫画読んで、

なんとなくそれっぽいなと思って、言ってみただけなのに。

なにか、なにかぁ、ご機嫌取りをしなければぁ。

「それより一夏さん、なにか私に言うことはないんですか？」

「っえ？」

蘭ちゃんご機嫌回復作戦を練る作業は一時中断。

い、言うこと？、蘭ちゃんに言うこと？

とりあえず蘭ちゃんを上から下までまじまじと見てみる。

まじまじ、まじまじ

「そ、そんなにジロジロ見ないでください／／／」

目を背けて顔を赤くする蘭ちゃん・・・

ジロジロ、まじまじ、ジロジロ、マジマジ

「うぅ」

・・・うん、わかった。

「蘭ちゃんは可愛い。」

「っな!!??」

頭から湯気をだす蘭ちゃん。すごく可愛い。

服のことはよく分からんので、抽象的な表現しか使えないけど、全

体的に落ち着いた雰囲気で、それでいて地味ではないかんじ。ホントに抽象的だなオイ

それはすごくセンスのいい配色とか着こなしなのだと思う。

「あれでしょ、前言ってたデートで待ち合わせした時は、まず相手のことを褒めろってやつでしょ。」

よく思い出した、僕えらい。

「っそ、それはそうなんですけど・・・」

??、なんか間違ってたかな?　う〜む、わからん。

「まいいや、むこうで姉さん車で待たせてるから早くいこう。」

蘭ちゃんの手を取って歩き出す。

「はぅ・・・」

「じゃ姉さん、送迎よろしく～。」

車の後部座席に二人で乗り込む。

「ふんっ、朝っぱらからイチャイチャしおって。」

姉さんもちょっと機嫌悪いのかな？

そりゃあ、せっかくの休日なのにガキンチョの足になんなきゃいけないとかなったら嫌だよね。

あとでちゃんとお礼を言っておこう。

「す、すいません・・・」

ようやくいつもの白に戻り始めた蘭ちゃんの顔がまたちょっと赤くなる。

「別にイチャイチャなんてしてなっイタッッッ。」

座ったままででも蘭ちゃんのかかと落としの威力はここまでであるのか・・・

「そなた何故、足を踏む?」

「自業自得ですっ!」

え〜

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

車に揺られること２０分、何度目になるのか私は一夏さんの顔を盗み見た。

・・・寝てるし、、、、

さっきから急に静かになったから、もしやとは思っていたけど本当に寝ているとは・・・

それに寝るならこっちに寄りかかってくれたらいいのに、何故窓ガラスの方へ寄りかかる？

さっきから車の振動で頭とガラスの間がゴンゴン鳴ってますよ。痛くないんですかね。

それにしても一夏さんの寝顔は珍しい。なんというか・・・かわいい。

私より可愛いんじゃないかなと、少し女としての自信を失う。

というか一夏さんは本当に男なのだろうか？いや、男であるハズがない。きっと一夏さんは女なんだ。

――――――これは、確かめるしかない、一夏さんの真の性別

を！！

・・・ッフッフッフ、偶然にも一夏さんは現在おねむ中、確認するに好機な状況この上あらず。

思い立ったが吉である――――――――――――いざ、尋常にっ！

そう思い立った私は、一夏さんの下半身部へ手をのばし――

「おい、五反田。」

「っわっひゃあー！！??」

っは！私は一体なにをっ！！??千冬さんいたのか！??

というかバレテないだろうか、一夏さんの性別を確かめるために下半身のモノを触ろうとしたなんて、あの千冬さんに知られたら・・・殺される、もしくは社会的に抹殺されるぅ、、、、やばい、やばいどうしよう、助けて一夏さん

「なんだ？いきなり奇声をあげて？」

・・・・・ふぅ、よかったどうやら私の未遂行為はばれていないようだ。

あれだ、まだ思考がよく働いていなかったんだ。

夜は下ネタで攻められて、朝にはいきなり『可愛い』とか言われちゃって、、、えへへ、この文章だけ見ると私と一夏さんがすごく幸せな関係にあるみたい、、、えへへ

そんなこんなで正常な思考に戻ってなかったんだよねー。

「そう、つまり普段の私なら、本当の性別を確認するために一夏さんの下半身のモノに触ろうなんてありえないってこと。」

「ほお、お前一夏にそんなことしようとしてたのか？」

し、しまったーーー

写真か、その発想はなかったな。後で私の携帯でも撮っておこう。

「一夏が人前で寝るのは珍しい。いや、人前に限らず寝ること自体珍しい。私も一応一夏の寝顔写真は１２０枚程度所持している、しかしそのほとんどは幼少期で夜の睡眠時に撮ったものだ。中学に上がってからの写真は５枚とない。しかもその五枚も朝方わたしが３時半起きで一夏の部屋に侵入し秘密裏に撮影したものだ。部屋が暗かった故にあまり顔がきれいに映っていない。つまりこれは奇跡とでも呼ぶべき超レアな状況だ。いや奇跡などという範疇にはおさめてしまっては一夏の寝顔に失礼だな。神秘だ。神秘なのだ、比喩表現ではなく単純な純粋な神秘なのだ。この神秘に免じてお前の先ほどの未遂行為および私をブラコン呼ばわりしたことは見逃してやる。だがな、忘れるな、お前は今神秘に触れているということを。本来ならお前のような一夏とちょーと仲が良くて、ちょーと一夏に懐かれてて、ちょーと一夏がお世話になっているだけのムシケラがこの神秘の写真を撮ろうとなど絶対にありえないことなのだからな。撮れよ、ちゃんと撮れよ、３００枚は撮れよ、３６０度あらゆる角度から撮れよ、わかったな？わかったな？こんなことはありえないと思うが、貴様まさか自分の携帯でも神秘を記録しようとか思っていないだろうな？だろうな？ああぁんっっ！？ほう、そうかそうかさすがの貴様もそこまで落ちぶれてはいなかった。安心したぞ。では、撮影作業を開始しろ。」

「は、はいーーーーーー、私めにお任せをーーーーーーーーーー。」

こわい、ブラコンこわい。

一夏さんの寝顔をセンターに入れてシャッター。パシャ　一夏さんの寝顔をセンターに入れてシャッター。パシャ
一夏さんの寝顔をセンターに入れてシャッター。パシャ　一夏さんの・・・

パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　パシャ　パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　パシャ　パシャ　カシャ
パシャ

パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　トッタノカヨ~　パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　パシャ　パシャ
カシャ　パシャ

パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　パシャ　パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　パシャ　パシャ　カシャ
パシャ

パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　パシャ　パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　カシャ　パシャ　パシャ　パシャ　パシャ　カシャ
パシャ

「五反田。」

「は、はい。なんでございますか？」

いきなり名前を呼ばれてびっくりしたけど、写真撮影は継続しながら応答。　パシャ　パシャ　パシャッ

「いや、写真はもういい。いくら私でも３００枚もいらない。７０枚程度で十分だ。」

それでも多いわっ。心の中でツッコミをいれておく。

ともあれ、撮った枚数がちょうど７０枚程度だったので撮影作業を終了し、デジカメを千冬さんに返却。

「一夏は、その、学校ではどうなんだ？」

「えっ。」

予想外だったので驚く。

「ほら、友達とか、一夏は学校のこと全然話さない。少し不安でな、あいつが学校関連の話をする時、お前か鳳の名前しか聞いたことがないからな。」

ああ、そっか。　千冬さんは一夏さんのことが心配なんだ。なんだかんだいって姉弟で家族だもんね。

きっと千冬さんは普段から一夏さんに学校の話とか聞きたくて堪らないんだろうけど、

恥ずかしくて聞けないのだろう、一夏さんにその気持ちを悟られるのが嫌で。

ブラコンなのに何故かそういう所だけは不器用なんだよねー、千冬さんは。

「大丈夫ですよ、千冬さん。一夏さんは今はもう学校でも明るいですし、人間関係も良好です。
　一夏さん本人はどう思ってるかは知りませんが、一夏さんを友達だと思っている人はたくさんいます。一夏さんにとって『友達』の

ハードルがすごく高いからその人達の話はしなくて、私や鈴さんはそのハードルをちょっと頑張って飛び越えただけです。
学校生活の一夏さんで千冬さんに心配を与えるような要素はありませんよ。」

「・・・そうか。悪かったな変なことを聞いて。」

「いえいえ、全然変なことじゃありません。・・・あ、それと私も一夏さんが学校以外の話をする時、千冬さん以外の名前を聞いたことがありませんよ。」

「・・・・・・」

何も言わない千冬さんだけど、その様子から心境は伝わる。

誰が見てもわかるほど、千冬さんはあきらかに――――――――――――――――照れていた。

「あれぇ～？もしかして千冬さん照れてるんですかぁ～？っあ！そっかぁ～千冬さんがいきなり一夏さんの学校での様子とか聞いてきたのも一夏さんが心配だったからですねぇ～。　なっとく～なっとく～。」

「ツッッッ！！！！？？？五反田貴様っーーー

そんなこんなで、女2人男1人の車旅を終え目的地に着いた。

車から降りた瞬間すごい勢いで千冬さんが襲いかかってきたけど、そこは一夏さんに何とかなだめてもらって私は事なきを得る。

実は、あの発言をしてから、運転席からのすごい怒気にビクビクしていたのだけれど、千冬さんの意外な一面がみれたのでよしとする。

それにしても、一夏さんが千冬さんから私を守る姿と言ったら、かっこよかった。

4話だから（後書き）

キャラ崩壊なんてしていない。

5話だだだだ

「うん、ここどこ？」

状況を確認しようか。

場所は、ＩＳ博覧会の会場の建物内　・・・・・・・・・のハズ
時刻は、１１時３０分　・・・・・・・・・着いてから
１時間も経ってない。
蘭ちゃんは・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぐれた

いやいやいやいやいや、おかしいでしょこれ！？

さっきまでその辺に蘭ちゃんいてー、『ワンオフ・アビリティーの発動条件と過去の事例』っていう展示読んでてー、姉さんのアビリティー強いなとか思ってたら、、、、、、、、、、いつの間にかひとりぼっちだぜ。蘭ちゃんどころか、他の人も全員いないし・・・

まあ、なんいせよ蘭ちゃんとはぐれてからまだ5分と経っていない、フラフラしとけばそのうちもどれるでしょ。

特に深く考えず、歩き出す。

一人で歩くということに少し感傷深くなった。

五反田蘭という存在がなければおそらく僕は、この博覧会を独りで歩いてだろう。

今回の博覧会だけでなくデフォルトとしての独り。

勿論、僕が四六時中蘭ちゃんと一緒にいて、一人で寂しいぜ、うわーん、うわーん。

と言うわけではない。

歩いていれば二人になれるという安心感と、孤独であるという不安感が『一人』である現在にはあるけれど

『独り』であったはずの現在ではその二つともを感じることは絶対になかっただろう。

・・・まあ、なんかよくわかんないけど、蘭ちゃんがいて良かったっていうこと。

言わせないで恥ずかしい・・・

そもそも僕はいつから『独り』になって、どこから『一人』になっ

たのか、もとい五反田蘭と出会ったのか。
時は遡って中学１年の冬手前１１月ごろの――
――っと左手の方にドアを発見。
『織斑一夏、五反田蘭との邂逅編』はまた今度ということで、とりあえず入ってみるか。
ガチャ
「あれは・・・ＩＳ？」
部屋の中央にどっしりと腰を据えている鎧。
「打鉄かな？」
さっき見てた展示のレプリカ、写真と似てるなと思っただけだけど。
近接戦闘に向いてるとかなんとか。

本物？

いや、本物であるかどうかは置いておいて、ＩＳがあるっていうことは少なくともここはＩＳ博覧会会場で合っているらしい。

女性にしか動かせないんだよね。

『”ＩＳ”　正式名称”インフィニット・ストラトス”
宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。』

手元の資料、もとい入館時にもらったパンフレットにはそう書いてある。

でも実際は宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持て余した機械は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた。所謂、飛行パワードスーツである。これもパンフレットに書いてあることなんだけどね。

ＩＳのある一歩手前まで歩く。

触ってみたいと思って手を伸ばした、けど引っ込めた。

普段からよく女と間違われる僕だからもしかしたらＩＳも勘違いし

て動くかも、とかいう馬鹿げた思考以上に展示品に触ろうとする行為の方が馬鹿げていたからだ。

立ち去ろうとして『ドンッ！』と背中を押された。当然、体は前によろめく

誰っ！？っと振り向く前に、まだ引っ込めきれていなかった右手がＩＳに触れる。

キンッという金属音が頭に響く。

――――――――――――――自分の意志とは関係なく頭に流れ込んでくる情報の数々。

金属音は更に強くなる。

――――――――――――――ＩＳの基本動作、操縦方法、性能、特性

金属音は鳴りやまない。

――――――――――――――活動限界時間、行動範囲、センサー精度

頭が割れるほどの金属音、いや違うこれは――――――――――――耳鳴りだ
いつもの僕自身が一番よく知っている音。

――――――――――――レーダーレベル、アーマーざんりょ

キィーーー

てしまうともっと怖くなることを

俺は知っている。

だから怖くなんかない、この耳鳴りに恐怖なんて覚えない。
だから怖くなんかない、この耳鳴りに恐怖なんて覚えない。
だからコワくなんかない、このミミナりにキョウフなんて覚えない。
だからコワくなんかない、このミミナりにキョウフなんてオボえない。
ダカラコワくなんかない、このミミナりにキョウフなんておぼえない。
ダカらコワくなんかなイ、このミミナりにキョウフなんてオボえない。
だカらコワくなんかない、このミミナりにキョウフなんておぼエえない。
ダからコワくなんかない、このミミナりにキョウフなんておぼえない。

長い長い、終わらない金属音が体を蝕んでいく、既に意識はない。

全身が芯から冷やされて、冷たく冷たくなっていく。

この感覚を織斑一夏は知っている、いや熟知している、世界の誰よりも理解している。

耳が痛くて、動けなくて、ただただ見えない恐怖におびえる。
経験しているが故にその対処方法を織斑一夏は知っていた。

ひたすらに待てばいい。

そうすれば勝手に夢は醒めて、いつもの現実に戻ることができる。
だがこの感覚を味わう現在は夢ではなく、現実である。
そのことが織斑一夏を混乱させる原因の大部分を占めているだろう。

「――――――？@＊■ん！」

その音がだれかの声に似ていても、今の織斑一夏には考えることす

ら出来ない。

何も聞こえない、聞こえてなんていない。聞こえるのは耳鳴りだけ
聞こうとしてはいけない、それは朝学んだこと
だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんておぼえない。
何もキこえない、キこえてなんていない。キこえるのはミミナリだけ
キこうとしてはいけない、それはアサマナんだこと
だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんてオボえないイ。
■もキコエナイ、きこえてなんてイナイ。キコエるのはみみなりだケ
きこうとしてはイケナイ、それは■まなんだこと
ダからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんてオボエナイ。

「――――イ@■¥ん！！」

でもその声が何を意図して発せられているのか、何故か織斑一夏には理解が出来た。

助けてほしいだなんて思わない

だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんて覚えない。
たすけてほしいだんておもわない
■もキコエナイ、きこえてなんてイナイ。キコエるのはみみなりだケ
きこうとしてはイケナイ、それは■まなんだこと
タスケテほしいだなんておもわナイ
だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんてオボえな
い。
タスケテホシイダナンテオモッテイナイ
■もキコエナイ、きこえてなんてイナイ。キコエるのはみみなりだケ
きこうとしてはイケナイ、それは■まなんだこと

「――――イチ■サン！！」

一層強くなる耳鳴りに、抵抗する力が戻ってくる。

たすけてほしいだんてオモッテ
ゴタン■ラ■ニタスケテホシイダナンテ
ゴタンダランにたすけてホシイダナンテ
ごたんだらんにたしけてほしいダなんて

――――――――――蘭ちゃんに助けてほしいだ

なんて

「――――一夏さんっ！！！」

「ふぇっ？！」

耳鳴りが止んで、視界が戻って、その先に見えているもので理解できるのは

ホッと安堵の表情でこっちを見る蘭ちゃんと、『ＩＳ』ぐらいだった。

5話だだだだ（後書き）

まさかの原作と同じパターン

6話どすえ

何故、男である僕がここにいるのか？

（以下、織斑一夏の脳内対談

そもそも『ここ』ってどこさ？

『ここ』とは、ＩＳ学園１年１組の教室、最前列の真ん中の机のことさ。

現在は、ＩＳ学園入学式終了後それぞれの教室にわかれての自己紹介タイムさ。

ＩＳ学園では少しでも多くのＩＳに関する授業を入れるために入学式当日から通常授業が始まるのさ。

わかったさ。では何故男である僕がＩＳ学園に入学してるうさ？

それは織斑一夏がＩＳ博覧会とかに行っちゃって、迷子になって発見したＩＳを触ったらいつものアレがきて気付いだら動いちゃったからうさ。

なるほどうさ、それにしても視線を感じるうさ。クラスのみんなから見られている気がするうさ。

仕方ないうさ。なにせ世界初の男のＩＳ操縦者うさ。みんな気になるうさ。

それより次はイギリス代表候補生の自己紹介うさ。ちゃんと聞いておく方がいいうさ。

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ。

第三世代装備『ブルー・ティアーズ』の第一次運用試験者に若くして選抜された、セシリア・オルコットですわ。特技と言ってはなんですが、バイオリンとピアノを嗜んでいますの。これはオルコット家が古くから伝統であり、楽器を弾いている女性こそ麗しいという代々のオルコット家の気高き思想でもありますから、わたくしもその伝統、思想を守り、誇りにするべく幼少期からの厳しいお稽古にも屈せず、その腕前は母からも認められていますわ。最近では創作料理にも取り組んでおり――――――――

何で名前二回言ったの？
語尾を忘れているうさよ。

　ナントカ　カントカ　ウンヌン　カンヌン　ナントカ　カントカ・・・・・・・以上ですわ。」

やっと終わったうさ。長すぎて全然覚えられなかったうさ。
仕方ないうさ。

せいぜい

セシリア・オルコットはイギリス代表候補生で新装備の試験運用を任せれており
幼い頃からのバイオリンとピアノが趣味でしかもその腕前は母親の折り紙つき、
最近では創作料理にも手を出していており、男という存在があんまし好きじゃなくて

今は亡き母という偉大な存在をこよなく愛し、尊敬していて
ＩＳ関連でわからないことがあれば答えてあげないわけではない
ということぐらいしか覚えてないうさ。
全部おぼえてるじゃねえかうさ！

それより、箒の方が気になるうさ。
篠ノ之箒うさ？どうしてうさ？

箒は幼馴染うさ。小学４何年の終わりまで一緒の道場で剣道を習っていたうさ。
箒はめちゃくちゃ強くて試合をしても負けてばっかしだったうさ。
それに、箒は去年の中学の剣道で全国大会優勝しているうさ。

ということは約６年ぶりのさいかいうさ。感動の再開うさ。

うぅむ、でも６年という時間は長いうさ。
むこうは覚えてないかもしれないうさ、不安うさ。

元気を出すうさ！やってみなければわからないうさっ！
果敢にアタックするうさっ！

っえ？別に覚えてもらってなくてもいいうさ。

・・・お前案外ひどい奴うさね。

箒はいい人だからきっとまた一からの関係でお友達になってもらえ

るうさ。

前言撤回うさ、お前はやっぱりひどい奴じゃないうさ。

うさ?

それより今日の入学式で姉さんらしき人物を見たうさ。

姉さんは仕事だから入学式にはこれないと言っていたうさ。

姉さんというと織斑千冬のことかうさ?

そううさ。見間違いだったかうさ?

いや、織斑一夏の視力は両目とも1、2うさ。見間違えるわけないうさ。

ならやっぱり姉さんは入学式に来ていたうさか、、、

次の自己紹介でお前の番うさ、準備しておく方がいいうさ。

うん、わかっ

ガラッという音を立てて、教室前方の扉が開かれる。

同時にその音は、織斑一夏脳内対談終了の合図でもあった。

一人の女性が入室してくる。

下から順に、黒のストッキングに包まれたスラリと伸びる美脚
引き締まったヒップを強調させるタイトスカート
出るところはしっかり出ている、それはスーツの上からでもわかる。
鷹を思わせる鋭い吊り目が特徴の凛とした顔立ち

頭なでなでされながら、あの美脚にはさまれｔ

「って!?姉さん?!」

あまりの驚愕に思わず立ち上がってしまった。

「学校では織斑先生と呼べ、馬鹿者ッ!」

スパーン!と頭を叩かれる、、、出席簿アタック!?、、、

「なんでっ!?保護者の人は講堂で説明会があるんでしょ!」

「私は教師だと言っているだろう!」

スパーン！

初耳だぜよ。姉さんがＩＳ学園の教員だっただなんて・・・

頭が事態についていけない。

「次はお前の番だろ早く自己紹介をしろ。」

・・・ああ、そっか自己紹介か、、、

既に立っていたその場から、教室後方へと向き直り・・・

・・・大勢の前で話すことはわりかし慣れてる

「ＯＯ中学、出身の織斑一夏です、みんなも知っている通り、そこにいる自称教師の不審な女の弟で「スパァーーン！」すみません真面目にやります。

中学の頃は、演劇部でした、結構真剣にやっていたつもりです。

趣味は、ジャグリングと読書です、特技は暗記です。

世界初の男のＩＳ操縦者とかで騒がれてるけど、中身は普通の１５歳の少年なので気軽に接してください、これから１年よろしくお願いします。」

ふぅ、完璧な自己紹介だ、昨日蘭ちゃんに電話しただけはある。

Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

「――――――――これから1年よろしくお願いします。」

一夏の自己紹介が終わった。

、、、、、、一夏はあんなに流暢な自己紹介が出来るやつだったろうか？

少なくとも私の知っている一夏、６年前の一夏なら、、、

『織斑一夏です、よろしくお願いします。』

で、終わりだっただろう。

演劇部に所属していたと言っていたな、その辺が関係しているのだろうか？

しかし、姿、形、容姿に目立った変化はない。

いや、まるっきり昔のまんまという訳ではないが、あの細くて、ちびっこくて、髪の毛サラサラで、可愛らしいお顔がそのまま成長したというかんじだ。

私も一夏に出会って間もないころは一夏は女だと信じて疑わなかったからな。

「キャーーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

ざわ、ざわ、わー、わー、がや、がや

教室が騒がしくなる。千冬さ、、織斑先生が自己紹介をしたらしい。

一夏のこと考えてて全く聞いていなかった、、、

っく！　人の話、ましてこれからお世話になるであろう先生の話を聞いていなかったなどとは！

篠ノ之流剣術の後継者にあるまじき行為だ。今度から気を付けねば・・・

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているの

か？」

それにしても一夏の横顔は可愛い　←もう織斑先生の話とか聞いてない

私の席は最前列の窓際左端だから、首を９０度右に向けると自然と一夏の横顔が見える。

じーっと見つめてしまう。

一夏は私の幼馴染で同門だった。

同じ道場で剣道を学び、同じ学校で勉学に励む。

必然的に私と一夏が一緒に過ごす時間は多くなっていた。

「おとこおんな～」とクラスの男子にからかわれても、大人な対応で無視し担任に逐一報告していた私だが、一夏が男子から「おんなおとこ～」と、からかわれているのを見た時は思わずその男子達に手をあげてしまった。

『お前たち、集団で一人の女の子をいじめて恥ずかしくないのか！私が成敗してくれる！』

『僕は男・・・』

『っえ。』

この頃は学校でも道場でも全く話さなかった私と一夏だが、これを期に少しずつ会話をするようになった。

織斑一夏、それはもう静かな奴だった、学校での休み時間はずっと本を読んでいて、クラスの誰とも喋らない。そのくせ成績は優秀、運動神経は抜群。私以上にクラスで浮いた存在だった。

本気で友達が私以外にいなかったと思う。

クラスに限らず道場でも誰かと喋っているところをみたことがな・・・・・・・・・・・・・・・

・・・いや、一人例外がいた。忘れてはならない忌まわしきヤツがいた。

篠ノ之束、一夏は何故か私の姉だけには懐いていた。

それはもう、飛びついてたり、抱きついてたり、耳掃除ａｎｄ膝枕してたり、一緒に寝てたり、勝手に二人で旅行に行ってたり、口を開けば二言目には束、しまいには道場で出会った瞬間「今日は束さんは？」と聞いてくる始末。

私の方が長い時間一緒にいたはずなのに一夏は何故・・・むぅー！

思い出すと腹が立ってきた。やめよう。

道場での一夏は練習熱心だった。誰よりも早く道場に来て、誰よりも遅くまで練習する、それに加え朝練までしているという。

無論、私も朝の修練をかかしたことはないが、私より一夏の方がそれにかける時間が長かった。

私は5時半から、一夏は5時から、、、人生で初めて悔しいと感じた瞬間だったと思う。

その剣道の腕前も確かなもので、そこいらの同年代には負けないほどの実力を持っていた。

まあ、私が一夏に負けたことはないがな。

そう、小学4年生の春、その日も一夏は誰よりもはやく道場に来て竹刀を振っていた。

もうすっかり友達になった私と一夏だったが、何を思ったのか私はこんなことを聞いていた。

『一夏、どうしてお前はそんなに練習するのだ？』

この問いかけに対する答えは容易に想像できた。

『強くなりたいから』とか『箒に勝ちたいから』とかおおよそこんな答えだろうなと、幼いながら予想していた。

しかし、その返答は私の予想の斜め上を行くもので

『多才になりたいから。』

と一夏は言った。

この発言に対し私はどう思ったのか、もう覚えていないけど

少なくとも『束さんがいるから』とかいう答えじゃなくてよかったと思う。

ざわ、ざわ、がやがや、ざわわ、がやがや

教室が再び騒がしくなる。

ああ、ＳＨＲ後の休み時間か。昔のことを思い出していたばかりに全く気が付かなかった。

右からこちらに歩み寄る影が見える・・・・・・・・一夏だ。

「箒。」

懐かしい声とそのイントネーション。若干声は低くなっているだろうか？

「なんだ?束なら今日はいないぞ。」

「えぇっ!?」

旧友との再会に自然と私の頬は緩んでいた。

6話どすえ（後書き）

箒は若干大人っぽくなっています。

次回は衝撃の展開ですわ！

7話以外ありえない

入学式初日のＳＨＲ、もとい自己紹介タイムが終わり、１時間目との間の休み時間になる。
僕は旧友との再会を確認すべく席を立った。

箒は変わった。

いや、６年も経ったんだから外見が変わるのは当然だけど、、、なんというか大人っぽくなってる。

外見もあるけど、落ち着いた雰囲気を纏っているというか、神聖なオーラがをかもし出しているというか、ポニーテールがすごく可愛いというか、、、

「箒。」

その机の前に立ち、その名前を口にする。

どんな反応をするのだろうか。何せ６年振りだから、楽しみになる

ってもんですよ。

「なんだ?束なら今日はいないぞ。」

「ええっ!?」

なんでいきなり束さんっ!?いや、気になってはいたけどっ!?

「違ったか?お前が自分から話しかけてくるなんて姉さんのこと以外ありあえないだろ。」

「違うよっ!そして束さん以外のことでも話しかけるしっ!」

「そうか、久しぶりだな一夏。6年振りか。」

「最初からそう言ってよもうっ、、、久しぶり箒。」

6年振りだな、、、本当に、、、

「束さんとは連絡取れてる？」

「ほらやはり、二言目には姉さんのことを言う。」

「ふぐぅ。」

ぐはっ！極めて自然な流れで束さんについて聞いてたっ！？

「姉さんなら心配ない。ひょっこり家に現れて、夕飯だけ食べて消えるという現象が月一で起こるくらいだからな。」

「そ、そっか、なら大丈夫だね。」

「お前こそ、千冬さんとは何もなかったのか？　（あのブラコンと何もないとは思えないがな・・・」

「ん？何かって何が？」

何だろうか?何かあるといえばたくさんあったけど・・・

「いや、いいんだ、忘れてくれ。　（あんまり言うと聞かれてるかもしれない・・・」

「そ、そう・・・っあ、そうだ優勝したんだってね、剣道。おめでと。」

「あ、ありがとう、よく知っているな。」

「実は箒は中学1、2年の頃から優勝出来る実力を持っていたんだけど、中学の顧問の先生が上級生を中心に出しますっていうタイプだったから出れなかったんでしょ。」

「何故そんなことまで知っている?!」

「んー、束さんから聞いた。」

僕が中一の頃かな、束さんが電話で『あの顧問抹殺する!箒ちゃんを出さないなんてっ!』って言い出だして、必死に止めてたのをよく覚えてる。中二の時は『教員免許とったから、顧問代ってくるね!』なんて言ってたな、止めたけど。束さんなら本当にやりかねん。

・・・っと箒が何か怪訝そうにこっちを見つめてる。

な、な、なんだろうか？

「一夏、やはりお前は二重人格かなんかだったのか？」

「ろ、６年もあればいろいろと変わるでしょっ！喋り方も性格もっ！」

キーンコーンカーンコーン

休み時間を終了させるチャイムが鳴る。

「ま、また後でね。」

「ああ。」

小走りで自分の席へ戻る。

1時間目、2時間目と終了して休み時間到来。

両方とも専門授業、ＩＳの授業だったんだけど、難しくはなかった。すべて、僕がＩＳを動かした翌日から個別ＩＳ授業を始めてくれた聖マリアンヌ学園のおかげです。ありがとう先生。

ちなみに、1時間目終了後の休み時間、箒が『どこか頭を打ったのか！？』とか『良い精神科医を紹介してやるっ！』とか『し、信じられない。一夏がこんなにまともに人と話をするなんて・・・』とかなんとか言ってたけど・・・・

そんなに変わったのかな僕・・・確かに小学校低学年から高学年にかけてはいろいろと迷走し始めた時期ではあるけど、人と話をしないとまではなかったはず、、、なかったはず、、、はず、、、。

「ちょっと、よろしくて？」

「っへ？あ、うん、よろしいよ。」

声をかけてきたのは、イギリス代表候補生セシリア・オルコットだった。

若くして新装備の試験運用者に選抜されたセシリア・オルコットだった。

鮮やかな金髪の、白人特有の透き通るような白い肌とそのブルーの瞳、１００人が見れば１００人が振り返る美少女、セシリア・オルコットだった。

本人は二回しか言っていなかったけど、僕は三回言っておいた。

周囲からの視線がより一層強くなる。数も増える。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかあしら？」

「っえ、三回も言ったんだけど足りなかったかな？」

「三回？何を言っていますのあなたは？」

しまった、適当に答えてしまった。

視界の端にチラチラと映る我が幼馴染の顔は『それでこそ一夏だ。』とウンウンと頷いている。

くそ、なんか悔しいぞ。

「ごめん、ごめんボーっとしてた、で、何かな？オルコットさん。」

「あなた、本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・・・幸運でですのよ。ボーっとしている暇なんてありますの？」

ここで腹を立てては、視界の端の幼馴染『やらかせっ！昔みたいに何かやらかせっ！』というニヤニヤ顔の思うつぼなので、極めて冷静に対応しよう。

大丈夫、この手のタイプの女性との接し方は過去に一回学んでるから。

「ごめんね、まだこういう雰囲気、慣れてなくて・・・」

「あら、そうですわね。庶民がいきなりわたくしのような高貴な人間に話しかけられては緊張してしまうのも当然のことですもの。楽にしてくれてもよろしくてよ。」

いや、この学校の雰囲気に慣れないって言ったつもりなんだけど・・・

視界の端の幼馴染の顔は『ピッチャーびびってる！ヘイッ！ヘイッ！ヘーーイッ！！』と、絶対箸の方がキャラ変わってるでしょこれ。それ以前になんで顔で言ってることがわかるんだろう・・・

「うん、オルコットさんはどことなくそういうオーラでてるから、、、」

視界の端の幼馴染『小者臭だろ～っ、小者臭って言えよー！』っていう顔、、、もうつっこまない。

現実の箸はそんなこと言わない、これは僕が創り出している幻聴、いや顔だから幻顔。

「あなた、庶民にしてはなかなかわかっていますのね。まあ、あな

たでしたらＩＳのことでわからないことがあれば、泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。座学でも次席でしたのよ。」

「そうなんだ、オルコットさんはすごいね。じゃあＩＳでわからないことがあったらオルコットさんの前で泣くことにするよー。」

「ふふん、素直でよろしいことですわ。」

視界の端の幼馴染の顔、、、はもういい。

言うと面倒なことになるかもだから、言わないけど
実は、僕も教官は倒してるし、あれは倒したというより相手が自滅したんだけど、、、
座学の首席も僕だからね。マリアンヌ学園の校舎には今もでかでかと『祝　織斑一夏　ＩＳ学園首席入学』という垂れ幕がある。ふっ、聖マリアンヌ学園中等部学年3位の実力をなめちゃいけな『無視しないで（´・ω・`）』ええいっ！割り込んでくるな視界の端の幼馴染っ！

「っえ、織斑君って座学首席だったよね、、、」

「えっ。」

突然の第三の声に、目を見開けて、口をパクパクさせるオルコットさん。

教室がざわざわと揺れる。

ざわ・・ざわ・・

嫌な予感がしてきた。

「実技でも教官を倒していたしな。」

「なっ!?」

追い打ちをかけるようなその声に、金髪美少女の顔がさらに赤くなる。

・・・ってこの声この口調は箒ィィィィィィィィーーー!!

箒の方へ振り向く。視界の真ん中に入ったのは写真に収めたくなるような幼馴染のドヤ顔。

初めて、箒に対してムカツクという感情を覚えた瞬間だ。

「ちょっとっ！！あなたそれは本当ですのっ！？」

ずいっと身を乗り出して聞いてくるオルコット嬢。唾飛んできた。

「え、え～と、その座学は首席、、、、、だったかな？あははー」

「ふ、ふんっ！あなた極東の男にしては意外とやりますのねっ！し、しかしさすがに実技で教官を倒したというのは嘘でしょう！教官を倒したのはわたくしだけと聞きましてよ！」

「あ、うん。そっちの方は事実無根だとおも」

「それ、女子の中ではオルコットさんだけっていうことじゃないの？」

ざわ・・ざわ・・

くそっ！またしても第三の声が！この声は箒じゃないっ！誰だっ誰が言ったんだっ！？

と、オルコットさんがプルプルと震えている。

「な、な、な、あなた！わたくしを騙しましたのねっ！このわたくしに公共の場で恥をかかせようなどと万死に値する行為ですわっ！！」

「お、落ち着いてオルコットさん。別に騙そうとしてたわけじゃないから。」

顔を真っ赤にして、声を荒げるオルコットさん。僕が一体、何を騙したというのか！？

「こ、これが落ち着いていられ――――――」

キーンコーンカーンコーン

助け船をだしてくれたのは、ウェストミンスターの鐘だった。

おお！神よ！次の１時間も私を導いて下さい！

「っ・・・！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

そんな捨て台詞を吐いて、席に戻るオルコットさん。

どうしよう、次の休み時間は逃げようかな・・・

主よ！どうかこれからもあなたの力で私の口が滑らないようにしてください。
足は滑ってもいいから。

次の時間、主は僕の祈りを受け付けなかったらしい。

7話以外ありえない（後書き）

Ａｌｌ　ｔｈｒｏｕｇｈ　ｔｈｉｓ　ｈｏｕｒ
Ｌｏｒｄ，ｂｅ　ｍｙ　ｇｕｉｄｅ
Ａｎｄ　ｂｙ　Ｔｈｙ　ｐｏｗｅｒ
Ｎｏ　ｆｏｏｔ　ｓｈａｌｌ　ｓｌｉｄｅ.

日本のチャイムのキーンコーンカーンコーンってやつを
ウェストミンスター・チャイムといいます。
ロンドンにある「ウェストミンスター宮殿（英国国会議事堂）」に
付属する時計塔（ビッグ・ベン）が奏でるメロディです。（ｗｉｋｉより
上に書いたものはその歌詞です。
キーンコーンカーンコーンのリズムで口ずさんでみてはどうでしょ
うか？
ｗｉｋｉを見る限りでは歌詞の種類は４つありました。これはビッ
グ・ベン時計塔部屋に刻まれていた歌詞らしいです。

すみません、衝撃の展開は次回に持ち越しです。

8話だなだな（前書き）

ここいらで織斑一夏君によるジャグリング道具紹介を読んでほしいです

8話だなだな

某イギリスお嬢様の襲撃をなんとか防ぎ切り3時間目を迎えた。まあ、再襲撃の宣言も受けたんだけど・・・

まだひしひしとクラスの女子からの視線を感じる中、一際強くギシギシとした線がある。

早く彼女と平和友好条約を結びたい、、、くそっ！あのいまわしき第三の声のせいでっ！！

「それではこの時間では実戦で使用する各種装備の特性について説明する。」

およ、姉さんが授業するのか。自分の家族が仕事してる姿っていうのは新鮮だよねー。
顔がニヤニヤする。

ニヤニヤ、ニヤニヤ

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな。」

思い出したように姉さんが言う。

クラス代表者っていうのはいわゆるクラス長のようなもので、生徒会の開く会議や委員会に出席する人のこと。

勿論、姉さんが言ったようにクラス対抗戦と呼ばれるＩＳ同士の模擬戦闘の代表者でもある。

っふっふっふ！はっはっはっは！！

この時を待っていた！！

僕はこの先起こりうる全ての展開を想定している。

そして、いかなる事態に陥ろうと必ず僕が代表者となれる確証がある！！

ああ、私はクラス代表になりたい。↑演劇モード入って一人称変わった

何故かって?何故、クラス代表などという、ただ時間がとられて面倒くさいだけの役職に就きたいかって?

違うんだよ。その考えを正しくないんだよ。

確かに、クラス代表は、呼び方は違えどその中身は学級委員、代議員、クラス委員長と同じ

委員会への出席、何かと司会進行役、授業が始まっても担当教員が来ない時の先生呼び出し係、やっと放課後になったと思ったら『ああっ!今日委員会あるんだっ!』という残念感

等、全てを担う苦労人

――――――――デメリットしかない、面倒くさい、時間取られる、なんで俺なの、誰かがやるっしょ?

などという幼稚な考えはとうの昔に捨て去った!

クラスのために時間を割き、よりよい学園生活を気付くための礎となること!

それをデメリットと捉えてしまうその頭こそが真のデメリットなのだ！

そしてなにより、面倒くさいからと言って、誰かが必ずやらねばならないその役職を拒否すること、

それは私の主義に反する！！

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく――――――」

まず、代表選出の方法について――

くじ、ジャンケンという方法はありえない。クラス代表という大事な役割を運任せに誰かに決めるなんてことはもっての外だろう。まあ、副担任の山田先生ならありえたかもしれないが。

投票になったとしても紙に書かれる名前は私以外にありえない。入学して初日、まだ誰が誰かもわからない状況で明確に他者との違いがわかる人物がただ一人いるだろう・・・私だ。某イギリスお嬢様という線もあるが、その可能性はさきほどの休み時間でほとんど潰

れた。

だが、投票なんて時間がかかる方法は姉さんならとらない。

となると、代表選出の方法は――――

「はいっ！織斑君を推薦します！」

その場での、立候補もしくは推薦。

ならば！！私がここで取るべき行動は一つ――――――――

「ええっ！？僕っ！？」

――――――何もせず、ただリアクションをとるだけだ。

極めて自然に席を立ちあがる。

完璧だ。完璧な反応だ。だれが聞いても『クラス代表ってなんだろうな～ってボケーっとしてたらいきなり推薦されてビックリしちゃ

いました』という風にしか聞こえない。

この声、さっきの休み時間での第三の声はお前だったのか。田島だな、おぼえておこう。

しかし、今回はよい働きをしたぞ田島。お前のその躊躇なくモノを言える精神、高く評価する。

さっきは君の発言によってオルコットの強烈な敵意を買うことになってしまったが、、、それもまた一興だろう。

私の卓越した話術でその敵意ごと丸め込んでくれるわ。

そして、私の予想が正しければここで、私を支持する声が続々と

「ちょ、ちょっと待って！僕はそんなのしな――」

「わたしも織斑君がいいと思います！」

「わたしもーわたしもー！」

「織斑君以外ありえないｗｗｗｗｗ」

「織斑君に２８票！！」

「わたしもそれがいいと思います。」

ふ、ふはははははははは！！！条件はクリアしたも同然じゃないか！！

さあ、かかってこいセシリア・オルコット。

あとはお前が抗議の声を上げるだけだぞ。

「席に着け、織斑。・・・・・では、立候補者は織斑一夏、他にはいないか？このままでは無投票当選だぞ。」

「ま、待ってくだ」

「待ってください！納得がいきませんわ！」

予定通り、バンっと机を叩いて立ち上がったセシリア・オルコット。

「そのような選出あ認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

まだ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！っわたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

まだ。ここは完璧を持すために彼女の性格の悪さをクラスに露呈させ私への支持率をあげよう。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

もう、その意見に耳を貸す者はいない。

「大体、文化としても護身的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――――」

まだ、自らの評価を下げるか。ここいらで口を挟もう。

「あ、あの！」

「――――なんですの？」

イラだちの目立った、とげとげとした声が私を迎える。

「うぅ、ご、ごめんなさい。その、オルコットさんがイギリスの代表候補生ですごく強いっていうのは知ってるし、僕が物珍しいって理由でみんなから推薦されてるのもわかってる。
当然、オルコットさんがクラス代表にもなるべきだと思うけど――」

「ふんっ、でしたらやはりわたくし」

「聞いて」

「む・・・。」

一度相手に口をはさませる。

「でも、一番強い人が代表にならないといけないっていうきまりはないでしょ。さっきはいやいやな反応してたけど僕もクラス代表やってみたいから。僕が代表になってオルコットさんが指導してくれれば万事解決じゃないかな?オルコットさんは国家クラスで見ても博識だって聞いてるし、オルコットさんの指導があれば他のクラスの代表にもそうそうは負けないと思うから。、、、そ、その、僕頑張るから。」

「さ、猿にモノを教えるほどわたくしは暇ではありませんわ。」

「ぼ、僕だって座学ならそれなりに出来るよ。さ、猿と言われるほどの脳ではないはず。」

さっきは強めに言ったから、今度は下目にでて相手を安心させる。

「ふんっ、何故わたくしがそのようなこと。」

「オ、オルコットさんに拒否権はないんじゃないかな？」

「どういうことですの？」

いける、これならばいける。

「だって、泣いて頼めばいろいろ教えてくれるんでしょ。」

「っ！！？」

ちょっと目をウルウルさせて上目使いにオルコットを見る。

――――――――決まった。

案の定オルコットは顔を赤くし、視線を泳がせている。

「も、もう騙されませんわよ！！そうやって猫をかぶってわたくしを籠絡しようとしてっ！！」

オルコット，君は入学式以来、一番の懸念事項だったよ。私が代表になれるかどうかのな。

成績優秀、容姿端麗、イギリス名家の一人娘、そして一国の代表候補という実力。

君が人を惹きつける要素を充分に持ち得ていた。にもかかわらず現在君を支持する者はいない。

実力トップが代表になるべきという正当性を持った意見にも誰も反応しない。

――――――――――何故、君がみんなから推薦されなかったかわかるか？

教えてやろう。

人を猿呼ばわりし、他国の文化を侮辱し、自らの実力に驕る、上から目線でしか話せない、

男であるというだけで人を見下すようなガキで幼稚な思想を持つ君には！！

イギリス貴族の誇りの意味を吐き違えるお前には！！

国家代表の意味も理解できない貴様には！！

今のセシリア・オルコットには！！

人はついて行こうとは思わないっ！！！！

ふ、ふはははははははははははは！！いいだろう、オルコットお前には特別に私直々の教育指導を施そう。じっくりとじっくりとその捻くれた精神を私が矯正する、本人も気づかない内に善良人に様変わりさせてやるさ。

さあ、あと一押しで私のクラス代表が確定するといったところか・・・

「オルコット，君は入学式以来、一番の懸念事項だったよ。私が代表になれるかどうかのな。成績優秀、容姿端麗、イギリス名家の一人娘、そして一国の代表候補という実力。君が人を惹きつける要素を充分に持ち得ていた。にもかかわらず現在君を支持する者はいない。実力トップが代表になるべきという正当性を持った意見にも誰も反応しない。

何故、君がみんなから推薦されないかわかるか？教えてやろう。
人を猿呼ばわりし、他国の文化を侮辱し、自らの実力に驕り、上から目線でしか話せない、
男であるというだけで人を見下すようなガキで幼稚な思想を持つ君には！！
イギリス貴族の誇りの意味を吐き違えるお前には！！国家代表に意味もわからない貴様には！！
今のセシリア・オルコットには！！人はついて行こうとは思わないっ！！！！
ふ、ふはははははははははははは！！いいだろう、オルコットお前には特別に私直々に教育指導を施してやろう。
じっくりとじっくりとその捻くれた精神を私が矯正する、本人も気づかない内に善良人に様変わりさせてやるさ。
さあ、あと一押しで私のクラス代表が確定するといったところか・・・」

ざわ、ざわ

教室が突然騒がしくなる。振り向くと、姉さんがやれやれといった具合に頭に手を当てている。

なんだ？なんなんだこの事態は？

私が事前に想定した１０２８通りのパターンのどれにもあてはまらない状況だ。

未確認飛行物体でも見つけたか？

「あ、あ、あ、あ、あなたっ！！やはりわたくしを騙していましたのねっ！！！！わたくしの指導を受けたいなどと調子のいいことを言って！！！！またわたくしに恥をかかせてっ！！！！！！」

オルコットが顔を真っ赤にし、頭から湯気をだしている。

・・・しまった！！声に出していた！！！！

まずい！まずい！このままではっ！想定された１０２８通りの可能性の内７５６通りのエンディング――――

「決闘ですわ！！」

やはりか・・・

だが、ここで引くわけにはいかない！　↑もう、半分やけくそ

「ふ、ふはははははははは！！笑わせてくれるじゃないか！オルコットっ！私とお前如きが決闘とな？」

「やっと、本性を現しましたのね。」

こちらを、にらみつけてくるオルコットさん、もう後戻りはできない。

「オルコット、お前は何故ライオンが百獣の王と呼ばれているか知っているか？」

「いきなり何を言い出しますの？」

「答えろ」

「ふん、強いからじゃありませんの。」

「では、どのようにしてその強さを証明したか。現存する動物約１００万種をすべてその爪で狩って見せたか、トラを、鷹を、牛を、うさぎを、キツネを、すずめを、ワニを、すべてを狩ったのか。」

「何が言いたいんですの？」

「ライオンは動物とは格上の存在、龍を狩ってその強さを証明したんだよ。王は動物には一切触れなかった。」

「どういうこ」

「つまり、ライオンである私と、うさぎかそこいらであるお前が戦おうとはお筋違いなんだよ。」

「・・・・・あ、あーはっはっはっはっは！！！あなたこそ笑わせてくれますわ！あなたがライオンだなんて！！むしろうさぎがあなたで、ライオンがわたくしでしょう！！」

「ほう、そうかならば私が王であることをを証明してみせよう。ちょうどそこに龍もいることだからな。」

姉さんを指す。

「なっ！？あなたまさかっ！！」

誰もが驚愕の表情を浮かべている。見なくてもわかる。

何せ僕は第一回ＩＳ世界大会優勝者にＩＳで勝負を挑もうというのだから。

「私は、織斑千冬にＩＳでの勝負を申し込む。」

教室がざわりと揺れる。

「い、いけませんそんなこと！教師と生徒が決闘だなんて。」

今までウンともスンとも言わなかった山田先生が声を上げた。
僕は勝負と言ったのに決闘と言い換えているあたり、よほど衝撃だったのだろう。

「先生はお口チャック。」

丁寧にジェスチャーまでして言う。姉さんはまだ口を開けない。

「は、はいぃ。」

ジェスチャーを返してくれる山田先生。

「あなた、正気ですの？」

激昂していたオルコットさんだけど、僕の発言に少し冷静さを取り戻したらしい。

「オルコット、お前にはないのか？」

僕の声に教室が静まる。誰もが聞き入っている。

「・・・何がですの？」

「お前には織斑千冬に勝つ自信がないのかと聞いている。」

「そ、それは」

「歳を１５にして、ＩＳ搭乗時間３００時間越え、超音速下での訓練を２０時間行ったセシリア・オルコットに。
イギリス第三世代ＩＳ『ブルー・ティアーズ』を駆るセシリア・オルコットに
６機のビットを自在に操るセシリア・オルコットに！

国家を代表する気高き貴族オルコットに！！
織斑千冬に勝てる自信はないのかと聞いている！！！」

「っな、、、っく！あなたこそただの一般人がブリュンヒルデにかなうとでも思っていますの！？」

「ああ、勝てるさ。私には織斑千冬にかてる自身、、、いや確証がある！！」

「ど、どこにその根拠が、、、」

「お前は私が誰か知らないのか、教えてやろう。
幼少期より誰よりも近くで織斑千冬を見守り続け！小学時代は稀代の天才科学者、篠ノ之束のもとで育ち！中学時代にはフランスの象徴、マリアンヌ様の加護を存分に受け！そして何より世界で唯一ＩＳを操縦できる男！！それが！今、お前の見ている人間！！織斑一夏だよ。」

「っく、、、、、」

「今のお前には一生、龍は狩れない。立ち向かうことすら許されない。動物というカテゴリーの中でみじめに順位を争うことしかできない。安心しろ、ウサギとのご戯れならいくらでもやってやる、龍を狩った後でな・・・」

「・・・、・・・って。」

「どうした、オルコット。お前が獅子だと言うのなら」

「・・・しだって、わたくしだって、ありますわ!!織斑千冬を倒す自信が!確証が!!
　このセシリア・オルコット、ブリュンヒルデにもひけをとらぬ実力でしてよ!!!」

「そうか、ならば・・・」

「ええ!わたくしセシリア・オルコットは織斑教諭に決闘を申し込みますわっ!!」

僕こと、織斑一夏は入学式初日からやらかした。

8話だなだな（後書き）

一夏君が言い出したライオンが龍を狩ったから百獣の王になったとかいうのは
嘘です。ググっても出てきません。

次回は一つ番外編をはさむと思います。

9話ですけどなにか

「それで、どうするんだ一夏？」

夕食後の寮の自室にて幼馴染から問いかけに、思い出したくないことを思い出させてくれた。

「言わないでよ、忘れてたのに・・・。」

「忘れちゃいかんだろう。」

「ふぐぅ」

ごもっともだ、世界一のＩＳ操縦者に決闘挑んで『忘れました』はないだろう。

「まったく、お前は何を考えているんだ。昔から変な奴だとは感じていたがまさかこれほどだったとはな。」

「むー！今朝は『昔と変わった』って言ってたじゃないっ！」

「いいや、全然変わっちゃいない。確かに人当りはよくなった、雰囲気も柔らかくなった、だがしかし、お前の心に秘めたる変態スピリッツは今もなお健在だ。猫のかぶり方を覚えただけだろう。」

箒の口から変態スピリッツなんてワードが出てくるとは・・・

この6年間に箒の身に何があったのだろう、、、

ずずっとお茶をすすり直して、もう一度箒が聞いてくる。

「どうするんだ?まさか本当に千冬さん倒すとか言い出すんじゃないだろうな?」

僕もずずっとお茶をすすり直す。

ずずっ、、、、ちなみに今、寮の自室、テーブルを挟んで箒と話してます。

「わけないでしょ。そのために頑張ってオルコットさんを巻き込んだんだから。」

オルコットさんが決闘を申し込んだ後、僕はあのテンションで話し続け、姉さんに勝った方がクラス代表になれるということになった。

そのときの様子、、、

『ほう、そうこなくては面白味がないな。』

これが僕ね。

『では、クラス代表には織斑教諭に勝利した方が、ということでよろしくて？』

こっちオルコット嬢

『ああ、いいだろう。こんなことはありえないが、もし私と君の両方が敗北してしまった場合・・・・・クラス代表は君に譲ろう。』

常識的に考えて、僕とオルコットさんのどちらかが勝利してしまう方がありあないね、常識的に考えて・・・・・

『ええ！ありえませんわ！その心配事は杞憂でしてよ！』

いえ、ぜんっぜん杞憂じゃないです。ごく当たり前の懸念です。

『話は纏まったな、では来週の月曜日、第三アリーナにて織斑、オルコットの両名は私との勝負を行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくように。』

『いいんですかっ！？織斑先生っ！？教師と生徒が決闘だなんてっ！』

これは山田先生。いい慌てっぷりです。

『いいんですよ、本人がやりたいと言っているのだから、、、、、織斑、オルコット、覚えておけよ。』

回想終了ーー

「オルコットを巻き込んだのはいいとして、それが何になる？」

「やっちゃったことは仕方ないから、宣言通りオルコットさんのひねくれた精神を矯正するよ。本人も気づかい内にね。」

箒の質問に対する答えとはなってないけど、話し続ける。

「どうしてオルコットさんが男に対して変な価値観を抱くようになったかっていうと」

「ＩＳのせいじゃないのか？」

「それもあるけど、、、ＩＳだけじゃあそこまで性格は酷くならない。それに、一国の代表なんだから礼儀くらい学ぶでしょ。口には出さないけど、心には思うくらいできるようになる。」

「・・・・・・」

どうやら真剣に聞き入るつもりになったらしい。

「オルコットさんは本人が言っていた通り貴族の末裔なんだけど、母親がその血筋の人で、父親はどこぞの富豪。名家に婿入りした父親は、そのことに引け目を感じ、母親の顔色をうかがうようになったらしい。」

「ＩＳが発表されてからはさらに・・・か？」

「そう、ますます父親の態度が弱くなる。いつもヘコヘコして、他人の顔色うかがってばかり。そんな父親を見て育ったのなら、、、オルコットさんがああなってしまうのもわからないでもない。」

「たしかにな、、、って、どうしてお前そんなこと知ってるんだ?」

「っえ　え～っと?なんでだったかな～?ちょっと、思い出せないかな～?」

「姉さんだな。」

ふごぉ、バレた。

なんか、箒の前で束さんの話をするのは恥ずかしい、、、、、、

「えっと、昼休みに電話したらいろいろ教えてくれた。ほんとにいろいろ」

オルコットさんの作る料理は超まずいとか、スリーサイズとか、機体の弱点とか、チェシルーっていう付き人がいるとか・・・

本当なのかな?

「ふんっ、まあいい。話を続けろ。」

「え～っと、まあこんなかんじでオルコットさんは男なんてよわっちいとか、男は猿と同等ですわとかいう偏見を抱いちゃったわけ。」

「・・・・・・」

いいから早く話せ、という顔

「そのオルコットさんの前に、いきなり自分と対等な立場、いや若干上から目線でモノを話す、自分とその男が決闘することを筋違いだと笑い、ブリュンヒルデを狩って強さを証明するという男が現れたら」

「オルコットじゃなくても衝撃だ。」

正論です。

「衝撃もあるけど、それ以上に期待されるだろうね。」

「期待？」

「箒だってちょっとくらいしたでしょ。この人なら、織斑先生を倒すことまでは無理だけど、何かすごいことをしてくれるんじゃないかって。」

「ま、まあちょっとは、、、私に限らずクラスの大半がそう思っただろうな。」

「オルコットさんからしてみれば、その衝撃も期待も他の人とはケタ違いに大きいわけ。男の人に面と向かって話されたのも初めてかもしれないし、まして自分より強いと言われるなんて思ってもなか

ったろうからね。もしかしたら、オルコットさんが本当に織斑一夏が強いと信じているかもしれない。その可能性は十分ある。」

「入試座学が首席で、教官を倒したという話でか。」

「そう、箒が言ってくれたおかげでね。」

いや、箒が言わなかったらすんなり代表になれていたのか？うーむ、まあいい。

「そんな自分の初めて期待を抱いた男が、いとも簡単にその期待を裏切ったら、さもそれが当然であるように織斑千冬に敗北したら」

少し語尾を上げて問いかける形にする。

「怒る、、、か？」

「そう、そしてその場面はオルコットさんがブリュンヒルデに敗れた後の、第三アリーナのＡピットの中。マイクでもあったら叫びだしたくなるよね。『織斑一夏ー！何をへこたれてるんですのー！』って。」

言いたいこと伝わったかな

「・・・名前か。」

さすが箒さん。

「普通の人からしたら人の名前を呼ぶなんてことは当たり前だけど、僕やオルコットさんのみたいな特殊な人からしたら、名前を呼ぶというだけでも十分な行為だよ。」

僕はまだ、オルコットさんから名前を呼ばれていない。猿としか。

僕だって、箒の名前を初めて呼んだときは緊張したし、躊躇ったし、思う所もいろいろあった。

その感覚がオルコットさんに対してどんな変化をもたらすかはわからないけど――――

「友達が少ない人間の間違いじゃないのか？」

「違うよっ！友達が少ないんじゃないっ！友達と認めるハードルが高いだけだよっ！」

人がオブラートに包んだというのにっ！それに箒も十分・・・

「まあ、わかった。名前を呼ぶという行為に意義があることは認める。それがオルコットの心理状況に何らかの変化をもたらすこともなんとなくわかる。」

「でしょ。」

「だが、その話は出木杉君だ。上手くいくとは思えない。」

・・・ですよな。正直、僕もそんなに・・・

「上手くいかなかったら、いかなかったで、それでいい。」

「・・・・・・。」

何かを期待していたのか、箒は黙っている。

「もともと、織斑千冬にＩＳで挑もうだなんて馬鹿げたことにとって付けたような話だからね。上手くいく方がおかしい。」

「・・・・・・。」

３時間目のように『できるさ！』と断言してほしかったのだろうか

「それに、この生徒と教師の決闘で損する人なんていないんだ。イギリス側は、自分とこの代表候補生がＩＳの世界チャンピオンと戦えて、いいデータがとれるわけだし、オルコットさんからしても同じ。いい経験になるでしょ。学園側も自分とこの教師が一国の代表候補を余裕綽々で倒してくれて生徒からも他の勢力からも威厳を保

てる。僕としては・・・・・・」

「・・・・・・一夏としては？」

この先を言うのは少し嫌だった。

Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

「だが、その話は出木杉君だ。上手くいくとは思えない。」

一夏の考えていることを理解した私は正直な感想を述べる。

オルコットが、一夏に対し大きな期待を抱いたことは事実だろうし、それを一夏が裏切ることは当然のこと、そこでオルコットは憤慨する、大勢の見物人がいるアリーナの放送器具を先生から奪い取って一夏の名前を叫ぶということも予想できる。

でも、そのためには大きな障害が二つ。

一つ、勝負当日までオルコットが一夏に対して期待を抱き続けること。

二つ、オルコットが激昂するような試合を一夏が演出しなければな

らないこと。

前者は、一夏の演技が続けば何とかなるかもしれないが、後者は、不可能に近い。

なにせ相手が千冬さんだ。普通に行けばオルコットが感情を覚える間もなく瞬殺だろう。

一夏はこれらの問題を、どう対処していくのか。

改めて一夏の方へ向き直る。一夏もこれくらいのことは解っているだろう。

「上手くいかなかったら、いかなかったで、それでいい。」

少しだけ、ほんの少しだけ、むっとした。

一夏はそれら二つの問題をどう対処するか弁舌をふるってくれるものだと思っていた。

「もともと、織斑千冬にＩＳで挑もうなんて馬鹿げたことにとってつけたような話だからね。上手くいく方がおかしい。」

オルコットほどではないが私も織斑一夏に期待をしていたのだと思う。

3時間目のように『できる！』と言い切ってほしくて、その恰好の良い姿をみたくて、

「それに、この生徒と教師の決闘で損する人なんていないんだ。イギリス側は、自分とこの代表候補生がＩＳの世界チャンピオンと戦えて、いいデータがとれるわけだし、オルコットさんからしても同じ。いい経験になるでしょ。学園側も自分とこの教師が一国の代表候補を余裕綽々で倒してくれて生徒からも他の勢力からも威厳を保てる。僕としては・・・・・・」

勝手に抱いた期待に、勝手に裏切られる、そんな気持ち

オルコットはこの何倍の気持ちを味わうのだろうか

「・・・・・・一夏としては？」

でも、そんなモノはすぐに吹き飛んだ、一夏のその顔を見て

「結局、姉さんに助けてもらうしかないわけ。なにせ、世界で唯一ＩＳを動かせる男なんだからこれから先いろんな事件にも巻き込まれるだろうからね。そんな時、いや、そうならないためにも織斑千

冬という後ろ盾を僕は失ってはいけない。固い、堅い、盾を常にみんなに見えるように置いておかなくちゃ。この決闘で姉さんの強さをもう一度世界に見せつけられるでしょ。」

「そんなこと全部考えて千冬さんに勝負を・・・？」

「多分姉さんは、ＩＳなんて装備してこないと思う。近接ブレード１本でなんとかしちゃうかもしれない。ＩＳ付けて、イギリスの代表候補に勝ったなんて織斑千冬なら当然だから。」

私の疑問に一夏は答えてはくれず、寂しいような顔をした。

私はその顔を知っている、幼少期一夏はずっとそんな表情をしていた。

大事なことを思いつめているようなその顔が

なにか切なそうに、どこかを見つめるその顔が

助けが必要なのに、助けなんて存在しないと諦めているその顔が

だから上手くいかなくても問題ないよ、と薄く笑ったその顔が

私は昔から大嫌いだった

――――――なら

「一夏、やはりお前は変態だ。」

「っな!?変態ってなにさっ!天才の間違いでしょ!」

表情が変わる、昔はこんな顔をする時の方が珍しかった。

「ふんっ、変態だ。明日から特訓だぞ一夏!計画通りオルコットが叫ぶ前に、お前が撃沈しては意味がないからな!」

「うん、もう訓練機の申請出してるよ。勿論、箒の分も。明日の放課後、第二アリーナね。」

「な、なにっ!?もう許可が降りてるのかっ!?というか1年生は第一回のＩＳ安全講習を受けてからじゃないと申請できないはずだぞっ!!」

「はっはー、学園に謎の圧力がかかったようだねー。」

「また、人の姉をいいように使って!」

「今度、手作り弁当を差し入れするって言ったら、喜んでやってくれちゃったー。」

「っな！私にも差し入れしろ！」

はっはーどうだろうねーと言って、んっんーーっと背伸びをする一夏。

「今日はもう寝よう。いろいろあって疲れた。」

「ああ、そうだな。」

私も疲れた、、、今日はゆっくり寝て明日に備えよう

「じゃ、電気消すよー。」

「うむ。」

歯を磨き、寝間着に着替えた私たちは手早に各々のベットへと潜り込んだ。

照明が消え、初めてのベッドの感覚に挟まれながら思考を巡らせる。

オルコット性格矯正計画で（あの後、一夏が名付けた）懸念されていた２つの問題、既に解決済みらしい。

ＩＳの世界チャンピオンと戦うことになってイギリス政府、ブルーティアーズの開発元はそれぞれ大慌て。オルコットは学園が終わるとすぐ開発元の日本支部へ行き機体の調整、訓練に没頭するらしい。

つまり、私たちのアリーナでの下手くそ訓練をオルコットに悟られないということだ。

２つ目の問題、さっきも一夏が言った通り、既に訓練機を申請済み。訓練内容も某天才博士に『ブリュンヒルデと戦って１０分間生きながらえる方法教えて』と聞いたら、その資料を送ってくれたとさ。束さんができるっていう訓練法なんだからできるでしょ、と一夏が言っていた。

さっきは、上手くいかなかったらそれでいいー、とか言っておきながら、本気じゃないか。

ふんっ、やはり一夏は――

「箒」

暗闇の中、一夏の方から声がする。

「なんだ？」

「そ、その、ありがとう。箒と同じ部屋じゃなかったら今頃枕を濡らしてたかも。」

「私とお前が同室になったのは先生が決めたことだろう。」

「いや、なんか相談に乗ってくれたという意味で、、、気持ちを共有できるのはすごくいいことだから。」

一夏は本当に変わったな。猫をかぶっているだけではないのかもしれない。

――――――

「一夏、やはりお前は変態だ。」

「もうっ！何回変態って言えば気が済むの！！」

少し薄くなった暗闇に幼馴染の声が響き渡る。

そのにぎやかな声は、それからもう１０分ほどの間、途切れることなく部屋に居つづけたとさ

9話ですけどなにか（後書き）

どこかにも書いたような気がしますが箒さんは大人っぽくなっています。

過去に一夏とかかわったことで考え方が変わったのでしょう。

だからこれはキャラ崩壊なんかじゃなくてですね

二次設定を作るうえでの仕方のない行き過ぎた性格の変化

とでも言いましょう↑それを一般にキャラ崩壊という

次回は番外編になるか、本編になるか未定です。

ただ、どちらにしても一身上の都合で少し更新が遅れます。

あしからず

１０話かな（前書き）

この話を読む前に？織斑村一夏よるジャグリング道具紹？介を読むことを推奨します

10話かな

織斑一夏はある病気を抱えていた。

何万人に一人の割合で発症すると言われる稀有な病気。

ＩＳが発展したこの世の中の最新医学を持ってしても治療は不可能。

いや、治療を試みた者がいないのか・・・

故に織斑一夏の朝は早い。

午前5時8分、目覚まし時計に起こされるまでもなく織斑一夏は活動を始める。

病名『ジャグホリック』またの名を『ジャグリング症候群』

――

「いやぁ～やっぱり一日3時間はジャグらないと落ち着かないよねー。」

昨日見つけた、寮の裏のちょっとした広場、特に障害物もなく広すぎず狭すぎずのその場所で、誰に言うわけでもなく呟く。

せわしなく動くその両手の先にあるディアボロ。僕が先輩から借りてるものだ。

「むふふふふー。」

まだ辺りは薄暗い、そりゃあ4月の朝五時半っていうとこんなもんか。

実にジャグリングに適した環境である。

太陽が出ておらず上を向いてもまぶしくない

長袖長ズボンの上下ジャージで快適な気候

道具を落としても、傷が付かない、そして汚れない、手入れの行き届いたきれいな芝生。

「むふふふふふふー。」

こう、やってるだけで癒されるよね、ジャグリングは。

嫌なことを忘れさせてくれるというか、目前の問題から目をそらせる唯一の時間というか・・・・・・

ディアボロの回転をより一層強くし、軸の向きを微調整する

一度呼吸を整えて

閉じた両腕を一気に上空に向かって開く

空高く舞い上がるディアボロ、その高さは寮の最上階をはるかに越えて

最高点まで達したそれは、方向を一転し真下に落下を始めた

右腕を高く上げ、受ける態勢を整える

その質量と速度を伴った自由落下中の物体は

芝生に衝撃を与えることなく、ストンっとハンドスティックで受け流された

「まあ、やっちゃったことは仕方ないよね。」

むふふふーー、

むふふふふふふふふふふふふーーー　↑ジャグホリックの症状その1、ジャグってる時ニヤニヤしてる

よしっ、ディアボロの次はデヴィルさんだ！

Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

午前5時頃ルームメイトのたてたガサゴソという音に目を覚ました。
曖昧でおぼろげの視界のなかで確かに見たもの。
エナメルバッグを肩に下げ、竹刀袋を背負った一夏
勿論、竹刀が入っているであろう竹刀袋。
一夏→竹刀→朝練→剣道

一夏め、演劇部だと言っていたが、やはり剣道の鍛練もするのではないか！
ガバっと掛布団を蹴り飛ばして跳ね起きる、どうやら私はてんしょんの上がった状態らしい。

幼少期の頃の朝練は今も継続中なのだな！
もしかしたら、私が引っ越した後もどこかの道場で修業をしていたのではないか？

そうか、そうか、一夏はそんなに私に勝ちたいかー♪　↑もう、すっかり一夏は剣道をしていると信じ込んでいる
私に勝てないと、すごく悔しそうにしていたものな！

「よし、私が軽く相手をしてやるー♪」

どれほど腕を上げたか楽しみだ。

それにしても一夏と二人きりの朝稽古か、しかもこれから毎日・・・・・むふふ

手早くいつもの紺袴に着替え、普段より少し長く歯を磨き、前髪のチェックを入念に行う。

驚くほど体が軽い。

部屋の戸締りをすませた私は自室を後にした。

・・・・・・発見した、一夏だ。

寮の裏の広場にて草に茂った隙間から垣間見る。おそらく一夏は気付いていない。

黒に1本白いラインの入った上下のジャージ、うむ、一夏は昔からジャージしか着なかった。

普通に出て行ってもいいのだが、一夏が竹刀を振るう姿も久しぶりだからな。

少し一夏の素振りを見てから出よう。

と、一夏が竹刀袋からブツを取り出した。

38、高校男子が試合に用いるサイズの竹刀だ。

むふふー、お前の体格ならもう1サイズ小さくてもよかろうにー。

さあ、早く始めるんだ！お前の成長した姿、私に見せてみるがいい！

この篠ノ之流剣術後継者の篠ノ之箒が後で存分に指導してやるからな！

「ん？」

？一夏が奇怪な行動をとり始めたぞ

竹刀を自分の正面に立てて、、、、どうしたというのか？

「うむむ？」

よくみると両手に何かを持っているな。長細い棒。

三刀流でも極めたか？いや、しかしあんな形で構える流派は知らない、というか存在しないだろう。

「ふむむむ？」

そして、その両手に持った棒で正面に立てた竹刀を左右からコンコンと・・・・・・

コンコンと・・・竹刀がコンコンと・・・空中に・・・

「！？」

ななななななな、何が起こっているんだっ！？

しししし、竹刀が宙に浮いているだとっ！！？？

おかしい！ありえんっ！！！

うわっ！今竹刀が大きく一回転したぞ！！ああ！今度は三回転くらいした！！

「いいいい、一夏っ！！何をやっているんだお前は！？」

グシャグシャと草の茂みをかき分けて、一夏の前に躍り出る。

「あ、箒おはよー、箒も朝練するの？」

言いながら、竹刀は宙に浮いている。

「ああ、おはよー、私もあされ・・・じゃないだろっ！何なんだそれは！」

今までは左右の棒を行き来していた棒が、今度は片方の棒の回りをグルグルと回りだす。

し、竹刀が生きてるみたいだ・・・

「んー、デヴィルスティック」

「で、で、で、でびるすなっく～？！」

「いや、デヴィルスティック。」

Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

「いいいい、一夏っ！！何をやっているんだお前はっ！？」

「あ、箒おはよー、箒も朝練するの？」

と、いきなり現れた箒に特に驚くことなく対応する。

いや、実はさっきから気付いてたけどね。

「ああ、おはよー、私もあされ・・・じゃないだろっ！何なんだそれは！」

竹刀をアイドリング状態から、プロペラという技に移行する。

片方のハンドスティックでセンタースティックを回す技だ。

「んー、デヴィルスティック」

普通に道具名を言ってみる。

「で、で、で、でびるすなっく～？！」

「いや、デビルスティック。」

それにしても箒は驚きすぎ、まあ箒がいることわかってて竹刀で回し始めたんだけど。

「お、おお、お前、剣道の鍛練はどうした？！」

「剣道？箒が引っ越してからやめちゃったけど・・・」

その頃から、朝は別のことをやり始めた。

「何故止める!?」

「いや、箒がいないと剣道なんか面白くないし。」

「・・・そ、そうか、私がいないとか・・・」

何故か、顔を赤らめる箒さん、、、なんで?

「で、落ち着いた?さっきまで肩で息してたけど。」

「・・・・・っふ、取り乱してなどいないさ。よく考えてみれば棒で左右からコンコンすれば竹刀が空中に浮くのは当然のこと、何も不思議なことではない。この程度で慌てていては篠ノ之流剣術後継者の名がすたれ」

ディアボロでエクスカリバーしてみるか

「ほら!箒見て!ディアボロが重力の影響を受けていないよっ!」

「な、なにーーーー!?大道芸でよく見るアレが縦回転になっているだとーーーっ!?うわっ!今一瞬、手に持ってる棒が離れたーーーっ!?何故落ちないんだ!!?重力が働いていないのか?!一夏の半径2メートル以内に重力が働いていないのかーーーーー!!?」

そこまでリアクションしてもらえるとやりがいがあります。

「はあ、はあ、何が起こったんだ・・・？」

肩でぜえぜえと息をしながら聞いてくる。昔から箒はジャグリングとかに興味ない子だったから、免疫がないのかもしれないな、それでも肩で息をするのはやっぱり驚きすぎだけど。

「あれがエクスカリバーだよ、聖剣エクスカリバーだよ！」

このテンションなら箒も乗ってくれるかもしれない。

「そうか、聖剣だったか、、、なら仕方ないな。。。」

いや、これは素で反応してるのか。

箒が気を取り直す（？）までちょっと時間がかかって

現在5時59分、あと1時間はできるね

「箒、ほんとに落ち着いた？」

「ああ、もう大丈夫だ。」

どこか遠い目をして答える箒、まさか本当に聖剣だとか思っていないだろうか・・・

「私はもう行く、一夏も練習頑張れよ。」

「あ、うん。」

「どうした?そんな可愛い顔して?」

可愛い顔って・・・

「なんか意外だなと思って。箒なら、くだらん、とか言ってすぐどっか行きそうなのに・・・」

「っふ、私を昔のまんまだと思うな。」

「人の努力の形に優劣など存在せず、その方向は無限にある」

「それが一夏の道だと言うのなら進めばいいさ!私には止める権利も義務もない」

「行け一夏!世界一のジャグラーになってこい!!」

達者でなーと手を振りながら、去っていく箒。

どうしよう、ちょっとウルっと来ちゃった、、、、、達者でね、箒・・・

午前６時０２分、６年振りの幼馴染は再び別れを告げた。

三十分後

「私もでびるすなっくするぞ、でびるすなっく。」

同じ場所で僕たちは再開した。

ジャージ着てるし、、、、本気か・・・・・・

いや、嬉しいけど。そして、でびるすなっくじゃなくてデヴィルスティック。

「ふむ、明日もするぞ一夏。」

朝練も終えて、シャワーも浴びて、食堂にて朝ご飯。

テーブルを挟んで座った箒がニコニコしながら言ってくる。

昨日の一件もあるせいか周囲からの視線がチクチクと痛い。

「剣道はいいの？練習時間削っちゃうけど。」

『昨日の一件』程度に済ませられることでもないけど、、、、、ほら今も『ええ！それホントだったの！？』『世界初の男ＩＳ操縦者死んじゃうんじゃない？』『いや、イギリスの代表候補も危ない・・・』なんて物騒な会話が聞こえてくる。

「篠ノ之流剣術は技術だけでなく精神面も鍛えなければならない。多くの経験を積むということは、それだけ精神が成長するということだ。故に私がデビルスナックを練習するのも立派な篠ノ之流剣術の修業だ、うむうむ」

発音はよくなったけどまだデビルスティックって言えてない、、、

おそらく箒にはカタカナ語の免疫もないのだろう。自己紹介で趣味はジャグリングって言ったけど、昨日箒はそのことに一切触れてこなかったから。

それにしてもよく箒は篠ノ之流剣術という言葉を口にする。

この６年間にそれを意識させられる出来事があったのだろうか。

「放課後はＩＳ付き合ってね。」

あたたかな湯気を立てているお茶をグビグビしずしず飲みきった後、箒はこう言ってくれた。

「ああ！勿論だ！」

本当に僕は良い幼馴染を持ったと思う。

食器一式を返却口へ運び、僕たちは食堂を後にした。

１０話かな（後書き）

わけあってスマートフォンからの投稿です

改行とか読みにくいところがあるやもしれもしれません

作中でジャグホリックの症状でジャグってル時にやにやする、とありますがジャグホリックの人全てがにやにやとそているわけではありません

本作の一夏君にそのような症状があるというだけです

次回は放課後のＩＳ訓練から始まります

ではでは

11話という名の必然

全ての授業が終わって放課後、僕と箒は第二アリーナへ向けて歩いていた

何人かおっかけがいるけど・・・後ろからついてきてる

「はあ。」

ため息です、僕の

「どうした、ため息なんかついて?」

「おっかけさんがいる、僕の下手くそＩＳ操縦が見られる。」

「オルコットにはばれないんだから問題ないだろう。」

「それは、そうだけど・・・」

オルコットさんはといえば、既に機体の調整、訓練にブルーティアーズ製作元日本支部へと出発済み、といっても、ＩＳ関連の企業は大体ＩＳ学園の周りに集中してるから、そんなに遠い距離ではないけど。

学校での様子も、特に問題なかった。問題ないっていうことはオルコットさんがやる気を失っていないということ。

何故そんなことわかるかって?近寄らないでくださいオーラがびん

びんに出てたから、僕だけに対してじゃなくて他の人にも全員。

「姉さんは何を送ってきたんだ？」

「んー、これ。」

歩きながらだけど、カバンの中から一つのクリアファイルを取り出す。

ほんとは、こんなクリアファイル１枚には収まりきらない量の紙束が送られてきたんだけど、大事な部分だけ抜粋してきた。

「紙媒体？意外だな。姉さんなら千冬さんとバーチャル空間で疑似戦闘ができる機械でも作って送ってきそうだが。」

「いや、束さんもそのつもりでいたけど、僕が止めた。」

アリーナ遠いなー

「何故だ？」

「百獣の王としての最後のプライドです。」

「意味がわからん。」

「っふ、気高き獅子の醜き足掻きよ。」

「ますます意味わからんわ。」

束さんの力を借りすぎると後で怖いから

いや、もう言えた事じゃないけど・・・

◆◇◆◇◆◇◆◇

「や、やや、やっと着いた・・・」

バタッっと地面に倒れ伏す。

どうして、、、こんなに、、疲れている、、、かというと

「お前は力の入れ方に無駄が多すぎるんだ」

格納庫からから、、、ＩＳを運んで、、、きたからです

やっと、、アリーナに、、着いたと思ったら、、、

『いや、まだ打鉄を運んでないだろ。』

と、、箒さんから言われ、、、アリーナへは、、、二回目の、、到着です

「もっとこう体全身から力が作用する一点にだな」

「箒と、、、僕を、、一緒に、、、、しないで」

「まったく、運搬用の台車がついているというのに・・・立て、ＩＳに乗るぞ。」

むくっと、起き上がる。いつまでもヘタれていてはいけない。

視界の隅にさっきのおっかけさんたちが映った、、、数が増えてる、それに・・・

『打鉄に乗るのか・・・』『きっと専用機は対織斑先生用に調整中なんだって！』『いや、持ってるわけないだろ』『なんでよ！』『織斑はつい最近ＩＳを動かせただけのただの一般人だぞ、織斑先生どころか、オルコットにも瞬殺されるだろうよ』『もう！リアーデは織斑君の演説を聞いてなかったからそんなこと言えるの！絶対織斑君は強いわよ！』『一緒のクラスだろ！聞いてたわ！そしてあんなものは嘘八百だ！騙されるな！』

演説て、、、リアーデさんとは友達になれそうだ。

そして僕を信じてくれてる方の人はおそらく田島さん・・・、・・・

ごめんね田島さん

僕を信じてくれてる田島さんのような人たちのためにも、少しでもいい試合ができるよう訓練に励むよ。

さあ、打鉄の起動準備を始めよう。

「ん、どうするんだっけ？まず台車の安全装置を解除して」

一通り覚えたはずなんだけどなー、専用の台車からＩＳを降ろす方法。

え～っと

「遅いぞ一夏、まだ出来ないのか。」

学校（マリアンヌ学園）で習ったのと仕様が違うのか――

「って、はやっ！」

見ると箒の打鉄は既に搭乗できる状態になっていた。

は、はやすぎる・・・！

「この台車は、ワンタッチで搭乗可能状態まで持って行ける最新式だ。ＩＳ学園でも２つしか配備されていない、私のとお前のだ。」

「へ、そうなの？」

そのかわり、ＩＳを台車に乗せる時は従来の物より面倒くさいらしい

箒詳しいな

僕は台車にワンタッチした、いや、実際はパスワード入力とかでワンタッチじゃないけど。

「よし！こっちも準備完了です、先生！」

これからのことも考えて箒のことは先生と呼ぼう。

「お前の教師になった覚えはないが・・・、早く乗るぞ。」

「うぃーっす。」

コックピットに足をかけ、堅い装甲に手を

その時、金属音が聴こえた気がした――――――

「っ！」

慌てて全身をＩＳから遠ざける。

――そんなはずはない

冷たいものが背筋を駆けて、チカチカと視界が点滅する。

――ありえない、こんなものは現実だと認めない

一際強く、心臓が鐘を打つ。それを境にどんどん心拍数が上がっていく

――何回もＩＳを起動してきた、アレが来たのは最初の一回目だけ

とても恐ろしいものが心臓から広がっていくかのように

――不安が創り出している幻の音

頭が黒く犯されていく、視界の端から黒いものがにじみ出始めて

――そう、わかっているはずなのに

「一夏。」

「えっ」

ぎゅっと、あたたかな感覚が右手を包む

細くて柔らかい

「姉さんからお前のことは聞いている。」

「うっ、えっと、その、あの・・・」

そのあたたかいのが全身に広がって――

――僕は今、箒に抱きしめられている。

「私が付いてる、何も怖いことなんてないだろ。」

とても暖かくて、すごく安心する

「落ち着いたか？」

「う、うん、大丈夫。」

さっきまでが本当に現実じゃなかったかのように、体が軽くなった。

箒の髪が頬にすれてくすぐったい、、、でもすごく気持ちいい・・・

「乗れるか？」

箒からのホールド状態が解除されて

「て、手は握っててね！」

再び、右手をぎゅっとする。

「はいはい。」

妙に大人びたその表情が悔しくて

「べ、別に、俺が好きで箒の手を握っているわけじゃないから！勘違いするなよ！」

ツンデレってしまった！しかも、『俺』とか言っちゃったし！！

「うん、昔の一夏に戻った。」

こちらの心情を見通しているかのような笑み。

くそう、恥ずかしい、、、自分でも顔が赤くなってるのがわかる。。。

「ほら、早く。」

「・・・。」

顔を赤くしたまま、ＩＳに触れる

左手が触れた、その堅い装甲から伝わってくるものは

全部、右手からのあたたかみに打ち消されてしまった。

「いけるか？」

「うん、全然平気。」

「そうか」

スッと、右手からぬくもりが消える。そのあたたかみが惜しかった。

「っあ」

って！僕はどこぞの漫画の美少女ヒロインか！

箒もＩＳに乗るんだから、手を放すのは当然でしょ！

もうちょっと手握ってたかったなー、とかぜんっぜん思ってないから！思ってないから！

「全然思ってないから！」

思わず口にしちゃったけど、返ってきたのは

「ふふっ」

ポニーテールを揺らしながら振り向いた、何もかもを見透かしているかのような幼馴染の笑顔。

その顔に見惚れてしまったというのはここだけの話――――

「べっつに～、勘違いなんてしてないぞ～、一夏がもっと私の手を握っていたかったなんてぜ～んぜん思ってないからな～。」

「っな!?」

ニヤニヤと口の両端を吊り上げた憎たらしい顔。

カーっと顔が熱くなる。さっきとは違う意味で体が熱い。

体がフルフルと震える

ふふふふふ、ふふふふふふふふふーーー

「もー怒ったから!!この僕に公共の場で恥をかかせるなんて万死に値するんだからっ!!」

言いながら、打鉄を起動させる。

「どこぞの代表候補みたいなことを言う、わかった、この篠ノ之流剣術後継者、篠ノ之箒が直々に教育指導を施してやろう。いけない生徒にはお仕置きが必要だからな。」

箒が打鉄を纏ったのを確認してから

「決闘だーーーーーーー!!」

打鉄の標準装備、近接ブレードを呼び出しあの憎たらしいニヤニヤ顔に斬りかかった。

「来い、一夏――――――！」

◆◇◆◇◆◇◆◇

勿論、僕は本気で箒に対して腹を立てた訳ではない、箒だってそのことはわかってるし、おそらく束さんから送られてきた訓練方法の内容まで予測してのニヤニヤ顔だったのだろう。こっちは本気で恥ずかしかったのですが・・・

束さん推奨の訓練方法それは、『箒と全力で戦うこと』

送られてきた資料については、姉さんの現役時代のＩＳ戦闘の小難しいデータが８割、箒のＩＳ搭乗歴が１割。

姉さんの方はともかく、箒のデータを見るのは個人情報が満載だったので気がひけた。チラッとしかみてないけど衝撃で胸がいっぱいです。

篠ノ之箒、ＩＳ搭乗時間：３２０時間

ええ、目を疑いましたとも。箒さんがとなりでぐーすか寝てる中で目をこすりました。（昨日の夜、寮の部屋で見てた）

代表候補でもないのにＩＳ搭乗３００時間越え、こんな情報、世界で３人しか知らないだろう、僕と箒と束さん。

ああ、どうりで強いわけだ――――

「ほらー、さっさと立て一夏。まだシールドエネルギーは残ってるだろー。」

と、いうわけで現在進行形で束さん推奨の訓練方法を実行中です。

近接ブレードで脇腹をグイグイと刺激されてます。

「もう、もうちょっとだけ休ませて、お願い。」

決闘宣言から１時間弱、地面にへばり付いて休憩を請う僕の姿、、、情けない。

どうして、１時間もボコボコにされ続けてシールドエネルギーが尽きないかと言うと

「っでい！」

「ふげ！」

こうやって、内部にだけ衝撃を与える攻撃をしてくるからです。普通に近接ブレードで殴られてるんですが、何故かシールドエネルギーはほとんど減りません。でもすごく痛いです、、、

「よーし、2発目を行こうかー。自分から罰を受けてくれるなんて先生感心だぞー。」

「待って、待って！起きます、戦いますっ！」

飛び上がって、距離を取る。

「アリーナ閉館まであと2時間、たっぷり鍛えてやる！」

――――代表候補バリに強い幼馴染に、これから7日間毎日ぼこられたら

「っハ！」

「げふ！」

――――ぼこられ耐性が付いて、

「どう！」

「はげぇ！」

――――ブリュンヒルデ相手にも少しは持ち堪えるかもしれないな

「ふ」

「ぐおわっはぁ！！」

――――束さんの訓練方法は正しい。。。。のかな？

束さんが送ってくれた資料、残りの一割は、、、、、秘密にしておこう。

僕と束さんだけのね。

「何を考えているんだ！！」

「ふごぐわっはあぁ！！」

痛いです。

11話という名の必然（後書き）

もう、一夏君がヒロインでいいんじゃないかって思います

箒さんかっこよすぎですね

フランスの男の娘も箒さんに攻略されてしまいそう

まあ、そんなことにはならないと思いますが・・・？

作者のブログの方でもインフィニット・ストラトスのSSを書いております

原作設定ですが、、、下ネタ多めですが、、、

興味あったらこちらからどうぞ

http://jagurinngusyoukougunn.blog.fc2.com/blog-category-7.html

次回は訓練漬けの日々を描きます

次々回あたり蘭さま登場かも・・・

ではでは

12話（前書き）

ジャグリング道具紹介読んでもらった方がいいです

12話

横に一閃、迫りくる刀身。

当たるわけにはいかない

後ろに躱すか、こちらの刀を合わせるか迷ってはいられなかった。

ヒュンと斬撃音が頭上をかすめる。

しかしそれは、あまりに大きい回避動作

こちらが遅いのか、相手が早いのか、前者でもあり後者でもあるだろう。

既に、その近接ブレードは再び僕を狙っていた。

出せる力の最大限で守りの一手を打ちに行くが、両者の刃が交わることはなく。

ゴンッと骨全体に響き渡る衝撃

痛いというより気持ちが悪い。

体中の臓器と言う臓器が揺れ動いて、ぐちゃぐちゃする。

胃の中の物をすべて吐き出したくなって、その前に心臓がそのポンプに緊急停止を命じた。

あ　あ

あ　あ　あ

息が出来ない、体が固まる。ここ三日間でずいぶんと慣れ親しんだ感覚だ。

ドンッと背中から転がり、３回転４回転、心臓が活動を再開した。

地面に這いつくばって何とか立ち上がろうとするけど

同時、思い出したかのように胃の中の物がせり上がってくる、熱く酸っぱい物がのどを支配し始めた

しかし、それさえも忘れさせてくれるような、とどめの一撃。

蹴り飛ばされたバッタのように、速度を伴って体が宙に浮く。

残虐を楽しむ子供の餌食となった昆虫、

ただの愉悦のために、四肢をもがれ、腹をさかれ、蹴られて、踏みつけられて、捨てられて。

あの虫もこんな気持ちだったのだろうか。

痛みすら感じることが出来なくなり、自分が今どこにいるのかどっちを向いているのかもわからない。

飛んでいるのか、立っているのか、歩いているのか、わからない

何のためにここにいるのか

どうして僕はこんな思いをしなければならないのか

わからない

みじめで、無様で、何の抵抗もできずに捨てられていくバッタ

それが僕なのか

体の動きが止まった。壁にぶつかったのだろう。

首だけを動かした、そのＩＳが残虐行為を止め立ち止まっている。

「すまん、今のはきつくやりすぎた。」

朦朧とする意識の中で、手放せば消え失せてしまうこの意識をこの思考のためだけに使う。

ああ、僕はあなたは人間ではなく鬼なのではないかと疑っていた。

残虐を愉しむ鬼があなたで、私がその餌食。

しかしあなたは列記とした人間としての心を持ち合わせている。

たとえその所業が鬼のようであっても、今の一言であなたを人間として認めることができた。

決して、残虐な行為などではありません。

無礼だったことをお許しください、どうかあなたに幸あｒ

「シールドエネルギーを普段の2倍近く削ってしまったな、すまんすまん」

「僕の心配をしろーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

心と体、両方の痛みを背負って僕は果敢に鬼に突撃した。

犬も猿も雉もいないけど織斑一夏は鬼退治を継続する。

◆◇◆◇◆◇◆

寮の裏。

まだ『いつもの場所』とはなってないけど、それなりに見慣れてきた風景。

気持ちのよい朝日を反射する鮮やかな芝生。

その一角、ベンチの上に置いてある僕のジャグリングアイテム達。

振り向けばそこには、そびえ立つＩＳ学園寮、遠くに見えるのは第二アリーナの屋根かな。

そして・・・

「見ろ！一夏！今、５回続いたぞ！」

放課後いつも僕をぼこぼこにしてくれるＩＳ操縦者。

箒は初日以来毎日、こうやって僕の朝練に途中参加している。現在はデヴィルスティックにご執心だ。

よほど竹刀でジャグリングしたのが衝撃だったらしい。

「おー、やるじゃん。練習４日目にしてアイドリング５回続くって、乗り物に例えるなら渋滞下でのプロが乗るスポーツカーくらいの速さだよ。」

日に日に、こっちに来る時間が早くなっているのは気のせいではないだろう。『６時３０分くらいから行く』とか言っときながら、今日１５分にはいたよね。

「そうだろうそうだろう・・・、・・・あれ、褒められてない気がする。」

「気のせい、気のせい。」

「そうか、、、」

と、再び箒はセンタースティックに向き直り、慣れない手つきで左右からコンコンと1本のスティックに命を吹き込む練習を始めた。

コン、コン、コン、コン、ポテッ

コン、ココン、ポテっ

コン、コン、コン、コン、ポテっ

ああ、惜しいあと一回で箒自己ベスト更新だったのに、、、

それにしても女の子がああやってジャグリングに苦戦する姿は、、、良いな、すごくいい。

失敗すると

「う〜ん、上手いこといかんな〜。」

といちいち反応したり

ちょっと上手くいくと

「おお！すごい！すごい！見ろ一夏！十回以上続いているぞっ！」

と、表情が華やいだり、、、、、男はああいう風には行きません。

箒自体が可愛いというのもあるけど・・・・・っは！いかんいかん僕はあの『箒ちゃんとおてて繋いでＩＳ乗っちゃいました事件』（命名、僕）以来、思考がおかしくなる時がある！注意せねば！

「あー、ほらー、一夏が見ないから落としてしまっただろー。」

「ごめん、ごめん、次はちゃんと見てるから。」

嘘です、ずっと見てました。

「まったく、、、」

頬をぷくっと膨らまして、センタースティックとにらめっこを始める箒。

・・・。

デヴィルスティックという道具を始めて間もないとき、今の箒のようなアイドリング状態もままならない時は、スティックを落としては拾いを繰り返す。それでだんだん上手くなっていくんだけど、、、下手な内は常に腰が曲がった状態になる。センタースティックは７０センチ程度、股下くらいまでの長さ、その真横の位置まで両手を持っていきハンドスティックで叩いて上げていくから、どうしても腰が曲がってしまうのだ。

え～っと、箒が着てるのはジャージで、、、ちょっとサイズが小さ

いのかな、、、

腰を曲げるということは、服の裾が持ち上がるということ。

今、僕と箒は向かい合わない形で、僕が箒の方を見ていて、箒も僕と同じ方向に体が向いている。

つまり、箒が女性らしい丸みを帯びた形の良いお尻をこちらに突き出している状況で、その上部薄いピンク色の布がチラチラと・・・・・チラチラと・・・・・・

め、目が離せません、、、

「ぬー、また落ちたぞ。」

ああ！箒が落としたセンタースティックを拾おうとさらに姿勢を屈めて！！

薄いピンク色の面積がっ！！

見えてる！！み・え・て・ＲＵ！！！

「？どうした一夏」

鼻の奥に熱いものを感じた時、体を支える力がなくなって、するっと意識が抜け落ちた。

「おい一夏！鼻血！鼻血！！」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ファウンテン、、、

「一夏！」

「っは！？僕はいったい何を？！」

突然の意識の覚醒にビックリする僕。

「何って、、、ポイを振っているだろう。」

「ポイ？・・・・・あ、ホントだ。」↑ジャグホリックの症状その２：無意識にジャグってる

思い出したぞ、箒の『アレ』を見て、何故か真剣にジャグらなければならないと直感した僕は本職であるポイでジャグり始めたんだ！！

はて？それにしても箒の何を見たのだろうか、、、思い出せない

箒、、箒の、、薄い何かを、、薄い、、、薄いピンｋザアアーーーー！

ジャグホリックの症状その３：ジャグリングは思春期の煩悩さえも犯してしまう

思考にノイズが入る。まあ、思い出せないってことはさして重要なことではないのだろう

「もう時間だぞ、７時１０分だ。」

「そだね、かえろっか。」

「ああ。」

素早く帰り支度を整えて、、、と言っても僕の道具を片付けただけですが。
寮の自室を目指した。

その帰り道、そろそろ芝生が見えなくなる位置で呟いた。

「今日で最後だね。」

「そうだな。」

主語を置かなくても理解した箒は、僕の雰囲気で悟ったらしい。

顔つきが変わった。

「不安か？」

屋根があり、左右を等間隔でサクラの木がはさむ、綺麗な通路に一歩足を踏み入れて。

「・・・、・・ブリュンヒルデとの決闘を間近に控えて不安にならない人なんていないよ。」

まだ金曜日、決闘の日は来週月曜日だから。『最後』と言ったのは訓練のこと、土日はアリーナの整備、点検をするらしいから訓練は出来ない。

「どうかな？オルコットさんの性格。」

忘れがちだけど、この決闘の目的はオルコット嬢の性格矯正にある。

「さあな、そっちはまったくわからん、、、ただ」

「ただ？」

間を空けた箒、その視線の先にはただ桜の花びらが散っていた。

「お前もオルコットも千冬さんには勝てない、勝てないどころか傷も与えられない。」

間接的に、僕が弱いと言われて腹を立てた訳ではない。

「でも、姉さんは」

「お前の言った通り、千冬さんはＩＳを装備してこないかもしれない。」

「なら、僕はともかくオルコットさんなら、、、仮にも代表候補だよ」

寮の玄関口が見えてきたところで、箒は立ち止まった。

「お前は、織斑千冬を知らない。」

「え」

僕も止まった。

いつもはきれいだと褒め称えていた、舞い散る桜の花びらが、『僕』も『俺』も知らない箒の表情とのコントラストに、その歪さを際立たせる。

「私はＩＳとも、篠ノ之束とも、長く付き合っている。当然、お前の知らない織斑千冬も私は知っている。」

「、、、どんな？」

「あの人は人間じゃない。」

箒は姉さんに対して『あの人』という呼称を使った。

６年前、僕が束さんの所在について聞いたときと同じ顔で。

『あの人』、箒は昔、束さんに対してそう呼んでいた。

”束さんは？”” あの人なら今日はいない” 道場で朝だったかな・・・

「比喩？」

「人間以外に見えるのか」

あの人という言葉に思う所があったのか今度は主語を置かなかった。

もちろん、比喩だと言っているのだが。

「それに、千冬さんはお前の思ってる以上に」

「大丈夫！」

箒の言葉は遮った、大体言わんとすることが分かってきた。

小さい頃、僕と姉さん、少しギクシャクしてたから。姉さんは好意的に接してきてくれたんだけど、僕はそれを受け入れられなかったというかんじで。

箒は僕と姉さんの関係を心配してくれていたのだろう。

「箒だって、織斑一夏と言う人間を知らないでしょ。」

「っぬ、、」

「僕だって成長したんだから、姉さんとは上手くいってますー。」

「ぬぬぬ」

「今回のことだって、実はもう姉さんとは話し合ってるし、殺さないでねとも頼んでるし。」

「ぬぬぬぬ」

「姉さんとの関係は良好です、したがって箒の心配は杞憂です。」

「、、、ふん」

腕を組んで、顔をそらす箒。

「帰るぞ、無駄な立ち話をしたからな！」

スタスタと早足で玄関へ向かった。

「ああ、ちょっと待ってよ！早いって！」

「いいだろう！別に！私の心配事なんて、空から槍が降ってきたらどうしよう、と考えるくらい杞憂なことなのだからな！！」

「そこまでは言ってないって!!」

スタスタと僕の駆け足より早い歩きで進む箒だけど、玄関先階段の前で立ち止まった。

「どしたの?箒の心配事なら束さんが僕と結婚したらどうしよう、って考えるくらい杞憂だよ。」

「・・・放課後、覚えておけよ一夏、、、」

ギロリっ!こ、こわい。。。

「私のタオルがない、いつも持って行ってたやつだ。」

「むこうに忘れてきた?どんなやつ?」

むこうっていうのは僕たちがジャグリングしてたところを指して言った。

「薄いピンクっぽいやつだ。」

・・・、・・・・、・・・・、何故か、その薄いピンクのありかを知ってる。

「はっはー、腰にでも巻いてるんじゃないかなー、はっはー、は、ははははー」

「おお！本当だ！よくわかったな！」

はっはー、ははははは、なんだろうこの焦燥感、ガッカリ感。

なんかとっても切ない気持ちになってきたぞー。

というか思い出しちゃったなー、僕はあの薄いピンク色みて鼻血出したんだよねー。

ははー、ははははははは

「なんで腰になんて巻いてるの！？なんで！！」

「ど、どーしたんだ？」

箒が単純に僕と姉さんの関係を心配しただけなら、姉さんを『あの人』なんて呼ぶことはなかった。

そこには何か別の事情があるのかもしれない、でも今の僕は薄いピンク色に頭がいっぱいでそんなことは考えようともしなかった・・・

12話（後書き）

戦闘描写頑張りｍした

一夏君が気を失っているときの文はポイの技名です

ほうきさん伏線張りまくりですね

次回は土日とセシリアさんを少々です

のし

13話ですよね

――その姿が母と重なって見えた。

安全ガラスの向こう側、多くのコードに接続された青のＩＳがあった全体的に薄暗く、機械的な部屋だ。

おびただしい数の情報が流れるモニターとにらめっこをする研究員が数十名、その指は視認できないほどのスピードでキーボードを打ち続けている。

研究員はみな明日の試合への調整に必死なのだ。

万全な機体で世界チャンピオンに臨んでもらいたい、そう思うのは研究員として当然のこと。

そんな人たちの邪魔にならないようにと、少し離れたところから自機を見つめる黒のベンチコートがいる。

それは紛れもなくＩＳ操縦者、セシリア・オルコットだった

思い出していた光景はちょうど一週間前、ＩＳ学園の入学式の当日。

初めて喋ったとき、”なんだあの人と同じか”と思った。

結局、ＩＳを動かせるようになっても男は『男』でしかないと落胆

気弱でヘコヘコして、こちらの顔色をうかがってはすぐに謝る。

おまけに男とは思えない体つき、あれじゃ労働力にすらならない。

しかし、その男が他の者と一線置いていたのは事実、

頭はそれなりに良いみたいだし、礼儀もある、容姿だって整っている。懐柔して家の召使いにしても良いとまで考えた。

自分に女としての魅力が備わっているのは知っているし、まだ誰に

も行使したことはないけれど、あんなやわそうな男ならすぐに自分のモノに出来る自信があった。

世界で唯一の男ＩＳ操縦者を思うままに弄ぶ、その優越感に浸るのも悪くない。

もっとも弄ばれていたのはこっち側だった

3時間目

人懐っこい女顔の裏に隠された、あの男の本性。

今まで合ったどんな男にも、こんな態度をとられてことはない

弱々しかった口調はどこへ行ったのか

――――セシリア・オルコットを否定し

自らを下げる卑下する日本人らしい人格はどこへ消えたのか

――――ウサギは引っ込んでいろと、お前では私に勝てないと――

『男』という生き物は猿にも劣る、そう今でも信じてる
――ブリュンヒルデに勝てると断言し、わたくしに問うてきましたわ

『お前は織斑千冬に勝てないのか』

そうだ、男が劣等種であるとするなら、最初から織斑一夏になんて目をつける必要はなかった。

ＩＳ学園にはただ珍しいだけのチンパンジーより、確かな実力を持った者がいる。

何より悔しかったのはその男と母の姿が重なって見えたということ

意味のわからないたとえ話から入って

わたくしに厳しく

堂々として、はっきりとした語調
目をそらさずに
誰もが不安に駆られるようなことを、わたくしには絶対できないようなことを、断言した

母のようになりたいと、ずっと追い続けたその境地に
織斑一夏は既に立っているというのか

認めたくない
自身より男のほうが優れているなどと認めたくない

認めたくない
自身より母に近い者がいるなどと――――
――――それが男であるなどと

「オルコットさん準備が出来ました」

「・・・」

「オルコットさん？」

「ええ、今行きますわ」

（織斑、、、一夏・・・口だけでしたら承知しませんわ）

白衣のいかにも研究してますといったかんじの研究員（女）に呼ばれ、セシリア・オルコットはベンチコートを脱ぎ捨てた。

Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

日曜日の夜、いよいよ姉さんとの決闘を目前に控えた僕は、この最後の休日を何に使ったかと言うと、どんな訓練をしていたかというと

寮の裏の広場で、ずっとジャグリングしてました。

いや、違うんだって！僕だってこの土日は姉さんの過去の対戦動画を見て対策を練ろうとか精神的な鍛練をしようーとか思ってたんだけど！箒がどっかに行っちゃったの！そして日曜日の午後7時半になった今でも帰ってこないの！

故に僕がこの土日を全てジャグリングに費やしたのは正当だ！・・・お弁当まで作ったんだから！

一日中ジャグるっていうことは当然、他人に見られる寄ってくる。

ジャグラーなんて見られてなんぼの商売、そういうのは気にならないんだけど、、、いやできればこの学園の人には内緒にしたかった

んだけど。

人が寄ってくるということは、話す喋る　→仲良くなる

その結果が・・・

トントントン

『お～りむ～らくーん、一緒にお風呂入ろうよー』

『部屋のシャワーは故障中でしょー、意地張らなくていいって～』

『大浴場は広いよ～』

『一緒に来たら、お姉さんがイ・イ・コ・トしてあげる～』

ワイワイ、ガヤガヤ、ワイワイ、ガヤガヤ

この状況である。

さっき振り切ったと思ったら・・・まだ追いかけてきますか

扉の向こう側に複数の人の気配、十人以上はいる

聞いた感じ3年生で一番最初に僕に絡んできた人たちだ、、、はぁ

「はっはー、すみません。もうアリーナのシャワー使用許可もらっちゃってます。」

『っえ、こっちは織斑一夏の貸し出し許可もらっちゃってるけど？』

「誰からですか！？」

『もちろん、織斑先生から』

「・・・」

っふ、そんな見え透いた嘘、騙されるとでも思っているのかね。姉さんが僕の貸し出し許可なんて出すわけがない。

『ほら、織斑一夏及び入浴する者全員が水着を着用している場合、織斑一夏が女子風呂に入ることを許可するってところに直筆でサインしてもらったから』

姉さんの威を借りてビビってもらおう。

「嘘だったら、姉さんに言いつけますよ～」

『うん、いいよ』

む・・・、ＩＳ学園の3年ともなれば姉さんの恐ろしさはわかっているはず。にもかかわらずこの反応、まさか本当に僕の貸し出し許可が？

『こっちに実物あるから見てみ。』

確かこの人、演劇部の部長だったような気がする。その何気ない言い回しに騙されたのだ

アホな僕は”筆跡鑑定でもしちゃる”とか思いながら、ドアの鍵を

カチャ

「開いた！開いたぞーー！」

「かこめー！逃がすな！！」

「ぐっへっへー、まんまと騙されやがってー」

「口をふさげーー！手足を縛れーーー！」

すぐにドアを閉めようと思った、でももう体は動かなかった。

腕とか脚とか全部、女の子特有のやわらかい手足で拘束されてた。

いろんな部分で女の子と触れ合ってた。鼻血出さなかった僕はえらい

「連れてけ！連れてけーー！！」

「ダメです隊長！織斑千冬が異変に気づきました！！」

「馬鹿な！！早すぎる！！」

「奴は自宅にいるはずでは！？」

「慌てるな！迎撃の陣を敷く！！総員配置に着け！！」

「「「「「おおーーーー！！」」」」」

何やら僕の知らないところですごい闘争が起こっているようです

「早く！！織斑一夏を浴場へ！！入れてしまえばこっちのモノだ！！！！」

「でもっ！それじゃ先輩たちが！！」

あ、僕を拘束している人たちは1年生なのね

というか既に動き回れるレベルに拘束とかされてないけど・・・

「後輩っていうのはな、、、先輩の言うことを聞くもんなんだよ！！早く！！！」

「は、、、、はいっ！！」

聞く場面によっては後輩いじめみたいにも聞こえるけど。

「織斑君走って！」

「あ、うん」

僕は走った、どこに向かってるのか、これからどうなるのかとか忘れちゃったけど、とにかく雰囲気で走ってしまった。

そして僕たちは無事目的地にたどり着くことが出来た。

しかしそこには多くの犠牲があったこと、絶対に忘れてはならない。

◇◆◇◆◇◆◇

「もう、、、、お婿に、、、いけ、ない、、、、、」

３０分後、妙にツヤツヤしたお肌といつにもましてサラサラな髪を手に入れた僕は自室のベッドへよろよろと倒れこんだ。

それと女子用スクール水着も手に入れた・・・どうしてそんなものゲットしたかは、、、、察してほしい。

『わー、肌白いねー織斑君』
『しかも、つるっつる！』
『わたしより細いよこれ、体重何キロ？』
『あとで髪洗わせてね！！』
『っあ！ずるーい！髪は私が担当するんだよ！！』
『じゃ私、上半身ね！』

『えへへー、アタシが下半身を洗っちゃる～』
『か、体は自分で洗いますっ！！』
『も、もう我慢できないわ、お、織斑君のスク水姿ハァハァ、ハァハァ』
『ひぃぃぃぃぃ！そんな手をワキワキさせて寄ってこないでください！！』
『嫌がる織斑君を無理矢理／／／／／』
『むしろこのまま放置するのもいいかもしれない』
『口ではいやと言いながらも全く抵抗の力が入らない織斑君であった』
『入ってます！抵抗の力入りますから！！放置しないでっ！！』

結局、体も洗われてしまった。前の下半身だけは死守しましたが・・・

その後、湯船にまで連れて行かれそうになったけど、そこで逃げてきた。多分湯船に浸かっていたら、ここに帰ってくる時間がもう１時間ほど遅れていたと思う。。。

その帰りし、姉さんに正座で説教されている3年生約１５名と遭遇した。姉さんは僕を見るなり『大丈夫か！？怪我はないか？何もされなかったか？！』と、すごい剣幕。どうやらその１５名にはグランド（４００ｍトラック）２５０周の刑が決まっていたようだけど、なんとか刑の執行を取りやめにしてもらった。

『一夏！どうしてそんなことを言うんだ！』

学校であるにもかかわらず名前で呼んでくる姉さん。

『結局、女風呂に入っちゃたのは僕の責任だから。先輩たちは悪くないよ』

僕のせいで先輩方がつらい思いをするなんて少し後味が悪い。

『こいつらのせいでお前は』

『あーあ、こっちの生活も落ち着いてきたし、姉さんのお弁当作り再開しようって思ってたのになー』

『ぬ、ぬ』

『なんだか、やる気失せてきたなー』

『・・・』

3年生の方々から散々お礼を言われた。隊長って呼ばれてた人なんて泣いてたからね。

束さんといい、僕のお弁当ってそんなに嬉しいのかな

それにしても女子の統率力、情報伝達力はすごい。お風呂場に入ってくる人も、出ていく人もみんな水着を着ていた。

一体いつから、僕を女子風呂に入れることが計画されていたのだろう？

ああ、もうどうでもいいや、、、このまま眠ってしまおう、、、この柔らかなベッドの感覚に身をうずめて、、、

目を閉じると、少しさみしい気持ちになった。

ずっと、あんな自分を演じ続けなければならないのだろうか

何をされようと笑って受け流して

常に相手のことを優先して

言いたいことを喉の奥で抑え込み、

マスコットみたいに扱われ、されるがままに女子風呂まで連れて行かれてしまう

今日だってほとんどジャグリングなんて出来なかった。寮の裏の広

場で入れ替わり立ち代わりやってくる女の人に話を合わせていただけ・・・

これが友達を作るっていうことなのかな?

二人目の幼馴染が僕に与えた課題は予想以上の難題だった

・・・・・・正直、面倒くさいし、しんどい

明日には織斑先生との決闘も控えてる、その後のオルコットさんとの付き合いも控えてる。

この先、上手いことやっていけるか不安、、、いっそ中学の頃みたいに

『なにかあったら電話してくださいね』

瞼の裏に焼付いたその笑顔で、不意に後輩の言葉を思い出した。

電話、、、後輩に、電話

ひょっとして『なにかあった時』っていうのはこういう時のことを言うのではないだろうか？

『一夏さん、溜め込みやすいんだから』

今まさに、僕は『溜め込んで』いるのではないか

、、電話、蘭ちゃんに？

そんな言葉の解釈よりも、僕はその後輩に電話をかけるという行為に自然と頬が緩む。

よしっ！蘭ちゃんに電話しよう！

名案だ！どうして最初から電話しなかったんだろう！！

むっふふーー、

思えば蘭ちゃんは僕の唯一無二の親友ではないか！！電話しない方がおかしいっかたのだ！！！

いつもの左ポケットからケータイを取り出し、数少ない電話帳の中からその名前をＣｒｉｃｋ！Ｃｒｉｃｋ！

早く出ないかな、出ないかな？

ふとんを抱きしめて、ベッドの上でごろごろと転がる。

やばい顔のニヤニヤが止まらない、どうして蘭ちゃんに電話するだけなのにこんなに心が弾むのだろう

ごろごろ、ごろごろ、にやにや、にやにや

早く、早く出て！

『もしもし、一夏さん？』

そうだ、これだ、この声が聞きたかったのだ。

僕を変わらせた張本人、五反田蘭。

この人がいなければ幼馴染に『変わった変わった』と言われることもなく、ＩＳの世界チャンピオンとも戦うことはなかったであろう。

中一の冬からずっと支えられてきた、そうでなければ僕は未だにありえない理想を追い続けていた。

ついこの間だって、蘭ちゃんがいなければ一人で博覧会に行っただろうし、あの暗闇からも抜け出せなかったかもしれない。

改めて気づいた、五反田蘭が占める僕の心の面積は、、、、あまりにも大きい

――――――僕は五反田蘭が好きなのかもし

『すみません、今アマトークがいいところなんで、終わったらかけ直しますね。』

ツーツーツー

アマトークに負けた、、、、アマトークに、、、負けた、、、

◇◆◇◆◇◆

『もしもし、一夏さん。さっきはすみません。』

あれから1時間、待ち続けた1時間、ベッドの上で泣き続けた1時間ようやく僕の携帯が声を出した。

「・・・」

『一夏さん?おーーい』

謝ったって許してあげないんだから!僕が味わったこの1時間の気持ちを!!

「ふんっ、今後３０秒間、蘭ちゃんとは一切口きかないから！！」

『あははー、３０秒ですかー。また随分と弱気にでましたねー。』

「・・・・・・」

ホントは３０年間と言おうとしたのだけれど、全身からの拒否反応で口が３０秒と開いてしまった

・・・３０秒がいかに長いか思いしめちゃる。

『実は今回のアマトークスペシャルではジャグリング芸人さんが集まり』

「何それっ！？詳しく！！」

『あれ、まだ３０秒経ってませんよ？』

「もうそのことはいいの！蘭ちゃんがジャグリング動画見てたって言うなら、たとえ砂漠を3日間彷徨って喉がカラッカラの状態の僕が五反田家に訪ねても、蘭ちゃんの事情を優先してもいいから！！」

『ジャグリング動画じゃなくてアマトークですけどね。』

もう、僕が1時間泣き続けたとかどうでもいいや！

「って！？どんなだった！！」

『え～っと、一夏さんが持ってる道具がいっぱい出てました。』

「うんうん！！」

『ゲストに黄色いドラゴンの着ぐる』

「ひょ○が君が！？ひょ○が君が出てたの！？」

「他には！！他には！？」

『録画しておきましたから、そんなに慌てないでください。』

「じゃ、明日行く！」

『平日ですけど』

「じゃ明後日！！」

『まだ火曜日ですよ、どんだけ楽しみなんですか！』

「今度の土曜日ね！！」

『はい、待ってます』

「絶対だから！」

むふふふふー、土曜日は久々に蘭ちゃんの家の近くの公園でジャグるかなー
僕にとっての『いつもの場所』は到底そこだからね！ホームグラウンドと言っても差し支えないよ！！

『ほいで、ホントは何の用事だったんですか？』

「絶対だから！！」

『わかってますって！』

「っあ、ジャグリング芸人のところだけでいいから。他のところはＣｕｔ！Ｃｕｔ！」

『一夏さんもアマトークという番組システムは理解してるんですね、大丈夫ですよもう処理済みですから』

さすが蘭ちゃん、わかってらっしゃる

「それで僕が何故蘭ちゃんに電話を掛けたかと言うと・・・」

『いきなり本題に戻りますか』

「う～ん、っと」

『どうしたんですか？言いにくいことでも？』

変にカッコつけるよりも、素直に言った方がいいかもしれない

「蘭ちゃんの声が聞きたかったら！」

『ええ！？一夏さんされってどういう！？』

「僕明日死ぬかもしれないけど、ひょ○が君のためなら頑張れる！！」

『そこはわたしのためじゃないんだ・・・』

「ん？なにか言った？」

ちょっと聞き取れなかった。

『い、いえ！なんでもっ！！』

「そう、、、なんか蘭ちゃんにいろいろ話したら元気になった！！」

『まだいろいろの”い”の字も聞いてない気がします』

「っえ、言ったでしょ。明日僕が姉さんと戦うこととか、今日女子風呂に入ったこととか、最近放課後はいつもボカスカにされてるこ

ととか」

『聞いてませんよっ！どれ一つ聞いてませんよっ！そして2つ目！！2つ目犯罪です！！』

ん？2つ目？そっかよく考えれば僕、女子風呂に入ったんだよね、そりゃ犯罪もいいところだ

「しょうがないなー順番に説明してくよ、どれからがいい？」

『女子風呂！！女・子・風・呂！！』

「女子風呂だあ～？まったく蘭ちゃんも思春期だな～」

『一夏さん、私の手が滑って削除ボタンを押してしまう可能性もなくはないんですよ』

何の削除ボタン？と聞きなおそうとしたけど、即座に思い出した

「やめて！消さないで！！話すから、ちゃんと話すからっ！！」

『そうですか、なら話してください。もっとも、話したとして私が削除決定ボタンに圧力をかけるかどうかは別の話ですが』

「違うの！不可抗力だったのっ！！」

これから先、1時間くらい話してました。箒が帰ってこなかったらもう2時間は電話してたと思う。

蘭ちゃんと話すのは、他の人と話すのとは何か違う。何も考えずに話せるというか安心するというか、う～む何故だろうか？

まあいいか、今日は幸せな気分で寝られそう。箒に『なにニヤニヤしてるんだ気持ち悪いぞ』と言われても全然気にならない。

今日は久々にいい夢が見れそうな気がする。。。。

13話ですよね（後書き）

投稿が遅くなりまして、遅くなりまして

最近、忙しいでごわす

作中、一夏氏が黄色のドラゴンのぬいぐるみをひょ〇が君と言っていますが
ジャグリング界ですごくすごく有名な人です
作者をジャグリングの世界に更に深くおとしいれてくれたかたでもあります

次回いよいよ、ＶＳ千冬さんです

投稿はなんとか1週間以内にと考えております

もう3回くらいでオルコット城陥落でございます

ではノシ

１４話なはず

月曜日の放課後、もうすぐ僕とオルコットさんのどちらがクラス代表となるかが決まる時。

山田先生に連れられて、三人分の両脚がコツコツと音を立て廊下を進んでいく。言うまでもなく第三アリーナのピットに向かっていた。

道中、いろんな人が応援の言葉をくださった。学年、国籍、生徒教師問わず『死んでも骨は拾ってやる』とか『負けたら私と結婚だからー！』とかとか。中には『ダメーっ！行かないでー！』と泣いてくれる人もいた。そりゃあ、背中を流し合った仲ですよ！友情だって芽生えるってもんです！思い出したくないけど。

そんないろいろな激励のお言葉をいただく度に・・・

現在、前方を歩いているイギリス人がすごく怒っていますオーラで、イラつきを含んだ表情で僕を睨んで来るのだ。

「随分と軽薄なお付き合いをしていらっしゃるそうで」

ただ連続する足音に亀裂が入った。この瞬間、三人分の足音が僕とオルコットさんの間に流れるＢＧＭに切り替わる。

皮肉と嘲笑を含んだ声、その表情はこちらからでは伺えない。

「先日、女子風呂に同席されたとか」

この季節まだまだ需要のありそうな黒のベンチコートを身に纏うオルコットさん。ちらっと見たかんじ中はもふもふしててすごく温かそうだった。だがＩＳスーツを着ている限りそんな需要はなくなる。

空調調節システム搭載、常に安定した暖かさが着用者に纏うのだ。外気が寒くても暑くてもスーツを着ているときは関係ない。

ＩＳスーツは昨日僕が着用した水着同然の露出度、周囲からの目を気にして上着を着る人も少なくない。しかしオルコットさんはそういうタイプではない、堂々として、周りなんて気にしない。

それにオルコットさんが何らかの事情であの上着を羽織らなければならないとしても、あのベンチコートは、、、何故。

よく見れば、いやよく見なくてもわかる。それがホントの色であるかのように大半の部分が煤汚れて、縫い直された箇所がほとんど、大きすぎてもう少しで裾が床にすりそう。

とてもイギリス名貴族が好き好んで着る服には見えない。
どうしてそんなものを――――という疑問をよそに

「いいように扱われて、、、仮にも男としてのプライドはありませんの？」

バシュっと圧縮空気の抜ける音で自動ドアが開く、ピットに着いたのだ。

同時にそのベンチコートが初めて振り返り、ようやくオルコットさんとご対面。想像の通り僕を見下すような目をしていた。

険悪な雰囲気を感じ取ったのか、山田先生はおろおろとしている。

「そんなに見たかったの？僕の女子用スクール水着姿」

「っな？！スクール水着！？」

あ、あなた！！と詰め寄ってくるオルコットさんを、すっと鼻で笑って躱した。

「山田先生、ここがピットですか」

極めていつもの声で硬直状態の副担任を呼び覚ます。イギリス人は苛立たしげに舌打ちをかました。

「お、おお、織斑君はここに入るのは初めてですか!?」

どんだけ慌ててるんですか山田先生。このピットには普段、生徒は立ち入れない。入れる時は今みたいなＩＳ同士の戦闘を行う時なんだけど・・・入学して１週間でここに来た生徒は僕がＩＳ学園史上最速らしいです。

「すごい機械の数ですね、山田先生これ全部わかるんですか?」

あからさまに山田先生が”よくぞ聞いてくれました!”と言う顔になる。ご機嫌取り成功。

「わかりますよー、ぜんっぶわかりますよー!研修期間中はいやほどここに通ったんですから!!」

えっへんと胸を張る。

手を引いて、ピット前方の僕が指した『すごい機械』の方へと連れられる。イギリス人は付いてこなかった。

ちなみに山田先生の相方、織斑先生は、、、これから無謀にも僕が特攻を仕掛ける相手は、向こうのＢピットで待機中だそうです。ＩＳの装着にはいろいろと時間がかかるそうで・・・ＩＳ装備するのか・・・?

「あっちのモニターが操縦者の安全状態を・・」

箒は先生方から『織斑君の指導をしていたのだろう、君にもピットへ立ち入る権利がある』とピットへの同室を勧められていたが、丁重にお断りしていた。『いえ、一般生徒がやすやすと入れる場所ではありません。織斑君の成長は観覧席から見守ります』と。

「このレバーは非常時、アリーナの遮断シールドを強制的に・・」

箒が僕のことを『織斑君』と言ったのは先生の前だったからで、決して決して僕と箒の仲が悪くなったというわけではない。今日の朝あたりで『女子風呂入ったよー』って言ったら僕をゴミでも見るかのような目で見てきたけど、、、『織斑君』とまで言われるほどではないはず、、、ないはず

「このつまみについている出っ張りは設計ミスかと思いきや・・」

(箒、来てほしかったな・・・)↑深層心理の声

いや、全然思ってないから。箒に付き添ってほしかったとか全然思ってないから!!

「織斑君、聞いてます?」

にょきっと顔を覗き込まれる。ちょっとびっくりした。

「え、ええ聞いてますよ。ある特定のキーを押さえながら、出っ張りに触ると外部と連絡が取れるんですよね。テロ対策で『操作しろ！』って言われた時の」

「ど、どうしてそんなこと知ってるんですか！？」

マリアンヌ学園で全部習いました。学年首席の名は伊達じゃない。

「本で読んだんですよ、それしか覚えてないですけど」

はっはーと笑って、説明の続きを催促する。

「向かって左側にある埋め込み式のモニターは」

「アリーナとかじゃなくてこの部屋が映し出されるんですよね」

客観的に見て内部に異常はないかと確認するための

「足元に注目し」

「高性能なセンサーが埋め込まれてて靴ひもがほどけてたりするとブザーが鳴るんです、それでも倒れそうになったら床からのＰＩＣで無理やり体制を立て直してくれる、初期の床のピットでドジってえらいことしてくれた人がいたそうですよ、ですよね山田先生、ですよね当時日本代表候補生山田麻耶さん」

「は、はぅ」

耳を押さえて縮こまる山田先生、、、ＩＳ界じゃ結構有名な話。

いかんいかん、目的を見失いそうになった。

――――これだけは言っておかないと

「山田先生、このマイクどうやって使うんですか？」

「え、え、マイクですか？横にあるスイッチを押しながらだとアリーナ全体に放送を・・・・」

試合が始まるまであと１０分くらい、山田先生のピット講座を受けていた。

Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

ピット中央に突っ立つ金髪人、もふもふとした黒の中身からは、ちらちらとＩＳスーツが覗いている。

前方には副担任の山田と織斑一夏、さっきからずっと『こっちの～は』『ああそれ知ってす・・・ですよね』『どうして知ってるんですか！？』というやり取りを繰り返している。無論、そんなくだらないものに参加する気は毛頭もない。

目前に迫る巨大なモニター、本来ならＩＳ同士の戦闘を一番よく見える位置から映し出すためのモニター、だがＩＳも出ないうちにその役割を発揮できるはずがない。ということで超満員の観客席を順々に映し出していた。

どこを映しても人、人、人、空いている席など一つもない。ざわざわとした雰囲気がモニター越しでも伝わってくる。

一番安全で最も観戦しやすい場所、そこには政府関係者、研究所員、企業のエージェント、その他もろもろ顔ぶれが一同に会していた。中でもイギリス人が多い、自国の代表候補とＩＳ世界一が戦うのだ、来ない方がおかしい。

モニターは巡る、名前も知らない人の群れを映し回る。
ただ人の群れを映してまわるそのモニターはまだ本来の仕事に就けそうにない。

その中に一つ見知った顔があった。喋ったこともないけれど、顔だけは知っている。

篠ノ之箒、ＩＳ開発者の妹

この一週間、織斑一夏を指導していたとか。なにせあの篠ノ之束の妹、ＩＳに関する知恵も多いのだろうか。

「っあ！今、箒映った！！」
「え、えぇ！どこですかどこですかぁ！？」
「ほら、あそこ！左下の仏頂面！！」
「ど、どこっ！？」
「あー！消えちゃったじゃない！もーっ！山田先生がとろいから！！」
「うぅ、私、とろい、、、とろい、、、とろ」
「ああ！生徒会長だ！！会長が映ってる！！」
「今度は更識さんですか！！どどど、どこですか！？」

どうやら、あの繰り返しからは抜き出せたらしい、今はモニターの中の知ってる人探しに夢中だ。とても生徒と教師の間柄とは思えないやり取り。

馬鹿馬鹿しくなってモニターを見るのは止めた。

視線は自身の着るベンチコートへと落ちていく。

飾りっ気がなく、十五歳女が着るにしては大きすぎるサイズ。

本当なら袖の先からは指先しか見えないだろうけど、腕まくりをしてかろうじて手全体が出るようにしている。

黒いものがさらに黒く煤汚れて、目立たないようにと縫われていたのだろうがもう隠しようもない縫い目。

元の品をみてもB級品、いやBにすら達していない、Cだろうか、Dと言われても文句は言わない。

好き好んで着るはずがない

誰がこんなものを着るものかと

何故これを着ている自分がいるのかと

誰があんな男の着ていたものをわたくしがと――――!!

――――その度に思い出すのは幸せそうな母の笑顔

まだ5歳にも満たない時の、唯一の記憶。

寒い夜のあの日

その時、アリーナが沸いた。

文字通り『ざわざわ』という音でアリーナが支配される。

何事かと顔を上げる間もなく理解した。

――――その巨大なモニターには打鉄を装備する織斑千冬が映っていた。

既にアリーナの中央まで移動したその操縦者は、何をするわけでもなく、腕を組んで目を閉じている。

アリーナにいる全員が息を呑んだ。

あれがブリュンヒルデかと。

わかる、あの人は強い。

地球上に存在するどんな生物よりも優れた運動能力を保持している。

こんなに離れているというのに、モニターをはさんでいるというのに

あれほど自身があったというのに――――――

『動物』という種族が潜在的に持つ能力が、〝自分では勝てない〟

と戦いの拒否を訴えかけてくる。

全身がすくみあがった。

全ての分野において自分が劣っていると

同じ動物種としてセシリア・オルコットがあの操縦者に勝る箇所は

ないと

ああ、本当に龍のようだ。織斑一夏の言ったことと何一つ違わない。

あの操縦者は『人』というカテゴリーを超越している。

背筋が一気に縮こまる。バクバクと心音が大きくなっていく

こわい

これからあの龍と戦わなければならないなどと考えたくない。

うさぎだ、自分はうさぎだ。

圧倒的な強さを前にして、ただ体を抱くことしかできない。

指先からの小さな震えが、段々大きくなって

――――――絶対にセシリア・オルコットでは織斑千冬に勝てるわけがないと

「オルコットさん」

声がする。その声が一国の代表候補として絶対に考えてはならないことを止めてくれた。

「予想以上に強そう、頑張って」

モニターを見つめるその日本人の横顔は、モニターの中にある別の日本人とよく似ている。

体の震えが、、、、、治まった。

ＩＳスーツの上からベンチコートのありえない筈のあたたかみが伝わってくる。

落ち着くと、沸々とさきほどまでの自分の弱気に苛立ちを覚えだした。

「わかってますわよ！そんなことっ！！」

羽織っていた物を一気にくるみあげその男へと勢いよく投げつける。

「ふげっ！」

いかり肩で織斑一夏に背を向けた。

――行かないと

声をかけられなければ、すくみあがったままブリュンヒルデに向かっていたかもしれない。

――負けたくない

声をかけられなければ、想像の時点で負けていた。

――劣ってなどいない

多くの人が見ている。

急ピッチにもかかわらず機体を最高のコンディションまで仕立てた研究員たち

大嫌いだった父がヘコヘコと頭を下げた相手

自国の代表候補がやらかしたとヒヤヒヤの政府関係者

――追い続けた母の背中、また一歩近づけただろうか

少しだけ強く地面を蹴って、流れる動作で青の機体を展開する。

このブルー・ティアーズを持ってして、わたくしが負けるはずかない――――！！

ピット・ゲートが空の光を呼び入れると同時に、機体を全速力で発進させる。

アリーナへと飛び出る直前、ＩＳのハイパーセンサーで織斑一夏を確認した

『わぁ～、やっぱりこのベンチコートもふもふだぁ～』

『私もっ！私も、もふもふしたいですっ！』

――――教師山田とじゃれていた。

（ふんっ、冷静になれましたわ）

アリーナに出たブルー・ティアーズを迎えたのは

目をつむりたくなるような太陽光と、今まで受けたことのないほど

の大きな歓声だった。

１４話なはず（後書き）

ちょっと短いかもです。

予想に反して、千冬さんがＩＳ装備してきちゃいました。

一夏君死にませんよね

次回いよいよ決戦です。

15話――――

眼前に迫るモニターには、苦しげな表情のオルコットさんが映っていた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

試合が始まって何分が経っただろうか。

長かったかのように思える彼女の時間も、まだ時計の秒針は5回と回っていない。

両者の距離は５０メートル

かたやイギリス代表候補生、かたやＩＳ学園教師

一見、拮抗に見えるその戦いは

あまりにも一方的過ぎた。

宙に浮く満身創痍の代表候補に、足をつけた1の攻撃も受けていない教師

誰が見ても勝敗はあきらか。軍配は教師にある。

こうして、50メートルという間で見つめ合っているのは少女の気おくれなのか、策なのか。
おそらく前者しかでしかありえない

瞬間、教師が爆せた。

爆せたように飛んだ。

セシリア・オルコットは後悔した、避けられるとわかっていても撃ち続けるべきだったと。攻撃は最大の防御、後手に回った時点で防御も攻撃も出来るはずがない。

打鉄は疾風の如く駆ける

狙われた機体より先に残り二機となったビットが反応した。

その風を捕らえようと

間合いには入れまいと

世界トップクラスのコンピューターが割り出した最適となる軌道で

わずかでも時間が稼げればと

疾風を迎え撃つ

――――――だが無意味。

龍の疾風を自立機動兵器で食い止めようとする方が間違っている。

ビットから放たれるレーザーは、その風を止めることはおろか、触

れることさえ許されなかった。
時間稼ぎなど出来るはずもなく
疾風はさらに加速する。

無論、セシリア・オルコットは既に回避行動をとっている。
自らのピットが反応した０．１秒後には動き出していた。
その眼光を≪スターライトｍｋｒ≫に宿したままで。

だがそれも今までと同じ

逃げながら、照準には定まらぬ打鉄を当たる道理なく撃ち続ける、
もちろん当たらないまま間合いを詰められ、一基ウン千万円とする
大型ミサイルで無理やり距離を取る。
さっきもそうして生きながらえたところだった。

否、『今までと同じ』などではない。

現在、織斑千冬は照準はおろか、自らの視界にすら治まっていないではないか。

『さっき』のようにはいかない。

「っな?!」

セシリアの表情が驚愕に染まる

サーっと顔から血が引いていく、その血管に新しく流されたのは冷水。

上から下に、つむじからかかとに掛けて全て冷えていく。

どこに消えたのか

何故見えないのか

どんな魔法を使ったのか

何故、背後に織斑千冬がいるというのか

免れることのできぬ運命に背骨がざわつく

――消えてなどいなかった、自らの視界の網を潜り抜けられただけ

これから受ける痛みを想像、背中の筋肉が異常な収縮を繰り返す

――見えていた、ＩＳは全方向に視界がある、間に合わぬと判断し時から気付きたくなかっただけ

背中が熱い、受けたくないと、あの剣には触れたくないと、骨盤から鎖骨にかけて上半身の全てが脳に訴えかける

――織斑千冬の操縦技術が魔法の域に達しているというだけ――

――！！

振り下げられた近接ブレードがスローモーションに見える。

全身全霊で体を捻ろうとするが、当然それもスローモーションになる。

間に合わない

ならばと、自らの武器≪スターライトｍｋｒ≫を盾にしようとするも、当然それは

間に合わない。

セシリア・オルコットは次の瞬間、確実にあの剣によって敗北が決まる。

あの剣に触れれば、体が吹き飛ぶ。

叩き落される、ただ落ちる、制御など出来るはずもなく、受け身など取れる道理なく

みっともなく無様に滑稽に織斑千冬に負ける。

でも、そんなのは嫌だ。

痛いからとか、恥ずかしいからとかではない。

ただ純粋に、いろんな人に迷惑をかけたと思っている。

連日連夜、ブルーティアーズの調整を続けてくれた研究員

突然のブリュンヒルデとの決闘に冷や汗をかかせたイギリス政府関係者

入学初日の口論に驚いたクラスメイト、慌てふためいた教師

勿論――――あの男にも

多くの人を振り回して、その時間を奪っただろう。

だからこのままでは終われない。

胸を張って、その人たちの前で『織斑千冬と戦った』と言えるようにせめて――――

ゴォン！

その近接ブレードが振り下ろされる

横腹からすさまじい衝撃。

防御など出来ようもなく致命傷。

筋肉を伝って骨をつたって血管を伝って、その衝撃が体中細部に渡りこだました。

熱い、熱い、体中が熱い。

思い出したかのように体のいたるところが痛み出す。

開幕直後の左腿、その次に受けた左肘、自らの銃を盾にした時の右の掌。

腹がえぐれる、横腹から順に体がゴムのように固まりだす

ゴムは動かない、痛い、体が乗っ取られていく、痛みと麻痺の狭間にある気持ちの悪い肉の中。

気持ち悪い、熱い、熱い、気持ちの悪い、喉の奥まで酸っぱいものが込み上げてくる。

揺れる、体の中のありとあらゆるものが揺れる

胃が
内臓が
脳が
肝臓が
肺が
心臓が

本来の機能を破棄して、ただその保有者を苦しめることだけに機能する。

気持ちが悪い、気持ちが悪い、気持ちが悪い、ぐるぐるする気持ち悪い

瞬間的な加速度に耐えられなくなった体は

ゴムのように麻痺したこの体は

全ての箇所においてガタが生じたこの体は

もう目を開くことさえ拒否しようとする。

全身が意識の放棄を推進する。

このまま眠ってしまおうと、筋肉が脳からの命令を抵抗なく受け入れようとした。

――――ただ、そんなヘコたれた自分より

貴族オルコットの方が断然強かったというだけの話――――――!!

バチバチっと脳の回線がはじけた。

ここで狙わずして、誰が貴族か――――!

ここで撃たずして、誰がオルコットか――！

弱い自分を認めして、誰が代表候補か――！

試合の途中で諦めして、誰が――――

たとえ相手が織斑千冬であったとしても

ただ一太刀も浴びせずして

誰があの人の娘か――――！！！

――体中に電撃を走らせた。

ゴムになりかけた体を一息で溶かし
まさしく電撃、生半可な痛みではない、体は息を吸うたびにゴムに戻りたがる。

ぐちゃぐちゃになった体の内部に構わず
気持ちが悪いのは百も承知、それでもなお成し遂げたいことがある。

折れかけた心に喝を入れ――
まだ戦える、まだ負けていないと心を奮起させた。

尽きようとするシールドエネルギーに虚勢を張らせ――――
もう少しだけ、あとちょっとでいいから猶予がほしい。

すさまじく落下するこの加速度で――――
眼前に迫る地面の中で――――
頭から土に向かうこの態勢で――――

銃口だけを『的』に向ける――――――――！！！

当たる、この射撃は『当たる』
『的』であるあの打鉄に間違いなく『命中』する。
態勢など関係ない、新幹線のような速さでの落下中でも関係ない

シンッと体とＩＳの中で何かが繋がる音を聴いて

ありえないことを成そうと、無意識のうちにイメージしていた。

撃ち放つレーザーを強烈な意志で染め上げる

『青』ではなく『蒼』に

撃ち放つレーザーを完膚なきまでに自らの支配下に置く

自らを『動物』というカテゴリーから切り離して
撃ち放つレーザーに『的』という概念をインプット
『自然の理』からレーザーを解放
撃ち放つレーザーは『的』に『命中』することを義務とする
レーザーに残される権利はただ一つ――
『撃ち放つレーザー』とはすなわち、いかなる状況においてもセシリア・オルコットに忠実なレーザーを言う。
「――あとは撃ち放たれるだけ」
自然に口から零れ落ちた。これ彼女の射撃に因果の逆転を携える最後の呪文

的を見る必要などはない。
照準に合わせることなど無意味。

この射撃はセシリア・オルコットが『命中させた』という事実のもとに軌道するのだから――――――！！！

シュン！

いつもとは違うように聞こえたレーザーの発射音の後に、ドサッ！という自らが地面に転がり落ちる音。

肩口から背中を回って一回転、そしたらまた肩が来て背中を回り一回転。

それを5回くらい繰り返したところでシールドエネルギーが尽きて、予定通り自身の敗北が決まった。

終わったという脱力感と同時に、醒めた心に付け入る身体の痛み
そんなことをも忘れるくらいに気になったのは、最後の攻撃の行方。
手に土の感触を確かめながら、首だけを傾ける。それ以外の箇所は動きそうになかった。
ＩＳのハイパーセンサーによる視覚補助が消えた今、辺りは砂が舞い上がって何も見えない。

『試合終了。勝者、織斑千冬。』

自らの敗北をあまりにも平坦に告げられる。
そのアナウンスは用意されていたものだろうか、それとも今この試合を見終えた誰かが言っているのだろうか。
その疑問よりも遥かに大切で確証が持てるのは――

砂煙の隙間から見えるブリュンヒルデには、塵芥の傷もついていないということ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『試合終了。勝者、織斑千冬。』

そのアナウンスは試合の始まる前から準備されていたものらしく、ピットに座る山田先生がそのディスプレイを操作しただけで流れた。

６分３２秒、、、それがブリュンヒルデを相手にしてイギリス代表候補生が持ち堪えた時間。

僕は専門家じゃないからそれが長いのか短いのかわからないけど
オルコットさんからしてそれは本当にあっという間の時間で、一生
記憶に残り続ける時間になるだろう。

一方的という言葉が優しく感じられるほどの、ワンサイドゲーム。

厳かに抵抗をするまな板の上の鯛、包丁を構えて慣れた手つきで調
理する料理人。

そこには覆らない壁がある、覆してはいけない理がある。

まな板の上からでは、絶対に運命を変えられない。

表情を歪め続けたオルコットさんに、眉ひとつ動かさなかった織斑
先生。

その実力差は天と地、織斑千冬の力を世界に知らしめるという意味
では文句のない試合だったと思う。

ただ、オルコットさんが見せた最後の射撃、当たるはずもない態勢
から放ったそれは当然の如く外れたのだが・・・

そこには、ブリュンヒルデとの間にある絶対的な壁以上に厚い、遵
守しなければならない絶対に覆せない何かを犯そうとする意志が混
じっていたように見えた。

気のせいだろうか、また変なものを見ていただけなのだろうか。
思考にふけようとした僕を呼び止めたのは

『山田先生。』

さっきまでオルコットさんとの戦闘を映していたモニターの向こう側、姉さんの乗る打鉄と繋いだプライベートチャンネルの声だった。
というか別に僕を呼び止めた訳じゃない・・・

「は、はいっ、どうしますかっ？このまま織斑君との試合を始めますか！？」

山田先生慌てすぎ。おおかた、さっきのオルコットさんとの試合に見入っててまだその余韻が抜けないだけなのだろうけど。

『ええ、そちらの準備が出来次第始めましょう、、、ですが、、山田先生？』

こ、こわい。怒ってる、姉さんは今怒っている。何故、何故?!

「な、なななんですか?」

姉さんの怒気を感じ取って山田先生は震えだした。
よかった、怒りの矛先は僕じゃないのね。
はて、どうして織斑先生はお怒りになられているのか――――?

『織斑が専用機のフォーマットを行っていないことはおろか、百式がピットへ搬入すらされていないように見えるのですが!!!』

「あ、、あ、、、あああああああっ!!忘れてたーーーーー!!?」

『朝方には格納庫に到着して、オルコットとの試合を始めるまでの間に時間があるから、山田先生の指示でピットへ搬入するようにと言いましたよね――――!』

「あう、あう、あああ、そ、その時、織斑君がピットの設備について説明してほしいと・・・」

『そのようなことが言い訳になるとお思いで！！』

ビキビキと額の血管を浮かび上がらせる僕の姉

「ひぃ！、すすすすみ

「あー、その時山田先生なら僕と一緒に『モニターに映る知ってる人探し』して遊んでましたよ」

『山田先生？や・ま・だ先生？』

有無を言わせぬ鬼の形相、否、有無を言うことを強制する龍の形相。

「す、すぐに準備しますーーーーー！」

「っあ、山田先生いいです。僕は打鉄で戦いますから」

非常口のマークになって駆けだそうとする山田先生を止める。

「はい？」

うわっ、ホントに非常口のマークで止まった。

「ですから専用機は使わないと」

『何故だ？時間なら気にしなくて構わないぞ』

姉さんが怪訝そうな顔つきで言ってくる。

「専用機の話は今日の朝から知っていましたけど、お断りしました。いつも訓練してる打鉄の方がいいと思いまして」

「い、いいんですか？」

「いいんですかって、朝言ってくれたのは山田先生じゃないですか。その時にきっちりと『専用機は使わない』と言いましたよ」

「え、、え？」↑勿論、そんなことは言っていないし、聞いてない

「だからピットへの搬入をしなかったんですよね。ですよね、山田先生。ほらちゃんと打鉄は用意してあるし」

指した方向にはどっしりと腰を据えるＩＳ。

僕は本当に専用機が今日の朝到着するということを知っていた。同室の人から聞いたんだけど・・・

だから専用機ではなく打鉄で戦いたいというのは本心だ。

「そそ、そうです！思い出しました！織斑君は打鉄を使うんですよね！！そうですよっ！だから私は百式をピットに搬入していないんですよ！！」↑人として大事なものを失う教師山田

「もう山田先生は忘れっぽいんだからー。織斑先生に怒られて本気で焦ってたじゃないですかー」

あははーと二人で笑いあう。山田先生は冷や汗でダラダラだ。

それを見つめるモニターの向こうにある瞳

『一夏・・・人の弱みを握るのはいいが使いどころには気をつけろよ』

ギロリ！という効果音の似合う眼光に据えられる。

僕ではなく山田先生が縮こまった。

『一夏』と呼んだあたり、その言葉は教師と生徒という間柄としてではなく一姉弟としての忠告なのだろう。

『いいでしょう山田先生、今回は弟に免じてその過失を見逃します。』

ほっと胸をなで下ろす山田先生。この瞬間、山田先生は僕に借りが出来た。ジャグリング部の顧問にでも・・・

――トントン、トントンと弱々しげな足音が僕の意識を切り替えた。

「オ、オルコットさん!?ダメですよ!医務室へ行かなきゃっ!!」

一目散に駆け寄る山田先生。

「いえ、大丈夫ですわ。この程度でダウンするわたくしではありません」

首だけを動かして横目に見たそっちには、ピット中央の壁と一体化した椅子に痛そうに腰を据えたオルコットさんの姿。

左手で横腹を抱いて、右手はくずれ落ちようとする上半身を支えている。

色の良い健康的だった両脚は、動かないのか動かせないのか、今はバランスを維持するだけのつっかえ棒と化していた。

座っているというより、立てていないと言った方が適切。

その様子だけでさっきの試合がいかに何々だったのか容易に想像できる。

『早く来い、織斑』

モニターの中は必要最低限の言葉で『試合を始めよう』と言った。

「わかりました、行きます。」

僕も飾り気のない言葉を返す。

それを合図にモニターは元の仕事に戻った。

コツコツとピットゲートへ歩みを進める。

と、忘れ物。
Uの字ターン

「ごめんね、置く場所がなかったからずっと着てた。」

オルコットさんに近づいて、まだかすかに息が大きいことに気付いた。

そのもふもふ感を手放す。

もふもふとした面がなるべく彼女の体にあたるように丁寧に返した。

「構いませんわ、別に」

もぞもぞと右手から徐々にその大きな服にくるまっていく。

その様子はにんじんを頬張るうさぎのように愛らしい。

「ありがと、じゃあね」

くるりと背中。

大きなモニターが打鉄を映していることを確認して、今度こそ戦場に向かう。

途中、僕の名を呼ぼうとした小さな声に気付いたけど、僕はそれを聞こえなかったことにした・・・

15話――――（後書き）

そんなに簡単に因果は逆転しません

（どこのゲイボルクだよ！）

セシリアさんとランサーさんは相性がよさそうです

第四次の方とは別の意味で・・・

ネタが分からない方、すみません

次回、一夏君はどうなるのでしょうか？

――――16話（前書き）

あとがきあります

――――16話

当然の結末を迎えるのは嫌だった。

脚がもげそうになって、腕が生えているのか生えていないのかわからなくなって

お腹がえぐれて、体の中身がバラバラになった錯覚さえした。

ここで手放せば負ける、ここでその意識を手放せばもう帰ってこれなくなる、それだけを思って戦ってた。

果たして、僕はその先で何を得たのだろうか？

試合の途中で何度も思い出した後輩の涙を掻き消して

『もういい』と誰かがアリーナに反響させたその声をも無視し

ただ只管、当然の結末を迎えないために足掻いた。

得た物は『当然の結末』。

自分と同じ状況に誰かがいれば、誰もが迎えるであろう『敗北』。

――――すなわち普遍。

あの時間、僕が姉さんと戦っている時、

――――どこにでもいる凡人。

一般人となんら変わらず、どこにでもいるような人間と化していた

織斑一夏。

それは僕が最も嫌っていたこと。

織斑一夏という人間の中で在りえてはいけなかったこと。

他人と『同じ』であるということを激しく嫌った僕が

在り得ない、嫌だ

『同じ』でなくなるための馬鹿げた努力を積んだ僕が

アリエナイアリエないムカつくアリエないいやだムカツク

でも、それは、、、その感情は、、過去形になった、、はずなのに

誰かが、、僕の、、　ために、　教えてくれた、、、はずなのに

だから、、■■に、、なろうとす、、るのは、やめた、、はずなのに

――――なのに、どうしてまたこの暗闇の中にいるのだろう

体は鉛のように重たく、瞼は開いているはずなのに何も見えない。

気を抜けば、ナニかに襲われるような不安感。

それなのに、まるで目が覚めているかのような冷静な思考。

この夢を見るのは、、、久しぶりなんかじゃない

ＩＳ学園に入ってからも、蘭ちゃんの涙を見たときからも、、、

この夢を見ない時の方が、それこそ稀だった。

どうして？

好きでもないのに格闘技を習うことは止めた

興味もないのに専門書を読むことは止めた

目に見えるもの全てにつっかかろうとするのも止めた

起きている間で脅迫概念に襲われることもなくなった

時間がある時は、自分の好きな事をするようにした

なのに、、、どう、、して、、、、？

出ないはずの涙で、黒い視界がにじんだ。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「、、、かさん」

ゆっさゆっさ、僕の体が揺すられてる。

「、ちかさん！」

ゆっさゆっさ、段々と意識が覚醒してきた。

どうやら僕はどこかで眠っていたらしい、さっきまで夢見てたから当然なんだけど。

「一夏さん！」

ゆっさゆさ、今度ははっきりと聞こえた。

まだ瞼は開かないけど、もう一回ゆっさゆっさしてくれれば確実に起きれる

ゆっさゆさ

はて、目を開ける前に考えてみよう。

僕を『一夏さん』と呼ぶ人間、思いつく限り一人しかいない。

微妙にイントネーションが違う気がするけど・・・

聞きなれてるのは『いちか←さん』、今のは『いちか→さん』

っま、いっか。

なんで蘭ちゃんがこんなとこに？

「ん～、どしたの蘭ちゃん～？」

ビキッ！と視覚よりも先に聴覚が反応した。

何の音かは分からないけど、それ以上に視界が悪い、というか暗い、見えない。

学園の医務室、ベッドで寝ている僕の隣に蘭ちゃんが立っていると

いうことはわか

「あ、ああなた!うなされていたと思ったら開口一番に他の女性の名を・・・!!」

蘭ちゃん・・・じゃ、、、ない。

おぼろげな視界に目を凝らせば、金髪。さらに見上げればそのこめかみがヒクヒクとしている。

あ、さっきの音はこめかみが鳴ったのかな。

「・・・オルコットさん?」

「ええ!そうですわよ!オルコットさんですわよ!」

「え、オルコットさん?」

「だから!そのオルコットさんですわよ!」

「もしかして、オルコットさん?」

「人を検索エンジンの候補機能のように言わないでくださいます!?」

・・・。・・・!?

「な、なななんでオルコットさんが！？」

「べべべべべ、別に好きで来たわけじゃありませんわっ！」

上半身が飛び起こし、二人して焦り合う。

・・・、というか暗いな。

明かりといば、この部屋の豆電球と廊下から差し込む蛍光灯のちょろっとした光だけ。

僕が姉さんとの試合を終えたのが４時半くらい。

意識を取り戻したのが医務室のベッドで６時過ぎ、その時は箒がいたんだけど、オルコットさんはとなりの病室で寝ていると聞いた。

それからもう一回寝て・・・今起きた、何時？

「明るいのがいいな。」

目が覚めて暗いと、夢の続きみたいで嫌だ。

「電気を点けてもよろしくて？」

「うん、お願い」

てくてくと部屋のドア付近へと歩いていく金髪。

その様子を見て、つっかえ棒になっていたオルコットさんを思い出した。

「怪我！」

言った瞬間には部屋に人工的な明るさが灯り

まぶしい、と思っている間にはオルコットさんはベッド横の椅子へと移動している。

「怪我、、大丈夫なの？」

まだチカチカとする視界の中はっきりとその姿を見据える。

オルコットさんが着ているのも僕と同じような色の薄い病人服。

外見上悪そうなところは見当たらない

「あなたに心配されるほどじゃありませんわ」

ちょっと棘のある言葉で返された。

「心配されるのはあなたの方ですわ。ご自分の体を確認なさって」

「ん？僕は別に・・」

と体を動かそうとして、、

妙に重たいぞ、全く動かないという訳ではないけど。例えるなら着衣水泳しているような感じ、何かが体に纏わりついているというか、とにかく重たい。いや、それでもさっき起きた時よりはマシになっているのだけれど。

「ほら御覧なさい、動かないのでしょう。まったく、あんな無茶をするから」

横目でこちらを見つめてくる。

「むー、無茶って何さ、シールドエネルギーが尽きるまで戦い続けるのはＩＳ操縦者として当然のことでしょ」

ちょっとだけ嘘をついた、シールドエネルギーが尽きなかったから戦い続けたんじゃない、何かを成そうとしたが故にシールドエネルギーが尽きなかったのだ。

「ど・こ・の世界に織斑千冬と戦って二十分以上も保つＩＳ搭乗歴一週間の人間がいますの！！わたくしのせいであなたが死んでしまうと思いましたのよ！！真剣に後悔しましたのよ！！」

「え、ご、ごめん」

その剣幕に思わず謝ってしまう僕。

しかし、それだけでは終わらない。

「大体あなたという人は！入学初日でいきなりブリュンヒルデに勝てるとか！！わたくしが弱いだとか！！無茶苦茶ですわ！！」

「あ、あの」

弱々しい僕の声では制止など出来ようもなく

「前日に女子風呂に入るだとか！！ベンチコートがもふもふだとか！！山田教諭にじゃれているところとか！！」

「なのに！！試合前になると妙なオーラで！！声をかけても無視するし！！織斑教諭に何回斬られても起き上がるし！！試合が終わってＩＳを降りた瞬間に倒れるし！！」

「さっきだって！！このわたくしが直々に様子を見に来たというのに！！あなたは他の女性の名を――」

そこで剣幕は治まった。治まったというより、消えた。

ずいすいと寄せてきた体がしょぼしょぼと縮こまって、背中を丸め三角座りに顔を埋めてしまった。

椅子に座ったまま三角座りとは足が疲れないだろうか

「おーい、どしたのー？」

ともあれ、いきなり激しくなったり三角になったりのオルコットさんに疑念を抱かないわけがない。

まだ重たい右手を動かしてつんつんとオルコットさんをつっつく。

つんつん、ふにふに、つんつん、ふに

「だあああぁあ！！やっぱりあなたという人はぁぁぁ１！！」

「え、えええぇ？」

どっかーん！と再び噴火するオルコットさん。

どうしよう、ますますわからん。

「ど・う・し・て怒りませんのよ！！わたくしはまた、自らの権威に驕るような発言をいたしましたのに！！」

？自らの権威に驕る発言？

「あ、さっきの『このわたくしが直々に』ってやつ？」

言うとオルコットさんはまた思い出したかのように、ちまちまと縮んでいく。

・・・縮まりきった。今度は三角まではいかなかったものの、手を膝に付き首を項垂らすという姿勢に。

それを見て真摯な態度で臨まなければいけないと感じた

消え入りそうな声で話し出す。

「篠ノ之さんから聞きましたわ、一夏さんが織斑教諭と決闘すると言い出した理由。わたくしに気付いてほしかったんですってね」

「・・・」

口止めしていたわけではないけど、箒がオルコットさんに話すというのは意外だ。

「ええ、気付きましたわ。わたくしの愚かさに、セシリア・オルコットという人間性の在り方に。ひどく歪んでいましてよ」

声をはさむ余地はない。

「、一国の代表候補としての自覚が無く、他人の気持ちなんて、考えようともしない、、客観的に物事を量れない、、オルコット家が、、代々受け継いできた誇りを、、、吐き違える、、、、生まれ持った権力、、なのに、自らの力であると、、、勘違いする、、」

・・・鮮やかな金髪に覆われてその顔は見えないけど、その声の震えでどんな表情をしているかは想像がつく。

「多くの、、日本人がいる中で、、その文化を侮辱する、、、そもそれが、、正しいかのように、、、男というだで、、馬鹿にする、、、、こんなんじゃ、、母にも、、父にも、、追いつけませんわ、、

わたくしは、、」

「オルコットさん」

「だからもう絶対言わないって、、、相手が誰であろうと、、卑下するようなことは言わないって、自分の方が、、偉いとか、、優れてるとかは、、止めにするって、、決めた、、のに、、、わたくし、、また、、、」

「そんな泣きそうな声で言わないで」

重かった体は自然に動いていた。

その声を聴くのは嫌、そう思うだけで体は軽くなったのだと思う。

「、、ひ、ぐ、、ごめんなさい、、ごめんなさい、、」

「いいじゃない別に、ちょとくらい迷惑かけたって、全部子供の頃の話になるんだから」

――気が付けば、彼女を抱きしめていた。

いつベッドから降りたかなんてわからない。彼女の涙を受け止めなければならないと、何かが僕の体を操作したのかもしれない。

「、、、ゆるじて、、ひっぐ、、、」

「誰もオルコットさんを責めようなんて思わないよ」

鮮やかな金髪がこんなにも近くで、僕の腕の中。

背中から伝わってくる小さな震えと、胸に感じる熱い液体、、紛れもなく彼女は泣いていた。

「、でも、、わだぐしは、、

「はいはい、もう何も言わなくていいからー」

より一層強く抱きしめる。

震える背中を優しく撫でる。

僕が誰かにそうしてもらったように、ぽむぽむと頭をたたく。

「うぐ、、ひぐ、、、、」

その想いが伝わったのか、彼女はただ泣くだけとなった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「泣き止んだ？」

彼女の体温を失い、もとのポジショニングに戻って数分、ようやく顔を上げたオルコットさんに問いかけた。

「ふ、ふんっ！初めから泣いてなどいませんわ！」

「え、じゃあこの服のシミは全部オルコットさんのよだれだったの？」

「違いますわよっ！涙ですわよ！」

強がったり、ツッコんだりと忙しい人だ。

・・・目が赤い。

彼女がさきほどまで泣いていたという証拠

、、僕で良かったのだろうか？こんな僕に、彼女の涙を受け止める資格はあったのだろうか？

自分自身に整理がつかない人間が他人の

「それより、その、、一夏さん？」

まだ目の赤い彼女が僕の思考を遮ってくれた。

「なんぞー？」

「わたくしは先ほどから『一夏さん』と呼んでいるのに、『オルコットさん』と返してくれるのはどうかと・・・」

なにモジモジしてるんだろ？らしくないなー

「ああ、さっきから訂正しようと思ってた。苗字と名前を間違えてるんだよね。日本では先に苗字を持ってくるから『織斑』が苗字で『一夏』がなま」

「知ってますわよ！わかってて名前で呼んでいるのですわ！！その理論で行けばわたくしは織斑教諭を『千冬教諭』と呼んでることになりますわよ！！」

「あははー、今度一回本当にそう読んでみてよー、姉さんがどんな反応するか楽しみだ」

「・・・」

無言の圧力、冷ややかな視線

「っう、、つまり、名前で呼べと・・」

「そうですわ」

「に、ニックネームとかじゃだめ？」

「例えば？」

前から考えてたやつがあるのだ。

「オルコットのオルをとって、『オルさん』」

「却下」

そ、即答・・・

「名前」

さっきから単語しか話さない、、こわいよぅ

「せ、、セシリア、、、、さん」

「『さん』？」

「呼び捨てなの！？」

「箒」

ただ掃除用具の名称を口にしただけではなかった。その青い眼からは『あの人は呼び捨てなのにわたくしは”さん”づけ？』と訴えかけてくる。

ふぅ、腹を決めよう

「せ、、せし、、」

「――――」

・・・期待をよせたその瞳に、素直に答える僕ではなかった。

「せ、、、っせ、、、、、っせーのよいよいよいよい」

手を取って、せっせっせーのよいよいよいとする。

どうだっ！！！！！

この緊迫した場面での僕の渾身のボケはっっっ！！！！！！

「ふ、ふふふふふふふふふふ！！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオ！！

「一夏さん、、、、面白いジョークでしたわ――――――！！！！！」

ひいぃぃぃぃ！満面の笑みで怒ってるううう！！

「ごごごめんなさいぃぃ！！セシリアって呼ぶから、許してええ！！」

「では、早く呼んでください」

ストンと構え直すおるこ、、、セシリア。

「え、えと、、せしり、ってどうしてボイスレコーダーを構えてるの！」

「いえいえー、お気になさらずー」

さあ早くー、と続きを促される。

、、、レコーダーは気になるけど仕方ない。

「せ、セシリア」

くぅ、、顔が熱い、女の子を名前で呼ぶっていのはそれだけで緊張する、、こんな美少女を、、恥ずかしい、うぅ、、、何が一番恥ずかしいって名前を呼ぶだけで顔を赤くしている自分が、、、、、はぅ、、

「『朝だよ起きて』っと言ってくださいまし」

「朝だよ、起きて」↑あまりの恥ずかしさに頭が麻痺している一夏君

「次は『起きないとキスするかも』と」

「起きないと、、、き、キスするかも」

「『セシリアのいろんな所触るよいいの?』と」

「セシリアの、、いろんなとこ触るよ、い、いいの?」↑元演劇部としてのギアがかかってきてる

「最後ですわ『ひゃあ朝からはダメ』」

「ひゃあ!あ、朝からは、、って何を言わせてるんだ何をーーー!!」

「最後ですわ、後生ですからお願い!」

「え、うん、ならいいけど・・」↑相変わらず押しに弱い

「ささっ!早く早く」

「ひゃあっ!、、あ、朝からはダメ、なんだから、、」

ぐはあっ!気が付けば言っていた!

熱い、顔が熱い。リンゴのように染まっていく僕の顔、、、恥ずかしい

どうせセシリアはリンゴな僕を見てにやにやしてるんでしょ

ちらっとだけ顔を上げて、盗み見る
で

「セシリア、鼻血、鼻血ーーー！」

「え」

ツラーっと流れ出る赤色。
それに気づかないセシリアのマヌケ顔。

「ティッシュ、ティッシュ！」

「あ、あわわわわわーーー！」

◆◇◆◇◆◇◆◇

「鼻血は止まった？」

セシリアが鼻にティシュを詰めだしてから数分、僕はそう問いかけた。
ボイスレコーダーを構えるのに身を取り出していたためか、純白のベットに彼女の血痕が、、、、

「ふんっ！鼻血なんて出していませんわよっ！！」

「え、じゃあこのベットのシミは全部セシリアの血尿だったの？」

「違いますわよっ！鼻血ですわよ！血尿とかありえないでしょう！！」

「まったく、よだれ垂らしたり血尿出したり、忙しい人だなセシリアは」

「だ・か・ら！よだれじゃなくて涙っ！血尿じゃなくて鼻血！！」

よだれから涙へのジョブチェンジはいいけど、血尿から鼻血へのジョブチェンジはどうかと・・・

「あなた、意外と愉快な人ですわね」

ジトーっと皮肉めいたことを言ってくる。

”セシリアほどじゃないよー”とか”なんかアンモニア臭がする”とか、どうやってボケようかなって考えてた。

なのに――――

「ありがと、そう言ってくれると僕もちょっとは変われたかなって思えるよ」

――――何故かそんな言葉で返してしまった。

「僕だって中学の頃まではオルコットさんと似たようなもんだったよ」

「え」

キョトンと目を見開けたセシリア、眼も鼻も赤くないことを確認して、彼女から顔を逸らした。

言ったからには最後まで言うしかない。

「自分以外の人間はクズだと思ってたし、、自分が一番優れていようと努力した」

どこを見るわけでもなく、白い壁の方を向いた。

「さすがに、日本人を見て『この猿があぁぁぁっ！』とまではいかなかったけど」

「うぅ、、面目ないですわ、、」

・・・、ここで止めてしまおうかと考えたけど、口は止まってくれない。

「友達なんてほとんどいなかったし、寄ってくる人は全部無視してた。ただどうやって他人と差をつけるかだけを考えて生きてた」

「極度の負けず嫌いが更に行き過ぎたかんじだったのかな、、どんな分野でも自分が一番じゃないと嫌で」

「結局、無理なんだよね『一番』になるのって。学校で『一番』になるのは簡単、世界で『一番』は無謀」

「相手は究極の一を1個持ってる、僕は究極の一を１００個持とうとした」

「何を極めても上がいて、でもその『何か一つ』だけに時間を注ぐのは怖くて出来なかった、『世界一になれなかったらどうしよう』っていう不安で」

「だから、僕が手を出したものを全部、中途半端。僕の夢は途方に暮れた」

「それでも努力することに意味はあるーっとかアホなことを考えてた僕に喝を入れてくれた人がいたから、、、僕はこうして」

「って、、あぁー、僕は何故こんな話をしているのか、、、忘れて今のナシ全部うっそさー」

流れ出る言葉を自分で停止させた。

あぁ、ホントになにゆえこんな話をしているのか？

セシリアが引いてるかもしれない。。。

「あれ、セシリア？」

視線を戻した先に彼女の姿はなかった。

僕の話に呆れて帰ってしまったのだろうか――――

もぞもぞ

・・・む、嫌な予感がするぞ

もぞもぞ

・・・まさか、まさか、脚の辺りで人の温かさを感じ
もぞもぞ

・・・掛布団が、、異常な膨らみ方を、、

「寒いでしょうに、肩まで布団をかぶりなさい」

・・・えらい近くで女の子の声がした。

Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

「寒いでしょうに、肩まで布団をかぶりなさい」

一夏さんのベッドに忍び込んで、上半身を起こす彼に枕元から囁いた。

誰かが傍にいてあげないと、、、彼は壊れてしまうかもしれない。

何度斬られても立ち上がって、まるで呪われているみたいだった、、

父のように、、

そう、彼は脆い。見た目以上に、みんなが思ってる以上に脆い。

語りだした内容はあまりに抽象的で、具体的に彼の身に何があったのか、彼が何を目指したのかは分からないけど。

このままでは消えてしまうのではないだろうか、と思うほど彼の口調は弱々しかった。

だからわたくしが傍にいようと思った。

「せせせせせ、セシリアさんっ！ななな何をしていらっしゃるのでしょうか?!」

「むぅー」

未だ体を起こしたままの一夏さん。

わたくしが掛布団に入れと言っているというのにー

両手で彼の腰に手を回す。

ギュッと抱きしめる。

「ひゃうっ！」

可愛らしい声を上げてそのほそっこい体がビクンと跳ねた。

構わず、そのままズルズルと掛布団の中へと引きいれる。

ずるずる、ずるずる

「うぅ、魔女の根城へと引きずり込まれてしまった・・・」

とか言いつつベッドの端っこへ逃げる一夏さん。

ふふふ、逃がしませんわ

「あらあら、枕がないと首を痛めますわよー」

もぞもぞ、ずるずる、もぞもぞ、ずるずる

ベッドの中で鬼ごっこ。

といってもベッドの面積なんて知れているものですぐにわたくしが一夏さんを捕まえた。

そのまま今度は横にずるずると一夏さんを運んでゆく。

その間『うぅ』とか『はぅ』とか『恥ずかしい』とか、顔を赤くして抵抗する一夏さんが可愛く見えないわけがない。

「さあ！始めますわよ！」

「ええっ？！何を！？」

枕を二人で分け合っての背中合わせで、わたくしが切り出した。

さすがのわたくしもこの距離で向き合うのは恥ずかしいのだ。

「こんなのフェアじゃありませんわっ！」

「だから何がっ？！」

やはり一夏さんを振り回すのは楽しい。いちいち、可愛らしいリアクションを見せてくれるから

ためしに今、左手を強く握ってみると、、

「ええっと、その前にセシリア、やっぱり手を繋ぐのは・・・」

止めにしようと言うのだ。

「ダメですわ。一夏さんは逃げるではありませんか」

「うぅ、、もう逃げないからー」

その懇願に左手の握力で返事をした。

「はぅ」

彼が顔を赤くしているのが分かる、見なくてもわかる、こうも薄着で密着していると心臓の音が聞こえるのだ。

ドクン、ドクンと心拍数が上がっていることなどお見通し

ふふっ、そうやって一夏さんを苛めるのがすごく楽しい。

今度は頭を押し当ててみる。

首を上に傾け一夏さんの首筋にぐりぐりと髪の毛を押し付ける。

「なーにーが目的なーのーセシリアはーー」

まだ上がる鼓動の速さとその体温に満足を覚えたわたくしは、更に

ぐりぐりとする。

「お金なら家にはないぃぃーー」

今度は一夏さんが体全体をもそもそし始めた。

「ふふっ、すみません少し遊びすぎましたわ」

手を放す、押し付けていた頭部を元に戻す。

「っえ」

名残惜しそうにわたくしの手を追いかけてくる一夏さんの手と声を、い・ま・は無視して今度こそ本題を切り出した。

「あの話をしたのは初めてなのでしょう」

「っう、、あの話とは・・？」

わかっているくせに

「さきほど一夏さんが『今のナシ全部うっそさー』と言われた話ですわ」

「もう、全部うっそさーなのにー」

その答えになっていない返答は、蒸し返されると嫌な話であると同時に、初めてした話であることを意味していた。

「そこでっ！一夏さんだけ『初めての話』をして、わたくしが『初めての話』をしないのはフェアじゃありませんわっ！」

言ってから気付いてしまいましたが、初めての話というワードからは何か卑猥なものを感じますわね・・・

まあ、純粋な一夏さんはそんなことには気づかな

「初めての話ってセシリアは思春期だなぁ～」

、、、わたくしの中で一夏さん像が少しひび割れた。

「ふ、ふふふふふふふふふーーー！！」

「え、え？」

「わたくしは真面目な話をしようと言いますのに―、一夏さんはそうやって茶化しますのーーーーーー！！！」

「熱いよ！セシリアの背中から異様な熱を発しているよ！！」

「一夏さんにはー、後でお仕置きが必要ですわね――――――！！！」

「、、す、すみません、ごめんなさい、青少年に不適と思われる発言をしてしまいました、、ごめん」

しまった、真剣に謝らせてしまった。そんなつもりではなかったのに

「いえっ、そんなに謝らなくてもいいですわ！」

「え」

「わたくしも『初めての話』という言葉からは少し卑猥なイメージを持ってしまいましたから・・・」

「まったくー、セシリアはエロいなあ～」

「・・・」

「ごめん、ごめん、冗談だから今のは口が滑って」

「後で覚えておきなさい・・・！」

「ひぃ！」

それから少しだけ間を空けた。仮にも今までずっと誰にも話したことのない話をするのだから、相手には真剣に聞いてほしいし、自分も切り替えたい。

「一夏さんはわたくしの家庭についてどこまでご存じで？」

本当に唐突に聞いた。

「・・・両親の身分がつり合わなくてお父さんがヘコヘコしてたっていうのは知ってる、、、それが原因でっていうのも知ってる」

それが初めてする話だと分かってくれたのか、一夏さんは切り替わった。声も雰囲気も今までのように砕けてはいない。

「ええ、父ほど敬うべき相手はいませんわ」

「・・・、・・・『敬う』っていうのは敬意を払うって意味で、英語ではりすぺ」

「知っていますよ!!何年日本語を学んだと思ってらっしゃるの!!」

思わずツッコミを入れてしまったけど、その雰囲気は壊れなかった。

「・・・、・・・・」

背中越しの無言、聞く態勢に入ったのだろう

「父は小さな村の炭鉱夫でしてね、母は常に先頭に立つ人でしたから、その村の視察に訪れて村長の息子である父と出会った。」

「そこからはドラマのような身分違いの恋が始まる。父は現場での力仕事だけでなく頭もキレるようでしたから、上手くいったんでしょうね」

「小さな村の炭鉱夫と大企業の社長が結婚。反対の声しか上がりませんでしたわ、しかしそれを治めたのも父の力。その頃には父は母に匹敵する頭脳を持っていましたから」

「わたくしを産んで、忙しくも幸せな結婚生活。誰もが羨む天才同士で美男美女、、、当然そこには亀裂が入りますわ」

自分で声を発しておきながらも、さっきの一夏さんみたいだなと思う。聞き手のことなど考えず、胸に溢れた感情をただただ垂れ流しているようなかんじ。

「父の故郷である炭鉱村の取り壊しが決まった時ですわ、おかしくなったのは」

「父は猛反対、知恵も策も用いず感情に任せた駄々をこねるだけの子供のような反対。」

「みんな驚愕、あの合理的で仕事のこととなれば感情を捨てる鬼のような父が、いざ自分のこととなると聞き分けのない子供に戻るんですから」

「村の取り壊しは中止、、、、それをきっかけに父の中で何かが切り替わったんでしょうね」

「父は世界の全てを救おうとしましてよ」

背後から、かすかに息を呑む音が聞こえた

「深刻な食糧不足に悩む地域、露頭を彷徨う失業者、地べたに座り込む家のない子供たち、冤罪を被せられた一人の男性、、、、全てを救おうと会社を上げて」

「当然、企業に不利益しかもたらさない人間はクビを切られる」

「地位を失った父は狂ったように頭を下げ続けましたわ、『救ってくれ、救ってくれ』と。女社長の夫という身分を使っていろんな偉いさんに会って」

「『救ってくれ、救ってくれ』母に対してそう言っている時も勿論。」

「当時のわたくしには、それが他人の顔色をうかがってヘコヘコする男のようにしか映りませんでしたけど」

言い終わった、胸のモノを垂れ流し終えた。

「オルコット系の企業が一時期、すごい金額の寄付やら物資やら、、したのは」

一夏さんが口を開いた。

「ええ、全て父の仕業ですわね、、長くは続きませんでしたけど」

「・・・そっか」

「全部、両親が死んでから気付きましてよ、、、馬鹿な人、それまでのように堂々と世界平和を謳えばついてくる人間もいたでしょうに」

「でも、あのベンチコートは着るんだよね」

「うっ、、あれは、、その、、」

気付かれていた。あの煤汚れた服は父愛用のものだ。

「あれは、、幼い頃、父と一緒にあのベンチコートにくるまっていた母が幸せそうな顔をしてたからであって、、」

「それだけ？」

「うぐっ」

「本当は？」

「ええ！父のことは少なからず尊敬していますわよっ！やり方はどうであれ父によって救われて人がいるのですから！！今でもそういう人達から感謝状が届くのですから！！」

言った。遂に言ってしまった。

おそらく自分はこれが言いたかっただけなのだと思う。

『初めてする話』と称して本当は父の偉業を誰かに認めたてもらいたかったのだ。

全てを救おうとした父に、そんなものは御伽話だと嘲笑った企業両親が死んでからもそれは続いた。

会う人、会う人に

『君の父親には笑わせてもらったよ、君はしっかりしていて良かった』

『あんなお父さんを持って辛かったねー』

『自分が頭を下げて救われる人がいれば、とか言ってたぜアイツ、ばっかじゃねーの！』

『正義の味方にでもなりたかったのかい？君の父親は』

ぶん殴ってやりたい衝動をねじ伏せて、彼らと一緒に父を笑った。

喉の奥までせり上がった衝動を塞ぎ込んで、彼らと一緒に父を侮辱した。

――何よりその衝動は自分自身を否定するものでもあったから

信じつづけたモノを、男は猿だと、父は下衆だと、信じつづけた自分に対する裏切りに他ならなかったから

でもそれは、今日でお終い。

これ以上、自分を騙し続けることに意味はない。

セシリア・オルコットが自身を変えるとすれば――

――己が父を認める以外ありえない

父が成し得た偉業を笑う者がいれば、ぶん殴る

父を侮辱する者がいれば、ぶん殴る

正義の味方気取りかと嘲笑する者がいれば、ぶん殴る

誰かと一緒に父を笑う自分は、ぶん殴る

――わたくしは父を認める。

「心は固まりましたかねセシリアさんや、ふぉっふぉっふぉっふぉっふぉ」

こちらの心情などお見通しだと言わんばかりの背中の向こう側。

「・・・ええ、固まりましたわ、もう今までのセシリア・オルコットではなくてよ」

父を敬うのに恥じることはない。

「それは結構なことじゃ、ふぉっふぉっふぉっふぉ」

演技めいた口調のそいつ。

それが何故かたまらなく愛おしい。

「ではまずは、織斑一夏を手に入れることから始めますわ」

「ふぇ？」

始めにさっきの右手首を掴んだ。

がばっと邪魔な掛布団を蹴り上げ

体を起こすと同時に、目をぱちぱちさせている無防備な体にまたがる。

最後に余った手で――――

「ちょいちょいちょい！セシリア？！」

――その左手をベッドに押さえつけた

「何ですか？一夏さん？」

ニコニコとした笑顔で答えた。

「こ、こここここれは一体どういうことかな？！」

体は完全に麻痺しているのか押さえつけた両腕からはなんの抵抗の力もない。

もっと暴れるかと思ったら、、意外とすんなり行ってしまいそう。

抵抗する一夏さんをじんわりいたぶりたかったのに・・・

「どういうことって説明しなければわかりませんか?」

「わわわわわ、わかるわけないでしょっ!?」

真っ赤に染まった一夏さんの顔、女であると錯覚するほど可愛らしい。

征服欲に沸きたてられる、両手の拘束はもう必要ない。

その顔に白い手を這わす。

「っひゃ!」

頬っぺたから、あごさき、首筋を這って、肩口を撫でる。

ぎゅっと閉ざされた目はまだ開きそうにない。

今度は逆に、肩口から、首筋、頬っぺたへと手を移動させる。

そして動かないようにと両手でその顔を固定した。

「せ、セシリア・・？」

「わからないというなら教えて差し上げますわ」

ゆっくりと馬乗りになった上半身を下げてゆく。

――――彼の全てを奪うために

覚悟などとっくに決まっている。

織斑千冬に勝てると言い切ったその日から心は惹かれていた

ブリュンヒルデを前にして臆さない彼に強さを感じた

何度斬られても立ち上がった彼は大事なことを気付かせてくれた

弱々しく語った彼はあまりにも危うく、脆かった。

そして、背中を合わせたベッドで

わたくしがこの背中を支えると――――――

鼻と鼻がすれあう距離、たがいの息遣いをも感じ取れるこの距離で

抵抗と言う抵抗もなく近づけたこの間合いで

最後に一度、彼の名前を呼んだ

「一夏さん」

「セシ・・・リア、、、」

控えめに開いたその瞳は、うるうると揺れていた。

しばらくそのまま見つめ合って

ようやく彼は目を閉じた。

それは許可の合図なのか

考える間もなく、わたくしは残り数センチの距離を詰める。

こっちも目を閉じて、初めて味わう感触を迎えに

・・・・・・・、・・・・、キスってこんなに堅いものなのだろうか？

もっとこう、柔らかくて、甘酸っぱくて、舌を絡みつけてー・・・・

が、その感触がいつまで経っても来ない。

おそるおそる目を開ける

眼前に迫るのは黒色、どこかで見たことのある色

はは、ははははーー、もうわかってしまいましたわー、どんな状況か解ってしまいましたわー

ギシギシと軋む体を動かして視点を引いていく

二回目ですわー、この状況二回目ですわーー、そして一回目の時とは比にならないほどの殺気ですわー

『出席簿』の三文字

背後の殺気で骨の潤滑油全てが一瞬で干からびた。

かわりと言わんばかりに、背筋に嫌な汗がたらたらと

わたくしは忘れていた、一夏さんを手に入れることなどちょちょい

のちょいだと鷹をくくっていた。

必要なのは自身の覚悟のみ、、、、そう思っていた頃がわたくしにもありましたわー

一夏さんを手に入れるにあたって、無視できない壁があったではありませんかーー、きっとその壁は大きすぎて見えなかったんでしょうねー

ははー、ははははーー

「オルコットー、
何をしているんだ――――――?:?:?:

疑問符の暴力に全身が震えあがった。。。

Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

「一夏さん」

最後に一度、名前を呼ばれた。

何故『最後』なのか？

それは、これから目の前の女性になにわされるのか、、、、わかっているからだ。

顔に添えられた手で全身が硬直し

腰に受ける確かな重みと、どこを見ようとしても彼女しか映せない瞳に

男としての機能を否応なく思い出させた。

熱い

血のまわる速度が速い、ドクン、ドクン、一回ごとに増すスピード

を止められない。

体なんて動くわけがなかった。

腰から下はセシリアの、、い、いやらしいお尻の感触に全てを奪われ

上半身は、妖艶なセシリアの笑みに・・全ての機能をセシリアに預

けてしまった・・

そんなセシリアさんによる金縛りを、、気持ちいいと感じてしまう

僕が、、、なすがままにされたいと思う自分が支持を出したのか

「セシ、、、リア、、、」

口が勝手に動いて

許可を出すかのように、、目を閉じてしまった。

「オルコット―、
何をしているんだ――――――?????????????????????
?????????」

待ち続けた、、き、キスの感触をぶち破ったのは

「お、おおおお、おお、織斑、、きょきょきょ、、教諭」

いつの間にそこにいたのか、ベッドの横に仁王立ち、我らが担任の織斑先生だった。

その手にはしっかりと出席簿を握って。

９０度右を向くという動きを、実に９回の工程に分けて行ったセシリア。

一回１０度、ギシギシ、ギシギシ、機械のようだ。

「よおー、オルコットー元気そうでなによりだ――――――！！！！！！！！」

その声だけでガラスが割れそう。

ん？なんで、姉さん怒ってるんだろう？

姉さんはただ僕の様子を見に来ただけだろうに

「ななななな、なんの、、ごごごようでしょうか？？？？」

だからなんでセシリアもそんなに慌てるの？

まだ、僕の上に乗っかてるくせに・・・

・・・・・・っ！？

「ああ、私も一人の弟を持つ姉の身でな――、大事な大事な弟のお見舞いに来たところだが――――――！！！！お前は何をしていたんだ――――――――――――――！！！？？？？？？？？？？？？」

まずい、まずい、まずいぞ！！！

こんな状況誰が見たって、僕とセシリア行為に及んでいたようにしか見えないじゃないか！！！？

いや、、実際行為に及ぼうとしていたのか・・・

そんなこったぁ！どうえもいい！！

え、えっち直前シーンを担任に見られるなんてっ！！

停学処分もいいところだ！！

ななななn、なんとかしなければ！！！

「わわわ、わわわわわたくしは！！！」

「ちちち違うんです！！織斑先生！！」

僕が華麗な言い訳を見せちゃる！！

「ほぉー、何が違うんだ織斑、、まだ私は何も言っていないのになー！！」

「せせせ、セシリ、、オルコットさんとはぷぷ、プロレスごっこをしていたんです！！」

ぐはぁ！苦しい、苦しすぎる言い訳！！

「プロレスごっこだと・・・・？」

「そそそそ、そうですわ！！今が第二ラウンドの始まりでして！！」

細かい設定を付けて現実味を帯びせようとしたセシリアだが

――――それは完璧な墓穴だった

「お、お前たち、、、まさか――――――？」

震える姉さん。

まさか、なんだというのか？

予想外のリアクションだったため、未だ馬乗りのセシリアと一緒に首を傾げる。

姉さんの視線を追いかける。

「違いますわ織斑教諭っ！！！」

「そうだよ！！勘違いしないで姉さん！！」

――そこは純白のベット赤く濡れているポイントだった。

「お、お前たち、、取り返しのつかないことを・・・」

「姉さん違うって！！そ、そそそその赤いシミは鼻血なんかじゃないよ！！セシリアの血尿だよ！！」

「一夏さん逆！！逆ですわ！！！」

「え、え？」

完璧に慌てる僕

「そうか、、血尿か、、血尿のように見えたか、、、」

「あああの、織斑教諭、誤解ですのよ・・・？」

だらんと手をだれて、何もない白い天井を見つめる姉さん

それは、嵐の後の静かさだろうか？、、嵐の前だろうか

「ねねね、ね姉さん？」

直前に解った、後者だ。

「オルコットオオオ

夜の学園に龍の雄叫びが木霊する。

僕達は二人仲良く、寮謹慎処罰。

なんとか血尿、、じゃなくて鼻血の件は誤解を解きましたが・・・。

そんなことより本当に、セシリアが変わってくれて良かったと思う。

それだけでボコられ続けた放課後なんか、おつりが返ってくるくらいだ――――

――――――16話（後書き）

出張版、番外編～

一夏「さあ！終わったよ！オルコット城陥落、おめでと～！！」

蘭「おめでとうございまーす！」

一夏「ふぅ～、長かったね、ここまで」

蘭「妄想だけで、よくここまで来れましたよねー」

一夏「さて！無駄話はおしまい！！次回予告するよ！！」

蘭「はい！なんと次回から番外編に入ります！！」

一夏「物語を1、2倍楽しむためのっ！！その注目のラインナップを発表しちゃってください！！」

蘭「え～っと

”もうこれが本編でしょうっ！”

『　Ｉｆ　１３話、蘭「なんでアマトークなんてみたんだ私・・・」

”無数の触手がうなって襲う！”

『　Ｉｆ　１３話、「女風呂でもみくちゃにされちゃう織斑君はぁはぁ」

”あわわわわ！千冬さん助けて！夜のアルプスいちまんじゃくっ！！”

『Ｉｆ　１６話、セシリア『一夏さんはわたくしの軍門に下りましたわ』

”面識関係とか無視して一同が集う”

『第一回キャラクター紹介』

・・・の４つです！！」

一夏「う～む、どれもエロそうですなぁ～」ジュルリ

蘭「もう、３つ目アウトでしょう、、、本編の時点でアウトですよ」

一夏「そして！！番外編終了後には！！何が待っているのかね！！蘭ちゃん！！」

蘭（無視、、私の意見無視・・？）

蘭「本編の続きが待ってマース、、鈴さん出てきまーす」

一夏「うむ、よく言ってくれた」

@箒「作者のブログにもＳＳありましてですね、原作設定の一夏君が部活作ったり、セシリアの奴隷になったりと・・・下からどうぞ←ｈｔｔｐ：／／ｊａｇｕｒｉｎｇｕｓｙｏｕｋｏｕｇｕｎｎ．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｂｌｏｇ－ｃａｔｅｇｏｒｙ－７．ｈｔｍｌ」

蘭「検索機能とか上手く使ってくださいね～」

一夏「一応『自作』で検索すればすべてのｓｓが引っかかるはず」

蘭「ではでは、また更新の日まで～」

一夏「さよーならー」

Ｉｆ１３話　蘭「もうこれが本編でしょう！！」（前書き）

あくまでｉｆですので本編にこの話の影響はでません

If13話　蘭「もうこれが本編でしょう！！」

一夏君が電話するところから始まります

『なにかあったら電話してくださいね』

瞼に焼付いたその笑顔で、不意に後輩の言葉を思い出した。

電話、、、後輩に、電話

ひょっとして『なにかあった時』っていうのはこういう時のことを言うのではないだろうか？

『一夏さん、溜め込みやすいんだから』

今まさに、僕は『溜め込んで』いるのではないか

、、電話、蘭ちゃんに？

そんな言葉の解釈よりも、僕はその後輩に電話をかけるという行為に自然と頬が緩む。

よしっ！蘭ちゃんに電話しよう！

名案だ！どうして最初から電話しなかったんだろう！！

むっふふーー、

思えば蘭ちゃんは僕の唯一無二の親友ではないか！！電話しない方がおかしいっかたのだ！！！

いつもの左ポケットからケータイを取り出し、数少ない電話帳の中からその名前をＣｒｉｃｋ！Ｃｒｉｃｋ！

早く出ないかな、出ないかな？

ふとんを抱きしめて、ベッドの上でごろごろと転がる。

やばい顔のニヤニヤが止まらない、どうして蘭ちゃんに電話するだけなのにこんなに心が弾むのだろう

ごろごろ、ごろごろ、にやにや、にやにや

早く、早く出て！

『もしもし、一夏さん？』

そうだ、これだ、この声が聞きたかったのだ。

僕を変わらせた張本人、五反田蘭。

この人がいなければ幼馴染に『変わった変わった』と言われることもなく、ＩＳの世界チャンピオンとも戦うことはなかったであろう。

中一の冬からずっと支えられてきた、そうでなければ僕は未だに馬鹿げた理想を追い続けていただろう。

ついこの間だって、蘭ちゃんがいなければ一人で博覧会に行っただろうし、あの暗闇からも抜け出せなかったかもしれない。

改めて気づいた、五反田蘭が占める僕の心の面積は、、、、あまりにも大きい

――――――僕は五反田蘭が好きなのかもし

「え、あの、、蘭ちゃん？」

その気持ちに気付かないふりをするかのように声を出した。

『？ええ、その蘭ちゃんですけど』

どうかしました？と続ける。

蘭ちゃんは普通だ、おかしいのは僕。

その声を聴くだけで胸がキュっと切なくなる

僕はナニかいいようのない感情を蘭ちゃんに対して抱いているといのに、蘭ちゃんは僕を全然意識していないじゃないか。

そんなのは、、ただの友達みたいで嫌だ・・・

いつものように言葉が出てこない。

「えっと、、そのね、、何かあったら電話していいって言ったから・・・」

愚直に理由を述べる、本当に理由はそれだけだった。

『、、、一夏さん泣いてます？』

「え、泣いて、、なんか、ないよ・・」

声が震えていたのだろうか、突拍子のないことを言われて納得してしまった。

『泣いてますよっ!どうしたんですか!?何があったんですか?!』

「、、だって、、、うぅ、、だって」

ますます涙が溢れ出る。頬をつたうこの熱さは久しぶりだ

今まで気付かなかった感情が一気に押し寄せてくるように。胸から締め上げられるものが涙に変わる

『あの、、今から家に来ますか?今日は誰もいませんから・・・』

「、、いいの?」

『一夏さんの都合が良かったらですけど、、っあ、寮ですよね、やっぱり無理な』

「ううん、無理じゃないよ、、行く」

『は、はい、待ってます』

「、、じゃあ行くから、、、すぐに行くから」

そこで電話は切った。

受話器越しより、ちゃんと会って話したかったから。蘭ちゃんの姿を見て、この気持ちを確かめたかったから。

走った。

人生で初めてタクシーを呼んだ。

寮の規則なんて忘れた。

――涙はやはり止まらなかったけど。

Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

『、、じゃあ行くから、、、すぐに行くから』

そこで電話は終わった。携帯を閉じて、ベッドに身を投げ出す。

「一夏さん、えらい重症だったなー」

”友達作るっ”とか意気込んでたから、マスコットのように扱われてストレスが溜まったというところか。

まったく慣れないことするから。

「ふふふー」

とはいえ一夏さんが家に来るということは非常に喜ばしいことだ。

しかも二人っきり―、今日は家には私しかいないのだ！明日は月曜日だというのに何をしているのかね私の家族はっ！

むふふ、何かの手違いで一夏さんは私を――むふふ

でかしたぞっ私の家族！

実際、一夏さんは私の気持ちになんか気付かないんだろなー、と半分諦めている自分がいる・・・

しかし！一夏さんは自分が弱っている時、すごく甘えてくることを私は知っている！！

極めてチャンス！！

服装とか髪型とか慎重に調整せなば・・・！！

勢いよくベッドから立ち上がった。

◆◇◆◇◆◇◆◇

一夏さんをもてなす準備が整った。

服装は上下ジャージ、結局着替えていない。以前、あまりにも服を持っていないことが判明した一夏さんを連れ出し一緒にお買い物した時に買ったやつだ。曰くジャージ姿の女性は美しいとのこと。ちなみにそのお買いもの以降、一夏さんは私と出かける時、私が見繕った服を着てくるようになった。偉大な功績である。

髪は降ろしてロングストレートに。いやこれも変わっとらんのですが・・・。一夏さんに出会って間もない頃、初めて髪型を変えた時、一夏さんが私を見て『髪降ろしてる方が可愛いな』と呟いたこと私は忘れない。当時ぶっきら棒だった一夏さんがそんなことを言ったのだ、私は感動で涙した。

・・・何か忘れている気がするけど、、まあいいか

さて、後は精神統一で心を清めるだけ
『ピンポーン』

でえ！早いな！！

「はーい、今出まーす！！」

階段を駆け下りて、玄関を目指す。私の部屋は二階にあるのだ。

ガチャリ、店ではない方の入り口を開けた。

「いらっしゃい、一夏さん」

「あ、こんばんは蘭ちゃん」

そこにいたのは、月明かりに照らされた、やっぱりジャージの一夏さん。

いつにもましてサラサラとした髪と、妙につるつるした肌。

そして、さっき泣き止んだと言わんばかりの赤い目。

「でええ!!どうしてまた泣き出すんですかっ?!」

「うぅ、、ごめんなしゃい、、、」

いかんな、、こりゃホントに重症だ。

「さ、早く中に入りましょう」

手を取って、家の中へと案内した。

Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

「何か飲み物持ってきますね」

そう言って、部屋の主は出て行った。

・・・というわけで、蘭ちゃんの部屋でございます。

どどどどーしよう！年若い男女が夜のお部屋で二人きりなんてー！しかも蘭ちゃん以外に誰もいないよっ！！あわわわわわわ何かの手違いでででで！！なんで！？僕はどうしてこんなに慌てているの！？もう二十回以上はこの部屋に入ってるし今だっていつものポジションに座ってるし！！脚の短い丸いテーブルが部屋の中央にあってててててその横のクッションの上にせせせせせ正座してるだけだししししし！！今までだって何度も二人きりというシチュはあったのににに！！そうだよ！いつもと一緒だよ！！蘭ちゃんだって普段着っぽい恰好だしというかジャージだったし！！髪型もいつもとおんなじだったし！！！いや僕の目には異様にかかかか可愛く映ったのですが！！そう意識されていないのだよ！！ただ仲の良い先輩が電話してきていきなり泣き出しちゃったよコイツってなったから仕方なーく家に呼んだだけで！！ステイクールｓｔａｙｃｏｏｌ落ち着くんだ僕！そうこれはいつもとなんら変わらないこと、普遍なのだよ！僕が慌てる道理などありはしないさ、、、さあ、部屋を眺めて優雅に蘭ちゃんの帰りを待つのだ・・・掛け時計、、勉強机、、電気スタンド、、カレンダー、、タンス、、タンス、タンス、、

あのタンスの中身は、、蘭ちゃんの神秘的な部分が！！今僕は一人っきり！！蘭ちゃんはまだ帰ってきそうにない！！ちょーっとだけ覗くくらいなら、手を伸ばせば届く距離！ちょーーーっとだけ開けるくらいならららっららららら！！――って僕は何をしようとしているんだーーっ！！ぼぼぼ僕にそんな変態趣味はないはずーーー！！！！ステイクールＳｈｕｔｍｙｆａｃｅ、、さあ部屋を眺めていよう、、本棚、押し入れ、、コンポ、、ベット、、の上の写真立て、、、、ななななななななんで僕の寝顔の写真があああぁぁぁぁーーーーー！！ああああああれはおそらくＩＳ博覧会へ行ったときののの車の中ーーーー！！！撮られていたのかああああーーーー！！！・・・えへへ、蘭ちゃんが僕の寝顔写真を枕元に置いているのかー、う、嬉しい・・・僕も蘭ちゃんの寝顔写真枕元に置こうかな。。いやむしろ蘭ちゃん自体を僕のベッドに――ななななななななな何を考えているのかなあああーー僕は！！！ステイクールＩｓｍｙｆａｃｅｒｅｅｅ

・・・おでことおでこでピッタンコという素敵イベントが待っている――――!!

落ち着くな僕!!我が顔よ――赤くなれ!!

ぬーーっと両手を前に突き出して、赤くなれと念じる。

「何やってんですか一夏さん?パントマイムの練習?」

「へ?」

くはあ!いつの間に!!見られていた!!食器トレイを持った蘭ちゃんがそこに立っているではないか!!

別の意味で顔が赤くなる・・・

「パントマイムじゃないよ、、超能力の練習だよ、、、」

「あははー、なんかいつもの一夏さんに戻りましたね」

「むぅー」

やはり僕は変だったらしい。

「あったかいお茶でよかったですか?」

「うん、ありがと」

その動作は慣れていた。さすがは定食屋の娘、安心できる動きで湯呑をテーブルに置いてゆく。

そして自身もそのクッションへと身を降ろした。

うん、いつもの位置だ。

「ほいで、どーしたんですか？いきなり泣いて電話してきちゃってー」

「うっ」

言われて気付いた、僕はさっきまで泣いていたのだ。えたいの知れない感情に襲われて、、、情けない、そんな醜態を蘭ちゃんに晒してしまうなんて

「あててあげましょうか、一夏さんが電話してきた理由」

「ふ、ふん！できるものなら？」

わかるはずがないさ、僕があんなにへこたれた理由なんて

ずずずと優雅にお茶をすする蘭ちゃん

僕も負けじとお茶をすすろうと

「女風呂に入れられたからでしょ」

「ぶっは！！」

何故、なにゆえわかったの？！

お茶飲んでなくてよかった、吐き出すところだった

「図星ですかまったく」

「な、なにゆえ、お解りになられたのでしょうか？」

「香りが違うんですよ！！か・お・り・が！！」

「え、ええ？」

「ほら、もうこの香り！加えて髪のサラサラ感！！」

ずいずいと身を乗り出して、髪を撫でられる、、鼻でクンカクンカされる

うぅ、、恥ずかしい

「普段の一夏さんじゃありえませんよ！この匂いは！！いえ普段の一夏さんも十分良い匂いなのですが」

こ、こんなことを言われておきながら、さらに、眼前に迫る前かがみの蘭ちゃん、、む、胸が見えそうで

「ら、蘭ちゃん、恥ずかしい」

「え、ああすみません」

するすると元にもどる蘭ちゃん。

「それでね、スクール水着とか着させられて」

「あ～、されそう、一夏さん可愛いですから、着せたくなります」

「みんなに見られるし、手つっこまれるしで大変だった」

「ちょ、ちょっと待ってください」

「？」

右手を額に当て、左手はパーで突き出す制止の合図

なんだろうか？

「見られるのはわかるとして、どうして一夏さんのスクール水着姿に手をつっこまれたりするのでしょうか？」

「え、だって女子風呂に入れられたから」

「女子風呂に入ったというだけで、女の子と一緒に入浴したという意味では」

「そういう意味だけど、、、あはは？」

「っな！な、な、な！」

驚愕の顔が、蒼白になって、、徐々にそれは憤慨えと変貌し

「何やってるんですかっ！！？？一夏さん！！」

「だから超能力の練習だって」

「その話じゃないですっ！！」

「久しぶりに五反田家の伝統芸を見た」

「もう怒りましたよ！！ぜんっぶ話してもらいますからね！！ＩＳ学園に入ってからのこと！！！」

「うむ、よかろう。ＩＳ学園の何が知りたいのかね？」

「ＲＰＧの序盤に出てくる案内役みたいに言わないでくださいっ！！」

楽しい時間が始まった――――

◆◇◆◇◆◇◆◇

「まったく、何回同じ技させんだよって感じで」

「仕方ないですってー、人が寄ってきてその相手をするっていうのはジャグラーとして必須スキルでしょう」

「むー、そうだけどー」

「その調子でいくとギターも弾かされてるんじゃないですか、あとヴァイオリン」

「いや、まだ楽器は寮に持ち込んでないんだよね」

「そなんですか？」

「元々、初日から寮に入る予定はなくて――――」

――――話し込む僕達――――

「でもその隊長さんは中々すごい人なんじゃ？」

「そうだね冷静に考えれば、姉さんの進軍を防いだわけだし・・・」

「何者なんでしょうね？その隊長さんは」

「また機会があれば聞いてみよう」

「っあ！思い出しました一夏さんに言おうと思ってたこと！」

「なになに？」

「織斑一夏を見守る会のことなんですけどっ！」

「げぇ！まだそれ存続してたの！？」

「次期会長にですね――――」

――――更に話し込む僕達――――

「はあ、話し込んじゃったね。今何時だろ」

「１０時３０分です」

「うぐっ、もうこんな時間か・・・」

そろそろ帰らなければやばい、寮の規則にもひっかかってくるし、なによりこんな時間まで若い男女が一緒にいるわけにはいかない。

「そろそろ、ドロンしようかな」

にんにんと人差し指を立てるポーズ。

「はい、またいつでも来てください」
にこにこと笑顔で答えてくれた。
「じゃあ、明日来る」
「明日は平日ですけど・・・」
「そいじゃ明後日」
「まだ火曜日ですよっ、どんだけ来たいんですか！」
「むぐぅ、だって蘭ちゃんは唯一の心の癒し」
「そ、それは嬉しいです」
よっこらせと立ち上がった。
「今日はありがと、蘭ちゃんに話したらスッキリした」
「いえいえ、どういたしまして」
ドアの方へと歩く。
「見送りますよ」
いつものように、、本当にいつものように蘭ちゃんもついてきてくれた。
部屋を出て階段に差し掛かる。

――違う
ここで帰ってはいけない。
まだ目的を果たしていないじゃないか。
――止まって
わかっている、そんなことは、、わかっている
だというのに、何かに背中を押されるように降りてしまう
一段、また一段と
――素直に
また繰り返すのか
ようやく気付けた気持ちに気付かないフリをするのか
――お願い
不安で不安で、、断られたらどうしよう
この心地の良い関係が崩れてしまったら
出会ってすぐ言うつもりだった、、でも怖くて、その優しさに甘えてしまった
――思い返して

もし、彼女が男ばかりの学校に行ってしまったら
　考えられない
もし、彼女が異性に囲まれて入浴したというのなら
　嫉妬で狂い死ぬ

もし、、あの写真立てに僕以外の男の写真が入っていたら――――

そうだ、あんな物はなかった。
ＩＳ博覧会に言ってからも何回かあの部屋に入ったことがある。
しかしそんな物はなかったではないか。

いつもは隠していたのだろう・・・
今日はいきなりだったから、準備しきれていなかっただけ

よほどの思い入れがない限り、異性の写真なんて、、枕元にはおかない

枕元の男が、、、、自分以外の女ばっかり見て、、自分以外の女と入浴して、、、、

仮にその男が僕で、、女が蘭ちゃんなら――――

「ごめん、忘れ物したかも」

――――これ以上、彼女につらい思いわさせるわけにはいかない。

脚は止まった。あと一歩で床というところで

「へ、忘れ物？」

「うん、、、戻って」

あれだけ長かった階段を一瞬で逆戻り、再び蘭ちゃんの部屋へと入った。

今度は確かな決意を抱いて、彼女の手によって開かれたドアをくぐる。

「一夏さん何か持ってきてましたっけ？」

真面目にキョロキョロと部屋を見渡す蘭ちゃんを

「違うよ、、、忘れ物は、、」

――――後ろから抱きしめた。

「へ？」

「蘭ちゃんだよ、、僕は蘭ちゃんのことが、、好きだから、、このまま置いておきたく、、ない」

「いいいい一夏さん?!」

硬直した彼女の体を優しくほぐすように、抱きしめる

その背中はとても細く、繊細だ。

「僕は、、蘭ちゃんのことが、、好き、大好き」

「そそそそれはどういう意味で!?」

ｌｉｋｅなんかじゃない、友達としてなんかじゃない

「異性として蘭ちゃんが好き」

「、、、ちゃ、、ちゃんと顔を見て言ってください」

しゅるりと僕の腕の中で回った。

至近距離で体のほとんどがくっついたまま向き合う。

かすかに彼女の目も震えているのが分かった

「好きだよ、蘭ちゃんのこと以外考えられない」

「、、もう、遅いですよ一夏さん」

顔を僕の胸にうずめて、ようやく互いの気持ちが伝わった。

「もっと早くに言ってくれたって、、いいじゃないですか」

本当にその通りだ、、ずっと嘘を吐き続けていたのだから

「ごめんね、、つらい思いさせて」

「、、私、不安だったんですからね、、一夏さんが、、ＩＳ学園行っちゃうから他の、、女の子と、、くっついたらどうしようって・・・」

蘭ちゃんが泣いているのは僕のせいだ、責任をとらないと

「もう、つらい思いはさせないから、、蘭ちゃんを幸せにするから」

「い、、ちかさん」

顔を上げて、彼女は目を閉じた。

何をするかなんてわかってる

「ん」

キスをした。

ただ唇を合わせるだけの、小鳥キッス。

味なんてしないはずなのに、とてもとても甘酸っぱい。

「もっと、もっとちゃんと私を、、一夏さんの物にしてほしいです」

僕の手を引いて、彼女はベッドへと倒れこむ。

うぅ、、体がほぼ勝手に彼女に覆いかぶさるように・・・

「い、いいの？」

最後の理性が働いてくれた。

彼女は声を出さず、ただ顔を赤くしてコクンと頷いた

後日談っ！！

「いらっしゃいま、ってなんだよお前らかよ」

「む、『なんだよ』とは何かね、お義兄さん」

「お前の義兄になった覚えはないっ！」

「え？もうプロポーズしちゃったけど？」

「は、早すぎるー！同い年とは思えないー！」

「お兄、今は本当にお客さんとして来てるんだからちゃんと接客して」

「・・・何名様ですか？」

「蘭ちゃん、あそこのテーブル座ろー」

「えー、カウンターがいいですよー」

「・・・では、二名様カウンター席へとご案内します」

「やっぱ御座で、日本人なら畳でしょ」

「靴が脱げるっていうのが楽なんですよね」

「てめぇら！接客される気ねえだろっ！？」

「メニュー何にしよっかー？」
「私、一夏さんと一緒なら何食べてもおいしく感じますー」
「この野郎・・・！」
「僕だって蘭ちゃんと一緒なら何食べてもおいしいよ」
「夜は一夏さんを食べたいなー」
「い、いっつも食べてるじゃないっ！」
「今日はどんな味付けがいいですか～？ふふふ」
「え、えっと、、縛ってくれると、、、、いいかな」
「それっぱかりです一夏さん」
「うぅ、ごめん・・・」
「今夜は言葉責めに決定で」
「あの、、、縛ってね」
「どうでしょ、一夏さんの誠意次第ですかね」
「そ、そんな～」
「は・や・く・決・め・ろや！このバカップルども！！」
「ああ、すみません店員さん、、僕達ここ来るの初めてなので・・・」
「毎週来てるだろうがよ！！なに急に芝居がかった演技してんだよ！！」
「あなた、店員さんを怒らせちゃダメよ」
「蘭もか！？お前も乗るのか！？」

「ふむ、、では聞こう
　弾君、、あなたのお勧めのメニューは何かね？」

「ん？俺のお勧めか？そうだな、生姜やｋ」
「厳さーーん！から揚げ定食一つーー！！」
「おじいちゃーん！私は野菜炒めーー！！」

「聞けよ！せめて俺のお勧めを聞いてからにしろよ！！」

蘭ちゃんが僕の彼女となってから、数か月。

僕の日常は変わったようでいて、あんまり変わっていなかった。

変わったと言えば、それは気持ちとか選択基準とかで・・もう常に、
蘭ちゃんのこと考えてます

厨房からは厳さんの声

「がっはっは！それでこそ蘭の選んだ男だ！」

すぐそこからは弾君の

「はあ、いつかこうなるとは思ってたけど、、、はあ」

テーブルを拭いているのはお義母さん

「若いっていいわよねー」

カウンターには常連客

「ちくしょう、ちきしょう、、蘭ちゃんがワシらの蘭ちゃんがーーー」

そして隣には――――

――――僕の愛する人がいる

「ねえ、蘭ちゃん？」

今がチャンス、誰もこっちを見ていない

不意打ちじゃ、不意打ちじゃー！

「なんですかー？」

「っ？！」

チュ

っと僕が顔を近づけるより遥かに早く、キスされていた・・・

「ふ、不意打ちは卑怯っ」

「一夏さんだって、しようと思ってたくせにー」

ｆｉｎ

If13話　蘭「もうこれが本編でしょう！！」（後書き）

次はお風呂です
隊長さんとの絡みになると思われ

そしてその次はセシリアさんの、、、むふふ

Ｉｆ１３話　「女子風呂でもみもみされちゃう織斑君はあはあ」（前書き）

この話は本編に影響されないので注意！

Ｉｆ１３話　「女子風呂でもみもみされちゃう織斑君はあはあ」

拉致される寸前から始まります

「はっはー、すみません。もうアリーナのシャワー使用許可もらっちゃってます。」

『っえ、こっちは織斑一夏の貸し出し許可もらっちゃってるけど？』

「誰からですか！？」

『もちろん、織斑先生から』

「・・・」

っふ、そんな見え透いた嘘、騙されるとでも思っているのかね。姉さんが僕の貸し出し許可なんて出すわけがない。

『ほら、織斑一夏及び入浴する者全員が水着を着用している場合、織斑一夏が女子風呂に入ることを許可するってところに直筆でサイ

ンしてもらったから』

姉さんの威を借りてビビってもらおう。

「嘘だったら、姉さんに言いつけますよ～」

『うん、いいよ』

む・・・、ＩＳ学園の3年ともなれば姉さんの恐ろしさはわかっているはず。にもかかわらずこの反応、まさか本当に僕の貸し出し許可が？

『こっちに実物あるから見てみ。』

確かこの人、演劇部の部長だったような気がする。その何気ない言い回しに騙されたのだ

アホな僕は”筆跡鑑定でもしちゃる”とか思いながら、ドアの鍵を

カチャ

「開いた！開いたぞーー！」

「かこめー！逃がすな！！」

「ぐっへっへー、まんまと騙されやがってー」

「口をふさげーー！手足を縛れーーー！」

すぐにドアを閉めようと思った、でももう体は動かなかった。

腕とか脚とか全部、女の子特有のやわらかい手足で拘束されてた。

いろんな部分で女の子と触れ合ってた。鼻血出さなかった僕はえらい

「隊長、奴はまだ気付いていないようです」

「油断はするな、万が一の場合もあるのだからな」

このままでは本当に女子風呂に拉致されかねないので、もがもがと抵抗する。

っふ、たかだか小娘どもに拘束される僕ではないさ。

もがもが

「こらー！動くなーっ！」

右腕、ぎゅーっ

「ちょっとの間だけだから動かないで、ね？」

左腕、むぎゅーっ

「往生際が悪いぞー、観念しろー」

脚をからめらて、背中から抱きつかれる

「ふふふ、もうちょっとだからね～」

か、顔が近いー、、前髪を弄ばないでー

無理です動けません。
一秒ごとに全身の力が抜けていく、反比例して顔の赤さは増していく。

うぅ～、密着しすぎー、、気持ちが良すぎる・・・

「あれれ～、もしかして織斑君照れてるのぉ～？」
「ほんとだー、顔赤いよ～」

きゃっきゃうふふと笑う僕を拘束する女の子たち

「ねえ、ここ触ったらどうなるの～？」
ペタッ
「ひゃっ！」
「女の子みたいな声出たー！」

うぅ、、お尻触られた、しかも生で、パンツの中に手を、、、せ、セクハラで訴える

「あははーおもしろーい」

もう無理ぽ、、ここぞとばかりに僕のいろいろな部分を触ってくる彼女達、、その度に奇声を発する僕、、頭の中が白く、段々何も考えられなくなって、、理性という理性が溶かされていくー

「こら一年、織斑で遊びすぎだ」

ぺしっぺしっぺしっ、僕にとりまく女の子達全員を叩いて、僕をそ

の拘束から解放してくれた。

ゆ、勇者様・・・！

「ほら、早くいくよ」

ぱしっと手をとられた、ごく自然な動作でさもそれが当然であるかのように

「むー、もっと遊びたかったのにー」

「続きはお風呂でしようよ」

「うっひょう！リアル男の娘最高っ！」

「ぐへへへー、うへへへへへへへへへへー」

走った、僕たちは走った。

隊長と呼ばれた人に手を取られて、口々に不満を漏らした1年生たちを脇に。

僕は走った、どこに向かってるのか、これからどうなるのかとか忘れちゃったけど、僕の手の先に繋がっているその背中を見ているだけで、なぜだかとても安心した。

◆◇◆◇◆◇◆◇

って、何も考えず走り抜いた結果が

「今日織斑君入るんだって～」
「あれ本当だったの？私、水着持ってきてないよ」
「ええっ！？あんたバカ？！今だって向こう側にいるんだよっ！！」
「・・向こう側ってその謎にカーテンで仕切られてるところ？」
「そうだよ！そこは織斑君のために特設された男子用着替えスペースだよ！っま織斑君以外の男が入ったら殺すけどね！」

さらっと怖いこと言わないでください

「それは殺すけど・・・織斑君なんかいるわけがな」

てくてく、カーテンチラッ
目と目が絡み合うっ！

「え～っと、どうも」
ペコリ、お辞儀をしておいた。

「・・・いたあああああああああああああああああーーーーーっ！！！」

「ね、本当だったでしょ」
「なななな、なんなんだーー！？あの可愛い生物はーーー！？男であるはずかないいいいいいいい！！！」
「スク水着るって聞いてるよ」
「あばばばばばば！？！スクール水着ぎぎぎぎぎぎぎ！？？」
「はい、あんたの分も水着用意しといたよ、感謝してよね」
「ありがとうっ！！一緒に1年間過ごしたけど、本気で感謝したの

はこれが初めてだっ！！」

と、ご丁寧に彼女達が説明してくれた通り僕は現在女子風呂更衣室にいる。

そして手元には、おふろセットが一式。”じゃあこれ、早く着替えて入ってね”と隊長から手渡されたものだ。

洗面器の中に、スクール水着とバスタオルとスポンジと替えのパジャマに下着、・・・全部そろってる。

ん、揃ってないかも。シャンプーとかボディソープが入ってない、、女子風呂には備え付けの物があるのかな？

まあいいや、早く着替えちゃおう――――

――――違う違う、何を真面目に入浴することを考えているのか。

いくら水着を着用しているかといって、若い男女が一緒にお風呂とかありえないから。

さっき話してた彼女達には悪いけど、ここから脱出する方法を考えよう。

「ふ～む」

更衣室の出入り口には見張りが数人。女子着替えスペースと男子着替えスペースを仕切るカーテンにも見張りがそれぞれ一人。買収し

て通してもらうという手もあるけど、、無理かな。だって見張りの一人に隊長さんがいるし・・・

となるとやはり――――

脱出手順

1　紙に”あばよ”って書いて洗面器の上に置いておく
2　掃除用具入れに隠れる、そのまま待機
3　あれ～？織斑君遅いなーっとなる
4　誰かが『織斑君が逃げ出したぞー！探せ探せーー！』
5　混乱に乗じて逃げる

ふっふっふ！違うのだよ！！

このような常識的発想はあ・り・え・な・いのだよ！！

隠れてくださいと言わんばかりの部屋の隅にある掃除用具庫、、これは罠だ・・・

おおよそ、この手順で逃げようとした僕を捕まえ、『逃げようとした罰』と称して嫌がる僕を無理やりスクール水着に着替えさせるということがしたかったのだろう。

っが！！しかし！！

ふ、ふはははははははははは！！！相手を見誤ったな隊長さん！！

この私がこの程度の監視、脱出できないとでも思っていたのかな・・

・？

真脱出手順

１　スクール水着に着替える
２　ちょっと時間を空ける
３　女子着替えスペースに侵入、空気に溶け込む
４　「あれ～、織斑君がいないよ～」って僕が言う
５　”探せ！探せーーーーっ！！”となる
６　混乱に生じて逃げる

完璧だ！！非の打ちどころのない作戦だ！！

入学して一週間、まだ誰が誰かもわからない状況で僕という女顔が紛れ込んでも、、、それは女の子でしかないのさ・・・

では作戦を実行する！！

１　～スクール水着に着替える～

え、えっと、、これ着れるのかな・・・？

手に持って広げてみる。

触ってみた感じは想像通りの感触なのだけど、、胸の部分がちょっと厚地で出来てる、、やっぱり女の子が着るために作られてるんだよね・・・その、胸のパッドの部分が触ってるだけで、、すごく気持ちいい、、こんなもの本当に胸に当てたら、、悶絶しちゃいそう・・違う違う違う！！！僕にそんな趣味はないっ！！女装家の人が女

装する心理が少し解っただけである!!

「よ、よし」

とりあえず水着姿にならないことには作戦は実行できない。

・・・・悶絶しながら僕はスク水を着用した。

2　～ちょっと時間を空ける～

「むふふ」

ふふふ、胸の辺りがすごく幸せ。

この胸の感触を上手く伝えることは出来ないけれど、、『包まれている』というかんじ。例えるならば、真冬の夜、すぐさっきまで誰かが入っていたベッドにくるまった瞬間の気持ちよさ。それがこの胸パッドから伝わるのだ。いや、さっきまで誰かがこの水着を着用していたという意味ではない、、そう信じたい

「ふへへ」

顔のにやにやが止まらない。

む、胸揉んでみたらどうなるのかな?ちょ、ちょっとくらいならいいよね、、うん問題ないよ、だって自分の胸だし、スクール水着着る機会なんて滅多にないし、、じゃ、じゃあ早速、無い胸を揉んでみようかな・・・

もみもみ

「ふみゅ」

やばいいいい！！きき気持ちが良すぎるううぅう！！まず手が幸せ、広げた状態では味わえない胸パッドの感触、着用して揉んで初めてわかるこの感触、そして何より、むむむ胸がゾクゾクする、、胸パッドと僕の、、あ、アレが触れ合う度にひりひりと、、ま、まずい、手が止まんない

「、や、あっ、、っく、、だめっ」

いや、、へ、変な声が出てる、、おかしい、こんなの僕じゃ

「あぐっ、、はうっ、、、いやっ、、あっ、ひゃっ」

お、おかしいよ、、だめなの、に、、

それでも手は止まらない、腕から先が別の生物に乗り移られたかのように

「いやっ、あぐっ、、あっ、や、はうっ、、だめぇ」

あたまの中が白くなって、、な、なにもかんがえられないよぉ

腰がガクガクと震える、立っていることもままならない

「あっ、だめっ、、なんか、くりゅ、、あっついよぉ、、」

やだよ、、こんなの僕じゃないよぉ、、止まってよ、、、

ずるずると壁にもたれてゆく、、みっともなくお尻をついた、

「いやっ、、いっちゃうっ、、だめっ、あっついのがくりゅっ！あっ！！」

だめ！それ以上は、、本当に、いやっ、、なんかくる、、！！

その時一際大きく僕の腰が震え・・・・たりはしません。

「ふぅ～む、弾君の持ってたやつならこんなかんじで行ける予定なんだけどな～」

どれだけ気持ちを作っても、上手いこと行かないもんだねー

何にも感じないや・・・

よし、そろそろ良い時間。

3　～女子着替えスペースに侵入、空気に溶け込む～

ふむ、ここが一番の正念場である。

女子着替えスペースへの道は二つ、僕が入ってきた方の入り口付近

のカーテンと、お風呂に行くためのカーテン。いずれもロッカーと壁を布で繋いでいるだけだ。

だから僕が向こう側に行くにはこのどちらかを通らなければならないのだけれど、今回は前者から侵入し、後者のカーテンから男子更衣スペースを覗くということで行く。そのどちらにも見張りさんはいるのだけれど。

一番怖いのは、このカーテンを開けた瞬間に見つかってしまうということ。慎重に人の気配をうかがわなければ・・・

卓越した武人は見えなくても周囲にいる人の気配がわかるという。

やってみるか

っは！！！気配察知っ！！！！！！

目を閉じ、耳を閉じ、口を閉じ、鼻を閉じ、動作を閉じ、あらゆる感覚を研ぎ澄ませる――――！！！

「ややっ！私の織斑君センサーが異常な反応を示している！」

「ど、どうしたんだ急に？」

「ふーむ、どうやら織斑君が私に交信を求めているようだ」

「はいはい、言ってろー」

「本当なんだよっ！？」

・・・逆に察知されてしまった。

大体、僕は武人じゃないから気配察知なんて出来ないし。

直接見ればいいよねー。

よしっ！まずはカーテンの見張りさんを籠絡しよう！

カーテンの隙間から手を伸ばし、その見張りさんの服の裾をちょいちょいと引っ張る。

「？どうしたの織斑君」

「え、えと、ちょっと入ってもらってもいいですか？」

服の裾はまだ放さない

「ゴメンね、隊長から何があっても」

「ちょ、ちょっとだけでいいですからっ、お願いします」

空いた方の手で見張りさんの手首を掴む。

「で、でも」

「大丈夫です、僕もう、す、スクール水着着てますから」

そこで一気に引き込む！

「ひゃっ」

二人して体制を崩す。ちょっとよろけてカーテンの内側へ連れ込むことが出来た。

「ご、ごめんなさい、大丈夫ですか」

「うん、平気だｙ」

こっちを見たその見張りさんは、パチパチと目を閉じたり開けたりした。

一通りのまばたきを終えて今度を下から上にじっくりと視線を動かして、舐め回すように僕を視線でなぞっていく。次は上から下に、首を上下させて、、こういうのを視姦というのか、ちょっと恥ずかしい

「そ、そんなにジロジロ見ないでください・・・」

「ふえぇっ!?ごごごご、ごめん」

慌てて、目を逸らす見張りさん。こういうのって普通、逆だよね。

「えと、その、、似合ってますか?」

「へ?」

心底ポカンとした顔で再び向き直る。

「うぅ、、ごめんなさい変なコト聞いて、僕こんなカッコしたことないので、、おかしくないか不安で・・」

嘘はついてないよ、こんな恰好したことないし、おかしくないか不安だし。

見張りさん、、確かこの人の名前は高橋美樹だったはず。高橋さんはまた目をぱちぱちさせて、手で握りこぶしを作りぶんぶんと振り回しながら答えてくれた。

「全然っ!!全然おかしくないよ!!すごく似合ってるし可愛いよっ!!」

「ほ、ホントですかっ!」

「うん!だから早くお風呂行っといで!」

ここからが勝負だっ!いかに自然に抱きつくか!

ちょっとだけモジモジして――

「おお織斑君!?」

――一気に抱きつく

「あ、ありがとうございます、高橋さん」

「う、ううん!!全然かまわないよっ!それよりどうして抱きつかれてるのk」

「あの、、美樹お姉ちゃんって呼んでもいいですか?」

「え、えええ?!」

「すすすみません!また変なこと言っちゃって、、でも、その」

「えええーっと」

「だ、ダメ?美樹お姉ちゃん?」

秘儀！うるうる上目使いっ！！蘭ちゃんから教わった！！加えて大好きホールド下でのこの威力は！！

「ふ、ふふふふ美樹お姉ちゃんか・・・ふふふ」

・・・堕ちたな

「美樹お姉ちゃんと一緒にお風呂入りたいな」

もうひと押しいっときましょう。

「どどど、どうして？」

「その、、まだ知らない人達ばっかりで、怖くて、、」

「うんわかった！お姉ちゃんが一緒に入ってあげる！」

ぎゅっと向こうからも抱きしめてくれた。

「ありがとうお姉ちゃん！」

「と、当然のことよっ！」

「それとねもう一つお願いがあるの」

こっちが本命なのだよ。

「なになに？」

「うんとね、そこの掃除用具庫に入っててほしいなと思って」

「え、え、それはちょっと」

「お願い美樹お姉ちゃん！！聞いてくれたらお姉ちゃんの背中流してあげるからっ！！」

ぐりぐりと顔を高橋さんの胸にうずめた後のうるうる上目使い。

「わ、わかった、いいよ」

「やった！美樹お姉ちゃん大好き！！」

ぎゅーっと腕に力を込める

「、、大好き、私、大好き、、えへへ」

「早く、早く！こっち来て！」

腕を引いて掃除用具庫まで移動する。

がちゃ、そして開ける。

ふむ、やはり僕が入ることを想定したのか、すごく綺麗な掃除用具庫だ。ほこり一つないや。

「さあ入って美樹お姉ちゃん！」

「よ、よっこいしょっと、、これでいい？」

「うんＯＫ、じゃあちょっとだけ待ってて美樹お姉ちゃん。すぐに

迎えに来るから」

「う、うん！待ってるから！ゆっくり行っておいで！」

ちょろいね、、美樹お姉ちゃん・・・

そーっと、出来るだけ音をたてないように扉を閉めた。

・・・ちょっとだけ罪悪感

し、しかし！これで見張りは消えた！気付かれない内に侵入するのだっ！！

４　～「あれ～、織斑君がいないよ～」って僕が言う～

侵入に成功した。

出来るだけ下を向いて、ロッカー伝いにもう一つのカーテンへ近づく。

ふむ、やはりみんなこっちを不審に思わない。今だって、僕のすぐ横には人がいるのだけれど、声をかけられることもなければ、顔をジロジロと見れることもない。喜ぶべきか、悲しむべきか、女っぽいと言われて悪い気はしないけど、ここまでくると悲しいというより哀しい。

驚くほどスムーズに事が進んでしまっている。

さて、もう少しで脱出か・・・

「ねえ見張りさ～ん、そっちに織斑君がいるんでしょ～」

普段より高い声を出して最後の砦に取り掛かる。腕を組んで生意気な一年生を演出。

「うん、今着替え中」

やはり気付いていない。おそらく相手は態度の悪い一年坊主だとしか思っていないだろう。

「ホントにいるの？嘘なんじゃない？」

「・・・」

見張りさんは答えない。むふふ、少しでもイラつかせて正常な思考が取れなくする作戦さ。

「ふんっ」

その隙をついて素早くカーテンに手をかける。制止の声を勿論無視しバサアッと勢いよくカーテンを開けた、だってそこに織斑一夏はいないのだから。

「あれ～、織斑君がいないよ～」

5～”探せ！探せーーーーっ！！”となる～

「っな！？そんな？！」

案の定、慌てる見張りさん。

「こちらBカーテン見張り！織斑一夏の姿が見受けられません！！」

トランシーバー持ってたんですか

『落ち着け、掃除用具庫を見たか？』

「っは！そうでした！」

『全く、そのために掃除しただろうに・・・』

「す、すみませんっ！」

『逃げ出そうとした罰と称して”嫌がる織斑君を無理やり”だろ』

「そ、そうでした！すぐに全員集めます！」

本当によかった、掃除用具庫に入らなくて。

ゾロゾロと足音が聞こえる。

ドタドタとその足音は掃除用具庫を囲む。

こ、怖い、、約5人の上級生が掃除用具庫の周りでニヤニヤしてる

光景・・・

面白そうだからこのまま見てよう

「あれれ～、おっかしいぞ～、織斑君が消えちゃったぞ～」
わ、わざとらしい！某名探偵張りの『あれれ～』！
「この掃除用具庫の中に入ってたりして～」
びくっ！と掃除用具庫が震えた。一応、意識あるのね美樹お姉ちゃん
「あー、今動いたー」
「まったく素直じゃないな～織斑君はー」
「怖くないからねー、お姉ちゃんたちが着替え手伝ってあげますからねー」
「開けようよっ！早く開けちゃおうよっ！！」

ガチャ！

「「「「「　！？　」」」」」

「美樹っ！！！！？？？」
「どうしてこんな所に！？」
「織斑君はっ？！織斑君は！！？？」
「えへへ、美樹お姉ちゃんって言われちゃった／／／」
「っな！？あなた買収されたのね！！」
「隊長に連絡を！！」
「買収だなんて人聞きの悪い、、私はただ織斑君に、、えへへ」
「何をされたの！？言って！お願い言って！！」
「こちら掃除用具庫前！！織斑一夏が逃走しました！」
『っち！このアンぽんタンどもが！！』
「えっとね、織斑君に抱きつかれて、、美樹お姉ちゃん大好きって、、えへへへへ」
「何それ羨ましいっ！！」
『すぐに出入り口を封鎖しろっ！』

封鎖する前に脱出してくれるわっ！ダッシュ！

６　～混乱に乗じてだっしゅｔ「織斑く～ん、美樹お姉ちゃんと一緒にお風呂は～いろっ！」

「え？」

「え、じゃないよー、なに逃げようとしてるのさ～」

「わ、私、織斑君じゃないですー」↑最後のあがき

「はいはいわかったわかった、行くよ」

「ちょちょちょちょっと待ってください高橋さんっ！」

「高橋さんじゃない、美樹お姉ちゃん」

「だだだ抱きつくのはやめてもらえませんかっ！」

「美樹お姉ちゃんって言うならやめてあげる」

「うぅ、、美樹お姉ちゃん、やめて・・」

「もしかしてその子が織斑君なの？」

「うん、そだよー」

「ええ！？さっきの生意気な子っ！？可愛すぎる！！！！！！」

「男じゃない！！男じゃないいいいいい！！」

「美樹ひっつきすぎー！！織斑君後で私もお姉ちゃんって呼んでね！体洗ってあげるからっ！」

「高橋さ～ん、抱きつきが解除されてないですー」

「っさお風呂へＧＯ！ＧＯ！」

「い、いつの間に水着姿に！？」

「先輩たちばっかりずるいですよ～、後で私たちにも」

作・戦・失・敗

失敗要因：高橋さんをナメ過ぎた

◆◇◆◇◆◇◆

ぽちゃーん、天井の雫が大浴場に木霊する。

もうここには僕を含め数名しかいない。

今こうやって湯船に浸かる僕は一体何時間お風呂に入っていたのだろうか？

最初は美樹お姉ちゃ、、高橋さん一行に拉致されて五人がかりで体と髪洗われて、出て行こうと思ったら湯船につれていかれて、そこで全員をお姉ちゃんって呼んで、ようやく上がれると思ったら今度は一年生グループに誘拐されて体洗われて、湯船浸かって、お姉ちゃんだのご主人様だの呼ばされて、、本当にお風呂から上がって更衣室で体拭いてる途中でまた拉致されて・・・

何回、髪洗っただろうか。
何回、体洗っただろうか。
何回、セクハラされただろうか。

四回目に遭遇したグループでは体洗われてる中ずっと胸揉まれてたなー、よく達しなかったよね僕。

『体洗ってあげるよー！』
『うぅ～、もう四回目ですよー』
『大丈夫だよ！私達の洗い方は一風変わってるから！』
『い、一風？』

『うん！洗ってる間ずっと胸揉んどいてあげるねっ』
『ええ！？ダメですよっ！そんな！ひゃあっ！』
もみもみ揉まれ揉まれ
『どうしたのー？変な声でたよー』
『っく、っひゃ、、だ、だめぇ、はぅっ、、うぐっ、、』
『体は正直だよー、ほらほらー』
もみもみもみもみ揉まれ揉まれ
『、、ちがっ、、あっ、、っく、あぅ、、はくっ、、いやっ』
『洗い終わるまでの辛抱だぞ、耐えられるかなー？』
『ひゃっ、、うぐ、それ、以上は、、はぐっ、、や、やめてぇ』
『ふーん”やめて”？先輩にタメ口使っちゃうんだー、へー』
もみもみもみもみもみもみぐにぐにもみもみ
『や、やめてくらひゃ、い、はぐうっ、、らめ、れひゅ、だめ、、
あっ、くぅ』

ぶっちゃけ、このおかげでその後に出会うグループの大概のセクハラはへのへのかっぱになったわけですが・・・脇を舐めてくる変態がいた気がするけど、思い出さないでおこう。

不安になってきたけど僕は男だよね？ちゃんと生えてるよね？胸おっきくなってないよね？

「よーっす、織斑」

「あ、隊長さん」

のそのそと僕の横に現れたのは隊長さん。曰く、”織斑君がずっと入ってるのに私が入ってないわけにはいかない”とのことで。

「疲れたって顔してるな」

「ホントですよ、まったく何時間お風呂入ってるんですか僕は」

ちなみにもうすぐお風呂閉まります。

「のぼせた？」

「のぼせたのが一周回ってもう何も感じませんよ、今僕がスク水姿だっていうのにも違和感を感じれないんですから」

「あー、すごく似合ってるよなその水着」

「あ、ありがとうございますぅー」

そこで会話が途切れてしまった。

何かいい話題はないだろうかと考えているけど、出てこない。

その空白を埋めるかのようにぽたぽたと落ちる天井の雫が湯船を揺していた。

目が合うと気まずいから横は向けないし、、困ったものだ、どうしよう

「今日はすまなかった」

その心配は杞憂だったのか。意を決したかのように隊長さんは話し出す。

「ふえ？」

「織斑君を女子風呂に入れようって企んだのは私なんだ・・・」

「私、みんなが笑ってり、楽しんでたりするのがすごく好きでさ」

「いっつもみんなを楽しませる企画とか考えてて、、それで思いついて」

「でも、冷静に考えると、、織斑君にとったらいい迷惑だよな」

「準備の段階からみんなすごく協力してくれて、、主に織斑先生をどうやって止めるかだったんだが」

「そしたら、今更止めるとは言い難くて」

「みんなを笑顔にしたいっていうのに、織斑のことを何も考えてなかった。ずごい矛盾だ」

雫のようにぽたぽたと語る隊長さん。盗み見た横顔はとても哀しそうな顔をしていた。

「本当にゴメン、、織斑」

「ええ、反省してください、隊長さん」

ここで『僕も楽しめたからいいですよ』とか返すのは違うと思った。事実、隊長さんのしでかした男を無理やり女子風呂に入れるという行為は許されたものではない。その気になれば僕は裁判だって起こせる。

「ごめんなさい、、、私は、最低だ、、、」

でも、それも違う。

「それは違います、隊長さんは最低じゃありません」

「へ？」

「目的はどうであれ、隊長さんのしたことは偉大です。お風呂に入る人は全員水着でしたし、前を触ってくる人は誰もいませんでした。それって全部隊長さんが指示したからですよね」

「あ、ああ」

「あの少ない時間で完璧な情報伝達が出来るっというのはすごいことですよ。よほどの人望がない限り出来ません」

「そう、、なのか？」

「何より織斑先生の進軍を止めたんだから、そんなこと出来る人世界に数えるくらいです、、履歴書に書けるレベルですよ」

「・・・」

「だから、隊長さんは最低ではないです、誇ってもいいんです、私が織斑千冬の進軍を止め織斑一夏を女風呂に入れたんだーって。」

「そ、そう！そうだよなっ！私すごいよな！！」

「反省文頑張ってください」

「・・・・はい」

それはただ単に気付いていなかっただけなのか、それとも本当に止まっていたのか、、雫は再びぽたぽたと湯船を揺らし始めた。

「やだなー、反省文」

「反省文で済んだらいいですけどね」

「言うなーっ！言うんじゃないー！」

どうなるんだろうか？姉さんからの実刑は僕がくい止めるとして、、学校側の対処は・・・？わからん

そ・ん・な・こ・と・よ・り！

「隊長さんはジャグラーになるべきです」

「へ？ジャグラー？」

「そうですジャグラーです」

「ジャグリングかぁ？今日織斑のを見たが私はあまり器用じゃないしなー、、興味は湧くのだが・・・」

「ジャグリングっていうのは無条件に人を寄せ付けることが出来るんですよ、距離的な意味もありますけど、、、遠目からちらっと見ただけでも、その人は誰かに”今日大道芸人の人見たよー”って話すかもしれませんよね」

「ふんふん」

「誰かと違うことをするって、誰かにとって必ずプラスになると思うんです。その人にとっての世界が広がるじゃないですか、”世の中にはああいう人もいるんだな”って。」

「・・・」

「存在は知られていますが、ジャグリングの競技人口は少ないですし、きっと隊長さんみたいな楽しい人がすればより多くの人が世界を広げられると思います。勿論、自分の前で見たこともないような芸をされるのは楽しいですし、笑顔にもなります、、どうですか？」

「、、やってみようかな」

それは僕にジャグリングを教えてくれた人の受け売りだった。その人は僕なんかよりもっと上手く話してジャグリングの良さを説いてくれたけど、、、、今は僕のこんな下手くそな言葉で隊長さんがやる気になってくれったていうのがすごく嬉しい。

「ふっふっふー、じゃあ時間が有る時寮の裏に来てくださいっ！僕、大概はそこにいますから！」

「うん、今度お邪魔させてもらおう」

何故だかとても幸せな気分

ちらっと隊長さんの方を見る、、それは相手も同じことを考えていたようで

「「ふふっ」」

目が合っても気まずくなんてならなかった。

「織斑？」

にょきっと目の前に隊長さんの顔が現れる。

、、今まで、意識してなかったけど、、隊長さんは水着姿、、っく、ちょっと恥ずかしくなってきた

「い、いちかって呼んでくれていいですよ」

顔の赤みをごまかすようにそう言った。

「うん！じゃあ私のことも本名で」

「いえ、隊長さんは隊長さんです」

「そ、そんなっ！？」

また二人で笑い合った――――

後日談っ！

「隊長さーん！」

「んー、今行くー」

3年生の教室の前、僕はいつもの名前を呼んだ。小包を2つ抱えて。

「ああ、今日も織斑君の手作りお弁当は隊長のお腹へおさまってしまう」

「悲しいのう、悲しいのう・・・」

「何故じゃー！何故なんじゃー！」

これまたいつものやり取りを聞いて、小走りの隊長さんを迎える。

「いっつも悪いな一夏」

「もう、謝らないでくださいよ」

「ごめんごめん」

横に並んで目当ての場所へと歩き出す、その距離はす、すごく近いです

「なんだよー？また手握るだけで照れてるのか～？」

「うぅ～」

言われると余計に恥ずかしいのに、、手がすごく温かい、、えへへ

でも、こうやって三年の教室へ向かう度に考えてしまうことがある。

「あ、あのやっぱり迷惑じゃないですか？三年生は忙しい時期ですから」

高校生にとって2歳という歳の差は大きいのだ。

「はあ、まったくお前は」

隊長さんは立ち止まった。

そしたら次の瞬間にはすごく顔が近くにあって

「！？」

「私たちはもう、こういう関係だろ」

唇に触れた確かな感触と共に、再び歩き出した。

「はぅ」

えへへー、、学校内でキスされちゃったー、えへへ

「っあ、わかった。時々、一夏がそれ言ってくるのってキスされたいからか？」

「ちちちち違いますよ！」

「ん？私に嘘ついてもいいの？」

「・・・はい、少なからずそういう気持ちも含まれております」

「ふふーむ、可愛いやつめ」

そこから少しだけ歩くと目的地に着いた。

僕たちのいつもの場所は屋上なのだ。人が少ないし、気持ちいいし。

「安心しろ一夏、お前はずっと私の物だよ」

扉を開けて、空の開放感を感じると同時に僕は隊長さん包まれていた。

後ろから抱きしめられ、、温かくて、、安心する

「・・・も、もう一回キスしてほしいです」

「はいはい」

首を横に、目を閉じた。

隊長さんの香りが一瞬だけ濃くなって、また一瞬で元に戻る。

残るのはやっぱり唇の切なさだけ、、それがたまらなく気持ちいいのだ。

「ふふっ」

「満足したか？」

「えへへ～、隊長さん大好き～」

僕も隊長さんの方を向いて、ごろごろと抱き合う、、すごくいい匂いがする、、ふふふ柔らかいし・・えへへ、、

「この甘えん坊さんめ～」

「はぅ！そ、それは言わないお約束でしょ～っ！」

fin

Ｉｆ１３話　「女子風呂でもみもみされちゃう織斑君はあはあ」（後書き）

まさかのオリキャラルート
隊長さんの容姿は想像に任せｍス

次回本命のセｓリアさんるーと！！

Ｉｆ　１６話　セシリア「一夏さんは我が軍門に下りましたわ」（前書き）

この話は番外編です、本編には影響は出ません

Ｉｆ　１６話　セシリア「一夏さんは我が軍門に下りましたわ」

セシリアさんが一夏君を襲うところから始まります

「ではまずは、織斑一夏を手に入れることから始めますわ」

「ふぇ？」

始めにさっきの右手首を掴んだ。

がばっと邪魔な掛布団を蹴り上げ

体を起こすと同時に、目をぱちぱちさせている無防備な体にまたがる。

最後に余った手で――――

「ちょいちょいちょい！セシリア？！」

――その左手をベッドに押さえつけた

「何ですか？一夏さん？」

ニコニコとした笑顔で答えた。

「こ、こここれは一体どういうことかな？！」

体は完全に麻痺しているのか押さえつけた両腕からはなんの抵抗の力もない。

もっと暴れるかと思ったら、、意外とすんなり行ってしまいそう。

抵抗する一夏さんをじんわりいたぶりたかったのに・・・

「どういうことって説明しなければわかりませんか？」

「わわわわわ、わかるわけないでしょっ！？」

真っ赤に染まった一夏さんの顔、女であると錯覚するほど可愛らしい。

征服欲に沸きたてられる、両手の拘束はもう必要ない。

その顔に白い手を這わす。

「っひゃ！」

頬っぺたから、あごさき、首筋を這って、肩口を撫でる。

ぎゅっと閉ざされた目はまだ開きそうにない。

今度は逆に、肩口から、首筋、頬っぺたへと手を移動させる。

そして動かないようにと両手でその顔を固定した。

「せ、セシリア・・？」

「わからないというなら教えて差し上げますわ」

ゆっくりと馬乗りになった上半身を下げてゆく。

――彼の全てを奪うために

覚悟などとっくに決まっている。

織斑千冬に勝てると言い切ったその日から心は惹かれていた

ブリュンヒルデを前にして臆さない彼に強さを感じた

何度斬られても立ち上がった彼は大事なことを気付かせてくれた

弱々しく語った彼はあまりにも危うく、脆かった。

そして、背中を合わせたベッドで

わたくしがこの背中を支えると――――――

鼻と鼻がすれあう距離、たがいの息遣いをも感じ取れるこの距離で

抵抗と言う抵抗もなく近づけたこの間合いで

最後に一度、彼の名前を呼んだ

「一夏さん」

「セシ・・・リア、、、」

控えめに開いたその瞳は、うるうると揺れていた。

しばらくそのまま見つめ合って

ようやく彼は目を閉じた。

それは許可の合図。

考える間もなく、わたくしは残り数センチの距離を詰める。

こっちも目を閉じて、初めて味わう感触を迎えに

、、、と、待てよ。

脳の回路の一筋に青い光が灯るような感覚。

見えるのは、きぃっと目を閉じて、何かに怯えているような、それでいて何かを待っているような顔。細い四肢は金縛りにでもあっているかのようだ。

その可愛い顔を、その細い手首を、そのまま食べるなんてもったいない。

動かないそれはわたくしのモノ

泣いても叫んでも誰も来ない、大体、泣きも叫びもさせない。

そこには絶対的な力の差がある

この嗜虐心に満足がいくまで

生かすか殺すかもわたくしの自由、嬲るのも躾けるのもわたくしの権利

ゾクゾクと胸が歪み、征服欲に心が暴れだす

もう、わたくししか見えないくらいに、、たっぷり調教してさしあげますわ・・・

彼の首輪を握った快感が、にやりと口角を吊り上げた。

わたくしは――――

1　首筋かぷかぷ
2　まずは手を縛りましょう
3　「ふ～ん、キスされたいんですの？」

注）3、の調教は少しハードな内容です。泣きそうになる一夏君や鬼のようなセシリアさんをみたくない人は読まない方がいいです。

Side change

1

「ひゃんっ！」

変な声と共に、全身がその異物を排除しようとした。

堕ちていた脳から筋肉までのレール急造される。

久しぶりに宿ったこの力は体を翻そうと――

「んっ」

ほんのちょっとだけ力を入れられた。

それだけで、もう体は動かない。音も立てずに急造のレールが崩壊する。

かぷかぷと甘く噛み付くのは吸血鬼のそれ
まる血を吸い取るかのように、彼女は僕の力を吸収していく

「はむ、、ん、ちゅ、、」

「ひゃっ、、く、、あ、、」

わけもわからず声だけが漏れ出た。

どういう状況なのか?、、目を開いた先にセシリアの顔は見えない、端っこに金色がちらちら映る、、ただそんな曖昧な視覚より、はっきりとこの状況を理解させてくれるのが

「ちゅ、、はむ、、ん、、ちゅ」

この、いやらしい音、、聴覚が、、セシリアにどこをどうされているのか、伝えてくれる

「いやぁ、、くび、、かま、ないでぇ」

その柔らかいキバが刺さるたびに体がビクビク反応する。でもその震えすらも吸血鬼は許してくれなかった

隠すように膝を曲げるけど、根元から足を絡め捕られ伸ばされる

助けを求めるように宙に浮いた腕は、即座に取り押さえられる

「、、ちゅ、」

吸血はまだ終わらない、捕食し終えて骨となった獲物を惜しむかのようにしゃぶられ、犯される

「や、、やめぇ、、あ、」

「、、ちゅ、、ちゅぱ、、ん、、」

それでも声は出た。『やめて』と自分が発したとは思えない声で

「、ちゅぴ、、ちゅ、、はむ、、ちゅぱ、、」

頭がとろける、、、ゾクゾクして、、
体が彼女に支配されてる、、体も、、心も、、全部セシリアのものにされてしまう
抵抗する力が湧かない、、抵抗、、しようとも、思えない
「、だめぇ、、ひゃん、、やだ、、」
、、だんだん、しろくなっていく、頭の中、、もう、何も考えられない、
自分の、声すらもが、興奮の材料へと、変わってしまう
、溶けていく、、今まで保ってきた、、理性も、、、常識も、、
全部、吸血鬼に、、吸い取られていく、、
「、、もう、、だめぇ、、はぐっ、、うぅ、、やだ、、」
懇願する声、、抵抗ししようとも思わない癖に、もう彼女しか見えない癖に、、セシリアの■■になりたいと思ってくる癖に――――
まだ、口だけは嘘を吐く

「可愛いですわ一夏さん」

不意に吸血が終了した

「はぁはぁ、、？」

耳元が彼女の吐息を感じる、、囁かれているのだ

「もっと気持ちいいこと、、してさしあげてもよろしくてよ」

それは淫魔の誘い。

乗ってしまえばもう帰ってこれないと、引き返すなら今だと、最後の理性が、、忠告してくれた

引き返せるハズなんてないのに

「ふふっ」

妖艶に笑った彼女は顔を正面に持ってきて

「やめっ、、うご、かないでっ、、あ、、っく、」

いやらしく腰を動かし始めた

、、魅せつけるかのように体をこすりつけてくる

全身が彼女に擦れる、、

壊れそうなくらい激しくなる胸の動悸も、隠していた荒い吐息も、すべてセシリアにばれてしまう

「、お願い、、止まって、、もう、むり、、だから」

それでも彼女は動く、、腰を振り続ける

こちらのことを見透かして楽しんでいるのか、そのスピードを上げていく

「ほ〜ら、ちゃんとお願いしてみなさい」

堕ちてしまう、、眼は彼女の体に魅了されてる、、、耳は吸血鬼の声を聴きたがっている、、体はセシリアに触れられることを、、望んでる、、

「気持ちいいこととされたいって言ってごらんなさい」

とろけきった理性はもう――――

「　　」

「ふふ～ん、素直でよろしいですこと、、でも、もう少しお預け、、簡単に逝かせてしまっては、躾がなりませんもの」

「　　」

「そうやって無様にねだっていなさい、、わたくしの気が変わるかもしれませんわ」

――――彼女の下僕になりたいと言っていた。

2　「ふぇ？」

予想外の部位で、予想外の質感だった。

唇じゃなくて、手首、、柔らかくなくて、堅い金属質。

、、キスじゃなくて、、これは

「あら、抵抗しませんの？」

手錠!?

「待って!やめて!おねがっはむ、、」

「ちゅ、、ちゅぴ、、れろ、ちゅる、、れろ、、」

「ん、、ちゅ、、、、っ、はあ、はあ」

何が起こったのか理解出来なかった、口が開かなくなって、熱かった、、、

「もう一回」

「へ？」

「はむ、、ちゅ、、ん、、ちゅぱ、ちゅ、、れろ、、ちゅる」

今度は解った
キスされて舌を絡め取られている、、控えめな僕の舌をセシリアが
強引に連れ出そうとする、、
熱い、そして甘い、味なんてしないはずなのにとことん甘い、、
わざとやっているのか、、いやらしい音が更に刺激を増幅させる、、
舌だけではない、もちろん唇も、鼻も、繋がっている、、彼女の息
がくすぐったい、それは相手も思っていることだろうか、でもそれ
すら気持ちいい、、

「ちゅる、、れろ、、っ、、は！はあはあ、、」

セシリアが離れる。名残惜しさを感じると同時に――
――もう腕は動かなくなっていた
がちゃがちゃと手を引こうとするけど、返ってくるのは冷たい金属
感と、ぎしぎしというロープの音。
手首に手錠で、その手錠がベッドの縁にくくりつけられている。
隠すことも、抗うことも出来ないばんざいの態勢で、、固定されて
しまった。
彼女を腰に乗せたままで

「やめてよぉ、、セシリア、、」

「さあて、どうしようかしら」

「いや、、だよ、こんなの」

「その割に、わたくしの唇にはご執心でしたわね」

「、、はぅ」

「頼めば、、もう一度してあげてもよろしくてよ」

手が使えない今、赤く染まる顔を隠すことができなければ、早くなる鼓動のために胸を押さえることも出来ない。

口では『いや』『だめ』などと言っておきながら、、口以外の全部は彼女とキスしたがっている、たった数秒前の発言を覆すのは、、恥ずかしくて、出来ない、、大体、セシリアにキスしたいなんてこと、、言えない、、

さっきのキスで全部奪われてしまったのかもしれない、、もうセシリアしか映らない

僕は赤い顔を更に赤くして、横を向いた。

「ふふっ、まったく一夏さんは・・・」

くいっと片手で顎を捻られる。

そこでは、『しょうがないな』と言わんばかりにセシリアが顔を近づけていた。

すぐに、さっきのとろけるキスの感触を思い出して、、目を閉じた。

、、、が、しかし。待ち焦がれるキスはやってこない。

「ふふーん、拘束完了ですわ」

足首に冷たい金属質が、、、手と違って二本まとめられるのではなく、それぞれ別々にベッドの縁と手錠を掛けられてる。

うぅ〜、騙されたぁ〜

ようやく諦めて目を開ける。

「素直にキスしてと言えばいいものを、、」

動かない、、足も腕も、、引っ張るたびにガシャガシャ、ぎしぎしと嫌な音が返ってくる。

「キスしてもらうのに手も足も関係ありませんわよ〜」

にやにやと笑うセシリア。

今まで築き上げてきた理性、保ち続けてきた常識

――――たった、キス二回で壊されてしまった

「、、キス、してほしいです、、」

3　「っな!?ちがっ」

その内容には僕の目を開けさせる強制力があった。

見開いた目と同時に一気に体を上半身を跳ね起こそうと

「ひゃんっ」

「何が違いますの?女の子みたいに目を閉じて、唇を突き上げて」

馬乗りになっていたセシリアに両手を捕まえられて、跳ね起こそうとした体はそれ以上の力によってねじ伏せられる。

まだ抵抗して力を入れているけど、がっちりと抑えられた手は動きそうにない

「キスをしてほしかったのでしょう？」

「、違うよ、、キスなんて」

勿論嘘、待っていたのは柔らかい唇だし、触れたかった、、でも言われると恥ずかしくて、反抗したくなる。

冷ややかな視線といつの間にかはだけた胸元から目を逸らすようにそっぽを向いた

「ふ～ん、写真だってありますのに」

「えっ」

まぬけな声を出している間に両手は一本になる。抵抗する暇もなく、腕を僕の頭の上に持ってきてセシリアの右手だけで縛られた、、悲しいことかこれが動きそうにない

「ほおら、一夏さんの可愛いキス顔ですわよ～」

「っ！」

セシリアの表示させた情報端末には、、さっきの僕の写真が、、、

セシリアが言った通り、、僕は目を閉じていて、唇を突き出している、、これじゃホントに女の子みたいだ・・・

「わたくしに何を期待してたのかいいなさい」

言いたくない、、

「素直に言えば、、、続き、、してあげてもですよ、」

ほんの一瞬だけ、彼女の顔が耳元にあった。

「、、キスを、、されたかったけど、、」

誑かされたわけじゃないから、、べ、べつに女の子とキスしたいって思うのは当然のこと・・・

「ふん、この　変　態　っ!!」

「えっ」

必死で言い訳を探す頭はそれだけでごちゃごちゃになった。

「とんだ　変　態　ですわね!!一夏さんは!!」

「そ、そんな」

「クラスメイトに触れられているだけで興奮して!!キスされたいだなんて!!　変態　ですわ!!」

「ち、違うよっ!」

僕に馬乗りの彼女、、まるでゴミをみるような目、軽蔑と侮蔑の構成された視線が、ぶすぶすと心に釘を刺していく。

打たれ弱い、今まで他人に変態だなんて一度も言われたことがなかった、、ただ『変態』と言われただけなのに、こんなにも胸が痛い

それでも、、顔を背けているつもりだけど、ちらちらと見てしまう、、、うぅ、どうしてあんなにセシリアの服ははだけているの・・・？

「ねえ、へ～んたいさん、、あなたさっきからどこを見ていますの？」

「み、見てない!」

質問に対する答えになってない、、これじゃ丸わかりだ

「変態、言ってみなさい、、正直に、、、私のどこを見たいのか、、」

「・・・ふん」

答える必要はないよ、、いきなり人を変態呼ばわりして、、意味わかんない。。。

「答えなさい！！変態っ！！！！」

「っひ！」

「あなた変態の分際でわたくしを無視しましたのね！！！」

「ごごごごめんなさいっ！」

「謝って許してもらえるとでも思っていますの！！？」

「うぅ、、」

「言いなさい！！あなたはわたくしの何を見てどんな気持ちになったのか言ってみなさい！！！」

「やめて、、」

さっきみたいに考えて黙っているわけではない、、ただ彼女が恐くて、変態って言われるのが嫌で、、口が開かない

「ふーん、これでも言いませんの」

「・・・」

びくびくと体の内側が震える

「じゃあ無理やり体に聴くしかありませんわね～」

「やめてっ！！それは嫌！！！」

ジャラジャラと持ち出したのは手錠、ロープ、、、どんな早業なのか、、その手錠は既に手首を捕らえられていて、後はカシャンとしてしまうだけの状況だった。

「では早く言いなさい」

答えなかったら閉めるという意味なのか、僕は手錠されかけの状態、、

「、、セシリアの、、、胸を見て、、、興奮していました、、」

うぅ、、また変態って言われる、、嫌だよぉ

どうしてセシリアはこんなことするの・・・？

変態だよ、、女の子に、、、あなたの胸を見て興奮した、、とか言っちゃうなんて。。。

眼の端に熱いものが溜まる。

「よく言えましたわね、、よしよし」

「・・・ふぇ」

予想していた暴言はやってこなかった。

頭をなでなでされて、、優しい瞳で見つめられる。

勿論、手錠もされてない

「少しビックリさせてしまいましたわ、、ごめんなさい」

「え、、うん」

「だから、そんな泣きそうな顔しないでください・・・」

「ご、ごめん」

するりと右手をすくわれた。さっきまで鉛のように重く、動かそうとも思えなかった物が、、こんなにも簡単に浮く。

「服の上からですわよ、、素直になれたご褒美に少しだけ触れさせてあげますわ」

「え?」

どこに?なんて聞かなくても体は理解していた。

「その代わり、わたくしの言うことは絶対に聞くこと」

「わたくしは一夏さんにとって　絶　対　だと認めること」

「もし、言いつけを守れなかったり、、わたくしの命令を無視したりしたら・・・承知しませんわ」

「わかりましたか?」

「う、うん」

夢半分の返事、でも半分でも充分彼女の言い分は聴こえた。

「では、、どうぞ」

腕が運ばれる、まるで重力が存在しないかのように軽く連れて行かれる。セシリアの、む、胸に向かって・・

「ん」

漏れたのはセシリアの声。

触れたのは僕の手。

「気持ちいいですか?一夏さん」

声も出せずにただ顔を赤くして頷く、、気持ちいいなんてレベルじゃない、、、

薄い布を越して伝わる彼女の温かさ、むにゅむにゅとした初めての感触

どんなクッションコーナーを見て回っても、、これには到底たどり着けないだろうと

揉むなんてことは恐れ多くて出来なかった、本当にただ触っているだけ、撫でるだけ、、それだけでお腹がいっぱい。

「わたくしも殿方に触れられるのは初めてですから・・・不思議な気持ちですわ」

それを聞いてさらに控えめになってしまう自分が情けないと思う、、撫でるじゃなくて触るに、触るじゃなくて触れるに、、そのまま時間が過ぎて

「手を放しなさい」

言われるがままに放した、、名残惜しいとかいう気持ちより、、彼女の言うことを聴きたい気持ちの方が強かったのかもしれない。

「よくわたくしの命令を守れましたわね、、よしよし」

「／／／」

僕の髪を撫でながら、セシリア言った。

「はあ、、わたくしどうしても我慢出来ないことがありますの・・・」

「な、なにセシリア？」

「っち！、、、『セシリア』？」

「え」

――その舌打ちでまたガラガラと頭が混乱していく。

「あなたにとってわたくしは絶対的な存在なのですよ、、安々と呼び捨てしていいとでも？」

「す、すみません、、」

「ご主人様と呼びなさい」

「え、、」

「感謝することね、あなたはこのわたくしに使われていますのよ、、あなたのような変態を、、わたくしの胸を触ってトマトみた

いに赤くなる　変　態　を」

「うぅ、、どう、して、」

「まだ言葉遣いが直りませんの！！あなたはもう奴隷ですわ！！わたくしの奴隷となり一生使い続けますわ！！！」

「い、いやぁ、、」

「奴隷、変態奴隷、、」

それが僕の名前であるかのように、刻み込むように僕をそう呼び続ける、、変態と、奴隷だと、、変態奴隷だと、、

「もう、、言わないでよぉ、」

「、、許しを請うぐらいしたらどうですの？」

考える頭はもう持ち合わせていなかった

「、、ゆるして、、てください、、ご主人様・・・」

「あっははははっはっは！！無様ですわねえ！！泣いていますの！！」

「、、ひっぐ、、うぅ、、えぐ、、」

「恥ずかしくありませんの〜？女の子に泣かされて、、みっともなく嗚咽して、、」

「えぐ、、ひぐ、、、うぅ、、、」

咽び泣く、、悲しい、疑問符で頭が埋まる、、何に疑問を抱いているのかも定かじゃない、、

でも、、悲しい

「ほーら、足を舐めてくださいな、へ〜んたい奴隷さん」

「、どうして、、、ひぐ、いや、、です、、ひぐ、、、ごしゅじんさま、」

「変態奴隷に拒否権はありませんわ〜」

「、そんな、、ひぐ、、、えっぐ、、」

「早くなさいっ！！！！」

突き出された足を持った、、口で舐められる高さまで持ち上げて、、見つめる

変態と言われ、、奴隷と言われ、、、

口の中は涙の味でいっぱい、どうせ足を舐めても、この味が変わることない

もうどうして自分が泣いているのかもわからない、、どうしてセシリアに罵倒されなくちゃいけないのかもわからない

頭の中がぐちゃぐちゃで、、、、言われるがままになってしまいそう、、

寧ろ、言われるがままの方が楽なのかもしれない、、そうすれば、、恥辱を受けるだけで済むなら・・・

僕は口を――――

「安心してください、、上手くできたら、、またご褒美、、次はもっと気持ちいいこと、、してさしあげますわ・・・」

その屈辱を味わう直前、半ば強制的に動くこの体の中に

――――少しだけ自分の意思が混じった

後日談っ！

「ただ～いまー」

寮の廊下から、扉を開けば別世界。

足元を覆う高級カーペット、その奥にどかどかと陣取る超高級プリンセスベッド、、ベッドの周りにカーテンが付いてるやつ、、キングサイズ、、、僕ともう一人がここに住んでるはずなのに、、一つしかベッドない・・・、、視線を移せば食器棚、その中見えるのは超々高級ティーカップ他もろもろ。

と、見慣れてしまった光景を今更眺める必要はないっ！

今は奴が帰ってくる前に早く――――

1　シャワーを浴びて汗を流さねば！！

2　・・・メイド服、、着なきゃね

1

――――早く、シャワーをして汗を流さねば！！

今は放課後！いつも通り奴とＩＳの訓練を終えてほんのりと汗が漂う体なのだ！！

おかしいことはない、焦ることはない、、アリーナのシャワーを使わなかったというだけの話、、、

だが、、思い出せ、、今朝、、奴のとった言動を――――！！

『一夏さん、今日は部屋のシャワーを使ってもらえます？』

『ん？どうして？』

『い、いえ、、ちょっとだけですわ』ニヤニヤ

『うん、、いいけど・・・？』

あのニヤニヤ顔っ！！

何が『ちょっとだけ』なんだ！！絶対何かよからぬことを企んでいる！

幸いにして奴は現在、呼び出しくらい中。

アリーナを出た途端、山田先生に捕まってしまったのだ、、、、すんごくションボリしてたな、、、ちょっとかわいそうだ、、

いやいや、早くシャワーを

「い～ちぃ～か～さんっ！」

「ひゃ！」

その背中ダイブは紛れもなく、、僕の、、こ、、婚約者。

予想以上にセシリアの帰りは早かった。

「おかえり、セシリア」

「ただいまーで～すわ～」

僕の首を支点にクルクルと回りだす、、むぅ、セシリアはちゃっかり制服に着替えている。僕はまだＩＳスーツに上を羽織っただけなのに、、そこはかとなく嫌な予感

「呼び出しはどうだったの？」

「ちょっと生活について聞かれただけですわ。エッチはいけませんとか」

「あははー、今度は僕が呼び出されそうだー」

いくら国際的に僕とセシリアの結婚が認められているとはいえ、学校側にも規則はあるのだ。

・・・そんなことより今は、まだシャワーを浴びていない汗っぽい僕の体に、、抱きついているセシリアを

「ご、ごめんセシリア、、まだシャワーしてないから汗が」

瞬間、セシリアはヒュンと僕から飛び退いた。

・・・まるで僕がそう言うのを待っていたかのように

「はぁっ！どうしてわたくしは気付かなかったのでしょう！」

わざとらしく大げさに、ありもしない太陽に向かって両手を広げるセシリア。

「訓練後、いつも一夏さんはこんないやらしいフェロモンを発しているというのに・・・」

握りこぶしで地面を仰ぐ

「みすみすそれを排水溝に流していただなんてっ！！」

また天に向かって両手を広げた、、今度はさっきの太陽とは別方向だ

「というわけで一夏さん」

「へ？」

・・・・・・・・

「脇をにおぐな～っ！」

「くんかくんか」

「あぅ、、恥ずかしいよぉ～」

「一夏さんがこんないやらしい液体を出すからですわ」

「いやらしくないっ、ただの汗！」

「汗じゃありませんわ、、フェロモンですわ」

僕を立たせたまま、くんくんしてくるセシリア。しっかり両腕を腰に回されて僕が絶対に動けないホールド状態が形成されてしまっている。

くんか、くんか、くんかくんか

・・・セシリアはシャワーを浴びたばっかりだ、、髪がまだ濡れてて、、すごく良い匂い。そのことが尚更、汗を嗅がれることの羞恥心を増大させていく

「うぅ～、、だめぇ」

「くんか、くんか」

「顔を押し当てないで～」

「一夏さんのフェロモン気持ちいいですわ、、くんかくんか」

「フェロモンなんて出てない～っ」

不意にいい匂いが遠ざかった。

「ふぇ？」

セシリアが僕の体から離れていく。

顔を下に向けて、しばらくそのままで固まる。

「ど、どーしたの？」

「、、一夏さんが本気で嫌というなら、わたくしは止めますけど、、」

顔を赤く染めて、、上目使い。

「え、、え？」

「すみません、、いくら愛情表現といってもやり過ぎましたわ」

「い、いやっ、べべべべ別に」

「いくら一夏さんといえども、わたくしに汗の匂いを嗅がれるのは苦痛でしか」

「ううん！全然苦痛じゃないよ！！」

「え・・・」

「ちょっと恥ずかしいだけで！むしろ嬉しいよ！セシリアに汗の匂いを嗅がれると！」

「そうでしたか、なら続きを」

ケロっと元の表情に戻り

再びホールド、、この間約０、５秒

しまった！これはセシリアの常套手段ではないかっ！！

「ん、、くんくん、、」

うぅ～、もう手遅れ～っ！

「はむ」

「ひゃあ！かかかか、噛まないで！」

「やっぱり一夏さんはうす塩味に限りますわ」

「人をポテトチップスみたいに言うなっひゃん！」

「シャワーの後の一夏さん牛乳は格別ですからね～」

セシリアの手があらぬ所に伸びて

「え、ちょちょちょっと待って」

注意されたばっかりなのに・・・

「ふーふふーふーんーふーふふっ」

「だだだ、ダメっ！そそそれ以上は許さ」

「あらぁ？体は正直ぃ？」

「うぐぅ、せめて体洗ってからぁーーーー！！」

2

早くメイド服着なくっちゃねっ！

「むふふ」

今は放課後、アリーナが使えない今日はコスプレご奉仕Ｄａｙなのだ！

べべべべ別に好きでメイド服を着ているわけじゃない、、セシリアがどうしてもって言うから・・・

いや、、白状しよう、好きなのだ

ああいう服着て、セシリアに可愛い可愛いって舐め回してもらうのが大好きなのだ・・・

抱きしめられて、、スカートの中に手を入れられて、、、胸の中も触られて、、気持ちよくされて、、うぅ、、

口では”いやいや”言っておきながら、、体はもっとされたい、、

それはセシリアも僕も知っていること。

えへへ、、今日も可愛いって言ってもらえるかな。

顔がにやけているのも気づかず、クローゼットを開ける。

ナース服、、チアガール衣装、、巫女服、Ｓコスチューム、、チャイナドレス、

などなど、僕が着る時もあればセシリアが着る時もある。その中で僕はもっとも着用回数の多いメイド服に手を掛けた。

シュルシュルと一人で服を脱ぐ。いつもセシリアにニヤニヤ見られながら脱ぐんだけど、、、一人でするのは初めてで、新鮮な気持ち。今セシリアは山田先生に呼び出しくらい中、もうすぐ帰ってくると思う。

ふかふかお姫様ベッドにお尻をついて、やたらと長い黒の靴下を――

あの医務室の一件の後、僕の手を引いてくれたのは紛れもなくセシリアだった。

禁忌を犯して、どう責任とろうーとか考えてた僕を連れて走り出し

てくれたのだ。勿論比喩表現ですけど。

その医務室から翌日、セシリアは全世界に向けて僕との結婚を発表。
学校もイギリスも日本もみんな慌てたのに・・・

『セシリア・オルコットと織斑一夏が結婚すればいいだけですわ』

とか言って、、勝手に学園で記者会見。

全世界に流れるテレビ生中継で、、キス、されてしまった。

そして、忘れちゃいけないのがもう一勢力、、、、姉です。

僕の家へ二人して呼び出されました。あれほど玄関を開けるのが恐かった時はない。

待ち受けていたのは、案の定、鬼の角を生やした、、姉さん、織斑千冬。

、、その怒気だけで人を殺せそうだったけど、そこでもセシリアはひるまずに言い切ってくれた。

『わたくしは織斑一夏と結婚します』

それで

『表に出ろおおおっ！！オルコットオオオオオオオオ！！！！！』

家の前でガチの殴り合い喧嘩が始まる。

二人とも女とは思えないほどの暴言を吐きながら、拳と拳で語り合い、、止めようとする（婚約者・弟）をも蹴っ飛ばしてボカスカ、ボカスカと。

喧嘩は夜通し続いたけど、、、セシリアは立っていた。

セシリアさん、、それ、普通は僕が君のお兄さんとするところだよ・・、、セシリアに兄弟はいないか。

そして明け方、僕はふらっふらになったセシリアを支えた。

『、、いやだよ、こんな、セシリアは、、見たくないよ、』

『、いち、か、さん、、わたくしのこと、、好き、、ですか？』

そこで初めて気付いたんだよね

僕はまだ一度もセシリアに『好き』って言ってなかった

都合よくセシリアが振り回してくれるから忘れてしまっていた

セシリアはいっつも僕のこと好きって言ってくれてたのに、僕は恥ずかしがるだけで、ちゃんと答えたことは・・・
ずっとそれを気にしていたのかもしれない

だから

『好き、大好きっ、、セシリアのこと愛してるから!!!!』

――――最後の仕上げ、メイドさんカチューシャ！

黒と白のひらひらが付いたこれを頭に装着しーーー完成!!

黒のニーソックスに包まれたシャープなライン（セシリアに段々脱がされていくんだけど、何故か靴下はとられない）
ふりふりスカートとの間には、見る者をそそらせるエッチな太もも（まあ、セシリア以外には絶対見せないけど）
腰の細さを際立たせる純白エプロンに背中のリボン（このリボンが好きなの！）
ちょこっとだけだけど確かにわかる胸の膨らみ（ぎ、偽装胸だよっ!、、コスプレという名目でセシリアの下着を、、えへへ）

「ふふふ」

僕は笑う

鏡に映るメイドを見て

思い人の笑顔を想像して

可愛いと言われると思って

早くいちゃいちゃしたくて

その人の温もりを感じたくて

これからのセシリアとの未来を視て――――

――――僕は笑った。

ガチャ

セシリアが帰ってきた

よし、今日は僕の方から飛びついてやろう

「ただ～いま～、でーすわー」

「セシリア大好きーーーーーーーっ！！！！」

「ええっ！？」

次回番外編：『セシリア「次は千冬さんを我が軍門に」』に続くよっ！

Ｉｆ　１６話　セシリア「一夏さんは我が軍門に下りましたわ」（後書き）

一夏「終わったよ～、これでｉｆ話は終了ー！」

蘭「オメデトウゴザイマース」

一夏「なにゆえカタコト？」

蘭「ははははー、ははははー、私ルートとセシリアさんルートの扱いの差っ！！」

一夏「ん？」

蘭「おかしいでしょう！！どうしてセシリアさんルートは分岐があるんですか！？そして次回番外編に続くとか書いてるし！！」

セシリア「需要の差ですわ」

蘭「こらーっ！このコーナーに出てくるなー！ここは私だけの専売特許！！そしてしれっと確信めいたこと言わないでください！！」

セシリア「い、いっぺんにすべてツッコマれましたわ・・・」

一夏「それは五反田家の伝統芸だから」

セシリア「そ、そーでしたの」

箒「私ルートがないのだが・・・」

一夏「この箒さんは本物だよ、作者代理は@がついてるから」

箒「なに意味のわからないことを言っているんだ」

蘭「箒さんは本編で優遇されてるからいいでしょう！！」

一夏「はいはい、込み入った話は次回のキャラクター紹介でやってねー」

セシ・箒「ばいばーい」

蘭「もっと私ルートに選択肢をーー！！えっちしーもがもが！！」

ズルズル

第一回　キャラクター紹介

一夏「よおぉし！念願のキャラクター紹介だあああああ！！！」

蘭「ドンドンパフパフ～！！」

一夏「ふぅ、、長かったよここまで、、いろいろあったよね」

蘭「読み返してみると、１話から６話あたり、、すごく短いですよね」

一夏「どうして６話をあんな一人称にしたのか」

蘭「いやいや、あれは一夏さんの謎性がアピール出来たからいいですってー」

一夏「そしてジャグリング要素は本当に必要だったのかと悩む作者」

蘭「必要ですよ！！この物語の肝と言っても差し支えありませんよっ！！」

一夏「挙句の果てに番外編で発覚してしまう新事実、、僕はヴァイオリニスト」

蘭「えっと、基本的に番外編でも過去の設定は変わらないです、はい」

一夏「今のところ、Ｉｆ話のエッチ率１００パーセンツッ！！」

蘭「ここでいう『エッチ』とは、思春期の少年少女が考えるような、ちょこっとキスするみたいなやつなので、本当のエッチはしてないです大丈夫です」

一夏「夜のベッドに括り付けられる男の娘こと僕、、その魅惑の瞳の持ち主は金髪イギリス人セシリ」

蘭「もうこれセシリアさんルートの宣伝じゃないですか！！」

一夏「ふぅ、、始めようか蘭ちゃん」

蘭「一通り言いたいこと言ってさらっと本題に戻りやがったぜ！」

一夏「キャラクター紹介一人目！！まずはこの人っ！」

ガラガラ、キーコキーコ
（等身大の本人そっくりマネキンが運ばれてくる構図、台車で）

蘭「ほお～、よくできた人形ですね～」

一夏「ＩＳ制服姿の僕のマネキンだ」

蘭「・・・お持ち帰りしたい」

一夏「というわけで一人目は今作の主人公、僕こと織斑一夏を紹介するよ」

蘭「言わずと知れた世界で唯一の男性ＩＳ操縦者です！」

一夏「原作とだいぶ変わってるからねー」

蘭「どこの世界にセシリアじゃなくて織斑千冬に決闘を申し込む一夏さんがいるのでしょうか」

一夏「もう、そんなに褒めないでよ照れるじゃん／／／」

蘭「・・・」

一夏「まずは視覚的情報から、、、身長１７６センチ、体重６４キロの細身の長身。原作一夏君とは相対して知性的なイケメンだよ！！」

蘭「・・・ふーん、、へーえ、、１７６センチ、、ふーん」

一夏「うぅ」

蘭「どうして１７６センチの人が私と目線が合うのでしょうねー、、不思議ですねー、アサヒしちゃってるんですかー？」

一夏「わかったよ！ちゃんとするよ！！アサヒるとか言わないでよ！！！」

蘭「まったく」

一夏「身長百五十は、、身長１６３センチ、体重４２キロ、ある中華娘と一緒に街歩いてたら男にナンパされたことあるくらいのイケメンです」

蘭「若干の詐称とイケメン発言は見逃しましょう」

一夏「、、ふんだ、、百六十くらいあるよ、、あの測定のおばちゃんが僕の頭を強く抑え過ぎなだけで、、、」

蘭「すんごくふんわり、頭に乗せてくれたと思いますよー」

一夏「、姉さんに測ってもらったら１６３って言ってくれるもん、、」

蘭「測ってもらった後に『姉さん大好きー！』とか言って抱きついてるんだろうなー」

一夏「体重だって調子のいい時は、、４２くらいあるし、、女の子みたいな顔ってことは、、イケメンってことだし、、」

蘭「今『イケメン』の定義がすごく捻じれた気がします（っま、一夏さんはカッコいいと思うけど・・・）」

一夏「うむ！詐称などなかった！」

蘭「はいはーい、じゃあ一夏さんの経歴について」

一夏「う～んっと、小学時代は箒と道場で毎日お稽古」

蘭「後から出てきますけど、箒さんの過去もだいぶ変わってます」

一夏「小学校の最後の一年と中学の二年までは二人目の幼馴染と仲良くなって」

蘭「まだ出てきていないアノ人ですねっ！」

一夏「そして蘭ちゃんとは中一の冬から」

蘭「タイトルにもある通り一夏さんの出身中学は私と同じ」

一夏「聖マリアンヌ学園だね」

蘭「伝統ある女学園だったのですが、ＩＳ発表直前くらいに共学になりまして」

一夏「女尊男卑の世界になる、それまで衰退気味だった女学園の需要が増える、学園も元の女学園に戻そうと思ってはいるんだけど」

蘭「それがなかなか戻らないんですよねー」

一夏「そんな時、僕が入学したということです。マリアンヌ学園については次回番外編、物語を１，３倍楽しむための、で詳しく解説する予定だよ」

蘭「例のアノ人が登場しまーす」

一夏「最後、僕の内面的な部分についてだけど・・・」

蘭「うーむ、本編でも謎めいていますからねえ、１６話の冒頭とか。結局、千冬さんＶＳ一夏さんは見られなかった」

一夏「僕の過去に何があったのか！？」

蘭「私との関係性、そして時折出てくる『蘭ちゃんの涙』とは一体！？」

一夏「『多才になりたいから』それは、、自己の中身を改変する破滅の呪文だった・・・」

蘭「本編をご期待ください、では次のキャラ紹介へ」

一夏「次のキャラクターは――――」

ガラガラ、キーコキーコ

（等身大の本人そっくりマネキンが運ばれてくる構図、台車で）

？？「ったく、、どうしてあたしがこんな役割なのよ」キーコキーコ

蘭「おお！私だ」

一夏「本人そっくり～！いつものピンクのふりふりワンピースだー！」へ゜タへ゜タ

蘭「質感も本当に人間の肌みたい、、これが科学の力」へ゜タへ゜タ

一夏「ほら、ここなんか本物の感触だよ～」

蘭「ひゃんっ！い、一夏さん！これは本人です！」

一夏「えへへ～、らーんちゃんっ！」

蘭「もお～、一夏さんは～！、、わ、私だって一夏さんのいろんな所触っちゃうんだから！」

キャッキャ、ウフフ、キャッキャ、ウフフ

ペタペタ、キャッキャ、ウフフ、ペタペタ　ウフフ、

キャッキャ、ペタペタ、キャッキャ、ウフフ、ペタペタ

一夏「はあ、、はあ、、バカップルはここまでに、、しようか、、はあ」

蘭「そ、、そうですね、はあ、はあ」

一夏「はい！本作のメインヒロイン（？）の蘭ちゃんだよっ！」

蘭「本名は五反田蘭で五反田食堂っていう定食屋の娘です」

一夏「僕は幾度となく『蘭ちゃん』と戦ったことがあるよ」

蘭「五反田食堂のメニュー暗記対決とか、早押しお勘定クイズとか、いろいろやってますよね」

一夏「まったく、奴らは僕に暗記対決を挑んでくるなどと、、、僕が生涯その手の勝負で負けたのはただ一人のみ」

蘭（誰だろう？千冬さんかな、、んーでも違うような）

蘭「マリアンヌ学園中等部では生徒会長という役職に就いています」

一夏「思い出すなー、ゲリラ的荷物検査」

蘭「一夏さん大暴れでしたね」

一夏「もう、そんなに褒めないでよー／／／」

蘭「・・・褒めてない」

一夏「弾っていうお兄さんがいるんだよね」

蘭「一夏さんと同い年です」

一夏「いや～、おたくの弾君とは良くさせてもらってますよ～」

蘭「『よくさせてもらってる』？詳しく聞きたいですね一夏さん」

一夏「・・・いや、え、うん、、蘭ちゃんの視覚的情報は」

蘭「こらーっ！話せーー！！どうしてお兄と仲良くなれたんですかーっ？？！」

一夏「えっとね、弾君とはね本をね、、、、やっぱり重要な事だから言いません」

蘭「っち、、まさか、一夏さんが急に下ネタを使いだすようになったのは・・・っち！」

一夏「はいはいはい！身長は１５０台の後半で体重は僕と同じくらいだよね！！」

蘭「あとでしっかり聞かせてもらいますからね！」

一夏「うぅ」

蘭「・・・顔はどうなんですか？」

一夏「え、、えっと、、その、ぼ、僕個人の主観だけど、、か、可愛いよ／／／」

蘭「／／／、、あの、すみません、最後の四文字をもう少しハッキリ言ってほしいです・・・」

一夏「よスラッシュスラッシュスラッシュ」

蘭「ちきしょおおお

一夏「ああもう、サンドバック壊しちゃったし！」

蘭「ふ、ふんっ」

一夏「ごめんごめん怒らないでよおー、さっきは照れ隠しでボケただけだから～」

蘭「つーん」

一夏「可愛いから！マイエンジェルだからー！」

蘭「・・・うむ、許す／／／／／」

一夏「よかった、、蘭ちゃんと僕の関係も徐々に本編で明かされていくのでお楽しみください」

蘭「つ、次のキャラクターへ」

一夏「三人目は誰かな――――？」

ガラガラ、キーコキーコ

（本人そっくりマネキンが台車で運ばれてくる構図、）

？？「ったく、、あんたは、、重いのよ、、」

一夏「おお！セシリア！」

蘭「金髪ブロンドヘアーに白のＩＳ学園制服がよく映えます！！」

一夏「腰に手を当てて髪を内側からサワァッとするという瞬間だね」

蘭「雰囲気出てます！」

一夏「いや～、一段とリアルに出来てるな～ このマネキン」ペタペタ

蘭「すごいですね～・・・ん？今まばたきしたような」ペタペタ

マネキン「・・・」

一夏「まっさか～、　マ　ネ　キ　ン　がまばたきなんてするわけないよー」ペタペタ

蘭「そうですよねー！まして足の裏こちょこちょとかしても眉ひとつ動かないはずですよね～」こちょこちょ

マネキア「・・・く・・む・・・」

一夏「やっぱりマネキンだよ、仮にマネキンじゃなかったとしてセシリアが足の裏こちょこちょ程度で落ちるはずないでしょ～」

蘭「足の裏と脇を同時に攻めましょう」

一夏「」こちょこちょ

蘭「」こちょこちょちょちょちょちょ

マネリア「くぅ・・・・ぬ・・・」

蘭「む、耐えますねセシリアさん、、」

一夏「よほどの決心でマネキンになったんだろうね」

蘭「何としてでも堕としたい」

一夏「任せて」

マネキン「・・・」

一夏「ご、ご主人様ぁ、、もう、、耐えなくていいですよぉ」

セシリア「安心なさい、あなたの主は絶対に堕ちませんわ、、何を隠そうわたくしはセシリア・オルコットですのよ!!」

・・・

蘭「というわけで、セシリアさんこんにちは～」

セシリア「こんにちはーでーすわ～」むにむに、むにむに

一夏「セ、セシリア、、羽交い絞めにして頬っぺたをむにむにする

のは止めてもらえますか？」

セシリア「ん～？一夏さんは足の裏をこちょこちょされたいんですの～」

蘭（すごいオーラを放っている、、生きている物の大概は彼女の声に従ってしまいそうだ・・・）

セシリア「蘭さん、足の裏を」

蘭「は、はいぃっ！！」

一夏「だだだだダメ！！こちょこちょは無理！足の裏は無理！！」

もがもが

セシリア「本来ならばわたくし以外の女性が一夏さんに触れることはありえないのですけど、、蘭さんは一夏さんの長い　友　人　と聞きましたから・・・、、、、まして、わたくしの足の裏をこちょこちょした人間の末路なんて・・・」

蘭（わわわ私も脅されているーーー！！）

蘭「すぐにやらせていただきます！！」こちょこちょ

一夏「え、、え？蘭ちゃん待って！ひゃ、、ひゃはははっはっはっはっはははまってははやめははははｈｈ！！」

セシリア「ふふふ」

・・・・

セシリア「では改めて今作のメインヒロインのセシリア・オルコットですわ」

蘭「さくっと私の位置を奪われた気がしますが、よろしくお願いしまーす」

一夏「はぁ、、はぁ、、、」↑こちょこちょされすぎて動けそうにない

蘭「ええと、手元の資料によると、身長は１５０台の後半で、体重はトップシークレットとのことで」

セシリア「どうして一夏さんの方が軽いんですのよ・・・」

一夏「、、セシリア、の、、体重は、、よんじゅっげほあああ！！！」

セシリア「またこちょこちょされたいんですの？」

蘭（怖い、、後ろ回し蹴り恐い、、）

蘭「セシリアさん趣味などは？」

セシリア「原作と一緒ですわね、ピアノ、ヴァイオリン、クラシック鑑賞、創作料理、、ｅｔｃ」

蘭「ほおほお（創作料理の下手さにはまだ気付いていないのか・・・）」

蘭「イギリス代表候補生で、専用機はブルー・ティアーズというのも変わらず」

セシリア「ええ、ＩＳ関係については原作通りですわ」

蘭「ははは…、入学して一週間で偏向射撃しかけそうになったのに、何を言ってるんですかー」

セシリア「本当ですわ、どうしてわたくしの偏向射撃（ゲイボルク）は当たらなかったのでしょうか」

蘭「エ・レ・キ・ジ・ブ・ルですよ！！変なルビ振らないでください！！」

セシリア「これが噂の五反田家の伝統芸能ですわねっ」

蘭「一夏さんが勝手に言ってるだけですよぉ」

セシリア（一夏さんほどではありませんが、、、この子もなかなか嗜虐心をそそらせますわ）

蘭「となると、本作のセシリアさんと原作セシリアさんの最大の違いってやっぱり」

セシリア「ええ、父のことは尊敬していますし、、、男嫌いは、、綺麗な自分を信じつづけるための嘘でしかありませんでしわ」

セシリア「その嘘の愚かさを教えてくれたのが一夏さん・・・」

セシリア「一生守り続けますわよ、、あの男か女かわからないような、、ＩＳ操縦者をね」

蘭（・・・なんか、かっこいいな／／／）

一夏「ねえねえ！セシリア！体重計持ってきたよー！！」

一夏「はい僕３８，２ー！次セシリアだよセ・シ・リ・ア！！」

一夏「え？何？乗れない？恥ずかしい？僕より重い？」

一夏「あはは！じゃあ仕方ないなー！女の子だからなー！」↑今世紀最大にウザい一夏君

蘭・セシリア「」ブチッ！！！

一夏「え、、、ちょっと待って冗談だよ」

一夏「うそ、止めて、無言ですごい力を加えながら僕をロープで縛らないで」

一夏「ごめんごめん謝ります！許して！」

一夏「いや！僕を壁に貼り付けて腕をカシャンってしちゃだめ！！」

一夏「全自動全身くすぐり機？だめだめだめ！！恨みからは何も生まれない！！」

一夏「動けないよ、全身どこも動かせないよ、なのに全自動全身くすぐり機は迫ってくるよ、、」

一夏「ごめんなさい！！もうしまいいややっやあはははははははっはははっはっはっはhっだめはっはやめやめははっはは！！！！！」

セシリア「当然の罰ですわ」

蘭「本編の一夏さんはこんなにウザくないのでご安心ください」

セシリア「というわけで、過去設定以外は基本的に原作と同じですわね」

蘭「その過去が一番重要だと思うのですけど」

セシリア「それは確かにですわ」

蘭「っあ、ベンチコートの話もオリジナルじゃないですかっ！」

セシリア「そういえば、、でもそれは過去の改変に伴ったものだからセーフ」

蘭「・・・結構変わってるじゃないですか、大体今だって」

セシリア「止めてほしいですかぁ～？一夏さん」

一夏「ひっはっははははｈ、、、と、、め、、て、はひひはっはいっひいいｈっはっはっはっはっはｈ！！」

セシリア「きこえませんわね、、もっとはっきり言ってもらわないと・・・」

一夏「ひひぃひ、と、、めて、、ひひはっはっはっはあひはいあはっはははっはははｈ！！」

セシリア「ふ～ん『とめて』？タメ口？」

一夏「、、、と、めて、、くら、ひゃいはｈっはははははっははは
っはははっは！！」

蘭「原作のセシリアさんはあんなにＳじゃない、、どちらかという
とＭのはず・・・」

セシリア「それは違いましてよ蘭さん」

セシリア「原作のわたくしもきっとあの一夏さんを見れば、、虐め
たくなりますわ」

セシリア「惚けた顔で、止めて止めて、と懇願する一夏さん」

セシリア「絶対的に覆らないこの状況、、嬲って躾けて調教して」

セシリア「徐々に自分のものへとしていく快感」

セシリア「御覧なさい、あの一夏さんを」

一夏「ひぃひぃ、、とめてよぅ、、らん、ちゃん、、、ひｈｌはっ
ははははははははははｈ！！！」

蘭「ご、ごくり・・・！」

セシリア「虐めたくなるでしょう、嬲りたくなるでしょう、躾けた
くなるでしょう」

蘭「は、はい、、胸がゾクゾクします」

セシリア「それは女であるならば誰しもが抱く感情ですわ」

セシリア「わたくしもそれの例外でなく、、わたくしはわたくしの信条に肩入れしただけですわ」

蘭「自分の、信条に、、肩入れ・・・」

セシリア「さあ！二人で一夏さんを苛めましょう！」

蘭「はい！！」

セシリア「ふふふ、、（まずは一歩、、蘭さんもいずれわたくしのモノに）」↑今世紀最大にあくどいセシリアさん

◆◇◆◇◆◇◆

一夏「はあ、、、はあ、、次の、、キャラクター、、紹介、、しよう、、はあ」

セシリア「シャキッとなさい！男でしょうに！」

一夏「、、体が、、むずむずする、、」

蘭「では、本日４人目はこちらー」

がらがら、きーこきーこ
（等身大の本人が台車で運ばれてくる構図）
？？「、この、台車は、、滑りが、悪いのよ、、、重い、、」

セシリア「箒さんですわね、まあ、良くできたマネキンですわ」

蘭「見事な紺袴にポニーテール、これでこそ日本人です」

一夏「胸おっきいなっ痛い！！足踏まないでよ二人ともっ！！」

マネキン「・・・、・・・」

蘭「箒さんはこの小説で大きく過去が変化している人物の一人ですから、詳しく説明しませんとね」

セシリア「そうですわ、まさか箒さんがＩＳ搭乗時間３００時間越えだなんて・・」

一夏「全体的な雰囲気も原作より落ち着いてる、大人っぽくなってるのが今作の箒さんです」

蘭「身長はその雰囲気あってか高めに見えるんですけど、実は」

マネキン「ちょーっと待たんか！！貴様らっ！」

一夏「っわ！マネキンが喋った！」

セシリア「ぽぽぽ、ポルターガイストですわっ！！」

マネキン「マネキンじゃない！本人だ！！篠ノ之箒だ！」

マネキン「どうして私は真面目に紹介するのだ！？セシリアみたいにこちょこちょとかないのか！？」

セシリア「みなさん、箒さんはこちょこちょされたいそうですよ」

一夏・蘭「「サー！イエッサー！」」

箒「へ？」

箒「ちょ、ちょっと待てこちょこちょされたいわけじゃないぞ」

箒「手をワキワキさせて寄ってくるなぁ！セシリア羽交い絞めするんじゃない！！」

箒「ひゃ！そそそ、そんなところ触るな！！手を動かすんじゃない！！」

箒「足の裏は無理！無理！ええ！？脇もするのか！？」

箒「いや、ははははｈｋぁはｌはあはっははははははっははひひひひっひひｈは」

・・・・・

箒「はあ、、酷い目にあった」

一夏「お疲れ様、箒。これで顔を拭いて」

箒「ああ、ありがとう一夏」

一夏「えへへ／／／」

セシリア「ちょっと一夏さん！わたくしの時と随分対応が違うのですけど！！」

蘭「何が『えへへ／／／』なんですか！！」

箒「落ち着けお前たち、、、これがメインヒロインとその他の壁なのだ」

セシリア「メインはわたくしですわよ！！」

蘭「まさかの三人目・・・」

セシリア「ふんっ！箒さん、あなたはもうＩｆのわたくしルートを見ましたの？番外編とは思えない力の入れようでしたわ、、っま、ご自分の分岐ルートがないあなたではわからないかもしれませんけど」

蘭「わ、わたしだって分岐ルートありますよ！」

箒「、、お前たち、、哀れだな、、セシリア、お前のＩｆルートに続き予告がされているということは、本編ではセシリアルートに入らないということなのだぞ」

セシリア「あ・・・、し、しかし！少なからず一夏さんの心には一

番近いはずですわ！！」

箒「そうだな、だがお前はメインヒロインではない」

セシリア「ぐぬぬぬぬぬ！」

箒「蘭、、お前は、、まあ、、頑張れ」

蘭「どどどど、どーういう意味ですか！？私が真のメインヒロインですよ！！タイトルにも私の名前があるんですからね！！」

箒「さあ、一夏、紹介を始めてくれ」

蘭「あああああ！なんだか不安になっていくううう！！」

一夏「えっと、箒は僕の幼馴染で同門です」

箒「うむ、幼い頃の話だがな」

一夏「小学四年まで一緒だったんだけど、箒が引っ越しちゃって」

箒「そこから先はシークレットだ」

セシリア「ＩＳ搭乗時間３００越えの秘密はそこですわね」

蘭「本編１２話での意味深な発言も関係あるのでしょうか・・・」

箒「まあその辺は本編でおいおいな」

一夏「専用機はえっと」

箒「あるにはあるが現時点では出てきていない」

セシリア「ふふふ、、本編でボコボコにしてさしあげますわ・・・」

蘭「セシリアさん頑張って！」↑セシリアに懐きつつある蘭さん

箒「この私にイギリスの代表候補程度が敵うとでも思っているのか？」

セシリア「言ってくれますわね、原作のわたくしではなくてよ」

一夏「続きは本編でやってね」

一夏「次は箒の見た目の話をするけど」

一夏「身長は僕よりほんのちょーーーっとだけ高いくらいで」

箒「一夏、、私は背が低い一夏でも一向に構わないぞ」

一夏「へ、、あ、うん、、ありがとう／／／」

箒「体重は」

一夏「だ、ダメだよ！女の子が体重なんて口にしちゃっ！」

箒「？そうか？私は構わんが」

一夏「僕が構うの！！もう、箒に変な男が寄ってきたらどうするのさ・・・」

箒「どうして一夏がそんなことを気にするのだ？」

一夏「なな、なんでもないっ！／／／」

セシ・蘭「「ぐぬぬぬぬぬぬぬぬ！！」」

セシリア「なな、なんですのこの『男の娘，乙女属性：一夏　×　幼馴染，鈍感属性：箒』の図はあああ！！羨ましすぎますわ箒さん！！」

蘭「私にはあんな態度とらないのにいいいいいいいいい！！！」

箒「」チラッ

箒「っふ」

蘭「あいつううううう！！全て解って鈍感なフリしてやがるぜえええええええ！！」

セシリア「わたくしも今から鈍感ご主人様にジョブチェンジしまわわあああああああ！！」

一夏「どうして叫んでるの?あの人たちは」

箒「さあ、どうしてだろうな」

蘭「早く次のキャラクターへ!!」

セシリア「そうですわ!!箒さんのターンはお終いでしてよ!!」

一夏「じゃ、次の人は――――」

がらがら、きーこきーこ
(本人が台車で運ばれてくる構図)
??「ひい、ひい、、これが一番重いや、、ひい」

セシリア「紹介の前に、、、あの??さんは後で殺されそうですわね」

箒「口調で大体誰か想像がつくがな」

蘭「言っちゃだめですよ、次回のキャラクター紹介の時のネタにするんですから」

一夏「鈴ー、次は紹介してあげるからねー!」

蘭「言っちゃったよ!!」

マネキン「鳳、、後で■す」

一夏「姉さん！今はマネキンなんだから喋っちゃだめ！！」

マネキン「おっと、すまんすまん、つい心の声が」

・・・

箒「おおー、よく出来たマネキンだなー」

蘭「黒スーツの千冬さんですか」

セシリア「ほほほ、本人そっくりですわー」

箒「どうだセシリア？実はマネキンじゃなくて本人かもしれないぞ、こちょこちょして確かめてみるか？」

マネキン「・・・」

セシリア「しししししし、しませんわよ！そんなこと！殺されますわよ！！」

一夏「スーツ姿の姉さんはかっこいいなー！」

マネキン「ふふ・・・・」

一夏「えへへー、今の姉さんはマネキンだから抱きついても怒られ

ないんだよね～」ギュー

一夏「姉さんの体は気持ちいい、、むぎゅう～」

マネキン「ふふふ・・ふふ・・」にやにや

蘭「露骨に嬉しそうな顔してますよ、あのマネキン」

セシリア「蘭さん、、、あ、あなた死にたいんですの？」

箒「・・・知らないのかセシリア？蘭は今まで何度も千冬さんと戦ってきた強者だぞ」

箒「だから、この状況で千冬さんをおちょくるのも彼女にとっては容易い」

セシリア「え、、、、え？」

箒「番外編の蘭ルートで一夏がベッドの上の写真立ての中に自分の寝顔があったことを見つけただろ」

セシリア「え、ええ、、それで踏ん切りがついた一夏さんは蘭さんに、、でしたわよね」

箒「そこで本編の４話を思い出すんだ」

セシリア「４話？たしかＩＳ博覧会へ行く途中の車の中の話・・・・っは！！」

篝「気付いたかセシリア、あの時蘭は千冬さんに『貴様まさか自分の携帯でも神秘を記録しようとか思っていないだろうな？だろうな？ああぁんっっ！？ほう、そうかそうかさすがの貴様もそこまで落ちぶれてはいなかった。安心したぞ。では、撮影作業を開始しろ。』と言われていたんだ」

セシリア「パシャ、カシャというシャッター音の中に一つだけ・・・」

篝「そう、携帯のシャッター音『トッタノカヨ～』が混じっている」

セシリア「つ、つまり」

篝「ああ、、蘭は、、強い」

セシリア「っ！・・・（蘭さん、、あなたを恋敵として認めますわ、、そして、その上であなたをわたくしのモノに――）」

蘭「やっても大丈夫ですよ～、一夏さん」

一夏「そんなことしたら怒られちゃうっ」

蘭「ほおら耳たぶ噛みましょうよ、今しかこんなこと出来ませんって！」

一夏「で、でも、、恥ずかしいし、」

蘭「こんなチャンス二度とありませんよ～、後悔しますよ～、、はやくはやく！」

一夏「、、うん、、姉さんの耳たぶ噛む」

一夏「はみ」

マネキン「ひゃ／／／／／／」
蘭「あれれえええええ！！！？？？顔が真っ赤ですよおおお！！千冬さあぁぁっぁぁぁ～ん！！！！」

千冬「こんんののののおお！！！五反田貴様あああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

ダダダダダダダダダダダダ！！！シュン！ヒュン！ばしゅ！ダダダダダダ！！

（一夏を盾に器用に逃げ回る蘭と、それを追いかける千冬の構図）

セシリア（――わたくしのモノに出来るのでしょうか？）

箒「蘭、やるな」

千冬「五反田止まれえええええええええええええええええ！！！！！」

一夏「やっぱり怒られてるよぉ～！蘭ちゃん！！」

蘭「素直に謝りましょうか・・・」

セシリア「あああああ、謝っても許してなんかぁぁぁぁぁぁ！！？！？」

箒「落ち着けセシリア、あれは罠だ」

蘭「千冬さん!!止まって下さい!!謝りますから!!」

一夏「お願い姉さん!!ちゃんと謝るから!!」

千冬「・・・ほーお、、やってみろ」

一夏「え、えっと、、さっきは、」

蘭「謝る前にですね!!千冬さんに見てほしいものがあるんですよ!!ね、一夏さん!!」

一夏「え、、うん、、え?」

千冬「なんだ?、、つまらないことなら・・・」

セシリア「あわわわわわわ!!助けないと!蘭さんを助けないと!!殺されてしまいますわああ!!」

箒「・・・」

蘭「じゃあ、今から一夏さんが『弟に耳たぶを噛まれて赤面する姉』のモノマネをしま~す」

千冬「」ブチィィッィィイィ!!!

蘭「はみ」

一夏「ひゃ／／／／／／」

千冬「五反田あああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

◆◇◆◆◇◆◇

セシリア「ご、ごほん！では司会進行役のお二方が後ろで気を失ってしまいましたので、かわりにこのセシリア・オルコットが代役をさせていただきます」

千冬「安心しろ、もうすぐ起きる」

箒「絶妙な力加減です、千冬さん」

千冬「っふ、まあ、五反田のおかげで一夏に耳たぶをはみはみされたのだからな」

セシリア「て、手元の資料によりますと！」

セシリア「本名織斑千冬、身長１６０台、体重は日によって変わるそうで」

千冬「ああ、違いない」

セシリア「本作ではブラコン成分が増大しているような気がしますが、、その辺どうなのでしょう」

千冬「お前がさっき言ってたことと一緒だろう」

箒「自分の信条に肩入れした、、、」

千冬「ああ、弟を愛するのに恥じることはないからな」

セシリア（す、清々しいほど気持ちの良いブラコンですわ・・・）

箒「本編でセシリアと一夏と戦いましたが、その辺は何かありますか？」

千冬「そこに触れると本編のネタバレになってしまうぞ」

箒「私の勝手な予想ですが、あれは千冬さんではな」

セシリア「ストップですわよ！！そういう会話は本編でしてくださいな！！」

箒・千冬「「ああ、すまんすまん」」

セシリア「ハモったー！？」

・・・

箒「原作の千冬さんとこの小説の千冬さんで、、目立った違いはありませんね」

セシリア「極度のブラコンも一夏さんの過去改変に伴った仕方のないことですし」

千冬「だ・れ・が、、ブラコンだとオルコット？」

セシリア「ひいいい！！ももも、申し訳ありません！！」

千冬「冗談だ」

セシリア「っほ」

箒「あ、思い出した、原作との違い」

千冬「？」

箒「セシリア、お前は何故千冬さんのことを『織斑教諭』と呼ぶのだ？原作は普通に『織斑先生』だぞ」

千冬「ああ、私も気になっていたな」

セシリア「そ、それは・・・」

箒「重要な事か？」

セシリア「う、、本編でよろくお願いしますわ」

箒「そうか」

千冬「二人が起きたぞ」

・・・

一夏「はい！これにて『第一回、面識ないのにみんな友達！どきどきわくわくのキャラクター紹介っ！！』はお終い！！」

蘭「そんなタイトルついてましたっけー？」

一夏「じゃあ、最後に軽く本編の予告をしてドロンするよ！」

蘭「まずはセシリアさんよろしくお願いしまーす」

セシリア「夜の医務室で結ばれた二人。待っていたのは輝かしい学園生活と、、、、姉！」

セシリア「一度は拳で語りあったものの、まだまだその関係はギクシャクで」

セシリア「そんな時、わたくしは考え付きすわ！！次は千冬さんにお弁当を作ろう、、と」

セシリア「次回！物語を1，3倍楽しむための！！『セシリア「今度は千冬さんを我が軍門に』をお楽しみに！！」

セシリア「ふふふ、、勿論わたくしと一夏さんがいちゃいちゃするだけのシーンもありますわっ！」

蘭「はい、ありがとうございましたー！本編の予告って言ってるのに早速番外編の予告しちゃいましたー！」

一夏「次こそ本編の予告、箒よろしく」

箒「首尾よくセシリアを落とした主人公織斑一夏」

箒「彼の心の内、彼にとって『影』となるものが見え隠れする中で、二人目の幼馴染と再会する」

箒「――約束――――彼は覚えているのだろうか？」

箒「第二章『二人目の幼馴染と――――』をお楽しみに」

蘭「おお～！すごくかっこいい予告だ！」

一夏「じゃ最後に、１７話の予告を姉さん」

千冬「謹慎生活という名の休養期間、その最終日、、今日もセシリアは攻めに出る」

千冬「予定調和と言わんばかりに私はそれを発見し」

千冬「セシリアはルパン三世ばりの逃走劇を繰り広げる」

千冬「そんな中、彼が考えていたのは約束の土曜日のことだった――」

蘭「えへへ～、一夏さん私の家来るの楽しみだったんだ～」

一夏「あはは、、、真相は本編で・・・」

蘭「？」

一夏「というわけでお終い！！」

蘭「また今度、物語を1，3倍楽しむための、で会いましょう！！」

第一回　キャラクター紹介（後書き）

一夏さんの容姿についてですが

本編でもここでも全く触れてません

あなたにとって最適な男の娘像で想像してほしいです

ちなみに作者はえびてんの野矢君みたいなかんじを・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1982w/

【IS】一夏を男の娘にし、かつ中学まで蘭と同じ学校に通わせるとこうなった

2011年11月10日03時08分発行